

浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

西向遺跡 1・2 次調査，富里旧堤防 1・2 次調査
大野命山発掘調査，中新田命山発掘調査

2 0 0 3

浅羽町教育委員会

浅羽町内遺跡発掘調査報告書 Ⅱ

西向遺跡 1・2 次調査，富里旧堤防 1・2 次調査
大野命山発掘調査，中新田命山発掘調査

2 0 0 3

浅羽町教育委員会

例 言

- 1 本書は、1992～2002年度にわたって行なわれた、静岡県磐田郡浅羽町地内に所在する西向遺跡1・2次発掘調査、富里旧堤防1・2次発掘調査、大野命山発掘調査、中新田命山発掘調査の報告書である。
- 2 西向遺跡1次調査は河川改修工事、2次調査は自動車整備工場建設工事、富里旧堤防1次調査は倉庫建設工事、2次調査は宅地造成工事に先立つ調査で、大野命山発掘調査、中新田命山発掘調査は歴史的遺産調査活用事業と名付け学術調査として実施した。いずれも浅羽町教育委員会が調査主体となって実施し、報告書作成業務も同じく実施した。
- 3 西向遺跡1・2次調査は1994年度、富里旧堤防1次調査は1992年度、2次調査は1993年度、大野命山発掘調査、中新田命山発掘調査は2002年度にそれぞれ実施し、報告書作成業務を2002年度に実施した。
- 4 西向遺跡1・2次調査、富里旧堤防1・2次調査は原因者負担による受託事業として実施し、大野命山発掘調査、中新田命山発掘調査は緊急地域雇用創出特別対策事業(国庫補助事業)として実施した。報告書作成業務は、町の単独事業として実施した。
- 5 2002年度の報告書作成業務の体制は次のとおりである。
主 体 者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 教育長 鈴木紘一
担 当 者 浅羽町教育委員会社会教育課 主任 山本義孝、嘱託員 木曾昌司
事 務 局 浅羽町教育委員会社会教育課 課長 原 利秋 社会教育係長 伊藤 覚
主任 山本義孝(文化財・郷土資料館担当)
整理作業員 鈴木仁美
- 6 本書の執筆、編集は山本が行なった。遺構図の編集・トレースは鈴木が、遺物の実測・トレースは木曾・鈴木が、出土遺物の写真撮影は山本がそれぞれ分担しておこなった。
- 7 本書で用いた水準は海拔、方位は座標北である。
- 8 本書に用いた土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』にもとづいた。
- 9 調査によって出土した遺物、調査に関わる諸記録は浅羽町教育委員会が保管している。

本 文 目 次

例 言

第1章 遺跡をめぐる環境	1
第2章 調査経過と成果	7
1 西向遺跡1次調査	7
2 西向遺跡2次調査	16
3 富里旧堤防1次調査	20
4 富里旧堤防2次調査	22
5 大野命山調査	26
6 中新田命山調査	34
第3章 総 括	41

図 版 目 次

- 1 西向遺跡 1 次調査
 1. 西向遺跡周辺(南上空より)
 2. 西向遺跡 1 次調査地全景(上空より)
- 2 西向遺跡 1 次調査
 1. 調査前の調査地
 2. 試掘トレンチ断面
 3. 西向遺跡 1 次調査地全景(南より)
 4. 西向遺跡 1 次調査地南側(西より)
- 3 西向遺跡 1 次調査
 1. 溝 2 土層断面
 2. 溝 6 土層断面
 3. 溝 6・7
 4. 土坑 3 土層断面
 5. 土坑 3 上面
 6. 土坑 3 完掘状況
 7. 土坑 3 遺物出土状況
- 4 西向遺跡 1 次調査
 1. 溝 1 完掘状況
 2. 溝 3 完掘状況
 3. 土坑 7 半截状況
 4. 土坑 5 半截状況
 5. 土坑 7 完掘状況
 6. 土坑 1 周辺
- 5 西向遺跡 1 次調査出土遺物
- 6 西向遺跡 1・2 次調査出土遺物
- 7 西向遺跡 2 次調査
 1. 1 トレンチ土層断面
 2. 3 トレンチ全景(南より)
 3. 4 トレンチ全景(北より)
 4. 4 トレンチ東壁柱穴
 5. 2 トレンチ全景(北より)
- 8 西向遺跡 2 次調査・富里旧堤防 2 次調査出土遺物
 1. 2 トレンチ全景(東より)
 2. 2 トレンチ西壁土層断面
 3. 2 トレンチ柱穴
 4. 2 トレンチ柱穴
 5. 富里旧堤防 2 次調査出土遺物
- 9 富里旧堤防 1 次調査
 1. 土層断面
 2. トレンチ断面
- 10 富里旧堤防 2 次調査
 1. 全景(南より)
 2. 南トレンチ全景
 3. 南トレンチ土層断面
- 11 富里旧堤防 2 次調査
 1. 北トレンチ土層断面
 2. 北トレンチ全景
- 12 大野命山
 1. 全景(東南より)
 2. 東裾(調査前)
- 13 大野命山
 1. 南トレンチ全景(北より)
 2. 内耳鍋出土状況(北群)
 3. 内耳鍋出土状況(南群)
 4. 中央トレンチ北面土層断面
- 14 大野命山
 1. 東トレンチ全景(東より)
 2. 中央トレンチ西面土層断面

- 3. 東トレンチ境溝土層断面
- 15 大野命山
 - 1. 北3トレンチ土層断面
 - 2. 北4トレンチ土層断面
- 16 中新田命山
 - 1. 全景(南より)
 - 2. 南1トレンチ土層断面
- 17 中新田命山
 - 1. 南2トレンチ全景(南より)
 - 2. 東トレンチ(東より)
 - 3. 南2トレンチ溝土層断面
- 18 中新田命山
 - 1. 東トレンチ西側土層断面
 - 2. 南1トレンチ最深部土層断面
- 19 中新田命山 東トレンチ西壁土層断面
- 20 大野命山・中新田命山出土遺物

挿 図 目 次

図 1	浅羽町の位置	1
図 2	浅羽低地を中心とした地形概念 (S=1/50,000)	2
図 3	浅羽低地を中心とした中世～近世前期の主要遺跡 (S=1/50,000)	4
図 4	近世前期の浅羽低地と富里旧堤防の調査地点	6
図 5-1	西向遺跡 1・2 次調査地点 (S=1/10,000)	8
図 5-2	西向遺跡試掘調査概要図・断面図	8
図 6	西向遺跡 1 次調査全図	9
図 7	土層断面集成図	11
図 8	土坑集成図	12
図 9	西向遺跡 1 次調査出土遺物(1)	14
図 10	西向遺跡 1 次調査出土遺物(2)	15
図 11	西向遺跡 2 次調査トレンチ位置図 (S=1/1,000)	16
図 12	西向遺跡 2 次調査地の遺構状況 (S=1/1,000)	16
図 13	1 トレンチ土層断面図	17
図 14	4 トレンチ土層断面図	17
図 15	2 トレンチ平面・土層断面図	18
図 16	出土渡来銭	18
図 17	西向遺跡 2 次調査出土遺物	19
図 18	富里旧堤防 1・2 次調査地点 (S=1/10,000)	20
図 19	富里旧堤防 1 次調査平面・土層断面図	21
図 20	富里旧堤防 2 次調査全体図・南部分図	23
図 21	富里旧堤防 2 次調査北部分図・出土遺物	24
図 22	富里旧堤防 2 次調査土層断面図	25
図 23	大野・中新田とその周辺 (S=1/25,000)	26
図 24	江戸時代はじめ頃の同笠新田村・中新田村周辺復元図 (S=1/20,000)	26
図 25	大野地区と命山の位置 (S=1/2,500)	27
図 26	大野命山トレンチ位置図	27
図 27	大野命山実測図	30
図 28	大野命山土層断面図	31・32
図 29	中新田地区と命山の位置 (S=1/2,500)	34
図 30	中新田命山トレンチ位置図	34
図 31	中新田命山実測図	35
図 32	中新田命山土層断面図	37・38
図 33	大野命山出土古銭	39
図 34	大野命山・中新田命山出土遺物	40
図 35	大野命山・中新田命山の復元と断面の比較	42
図 36	大野命山・中新田命山盛土工程の比較 (S=1/260)	43

第1章 遺跡をめぐる環境

地理的環境(図2参照) 磐田郡浅羽町は静岡県西部(旧遠江国)に属し、県内で最も広い遠州海岸平野の東端に位置している。町域は通称浅羽低地と呼ばれる低湿地が8割近くを占め、田園地帯が広がる景観を呈している。町域の南は遠州灘に面して東西方向に砂州列が連なり、東は海拔264mの小笠山多聞天神社を最高所とする小笠山丘陵と接する。北と西は掛川市八高山より発した原野谷川の流れによって概ね区切られ、平面形が三角形を呈している。

浅羽低地は大規模な排水工事が実施されるまでは排水不良地として地域住民を悩まし続けた歴史を持っている。低地の地質の多くは粘土・炭混じりの粘土・泥炭からなる。これは、縄文前期に始まる海進現象(7000~6500年前)によって低地の下流域に海水が流れ込み、深い入り江(古浅羽海)を形成したことから始まる。

海面の上昇が終わると同時に、入り江奥の河川が土砂を流し込み埋め立てが盛んとなる。太田川・原野谷川のような中河川では埋め立ての力は弱く、川沿いに砂礫を堆積する程度で、まわりの入り江は濁水からの泥土を受け入れ、それが水底に堆積することとなる。

これと同時に海岸砂地が発達し、入り江の出口が塞がれると(縄文中期と考えられる)、水域の塩分は徐々に薄くなって湖沼化し、ラグーン(潟湖)を形成する。入り江の閉塞によって、河川沿いの堆積地形は保存されやすくなり、町域では原野谷川の旧本流(古川)と旧支流(古浅羽川)の蛇行流路と自然堤防が出現した。古浅羽川の微高地の出現は縄文中期~後期にかけての時期と推定されている。

古浅羽川によって古磐田海が分割されると、東に位置する小笠山丘陵の裾と、南の砂州列に囲まれた閉鎖性の強い水域が形成される。この水域(古浅羽海ともいう)は近世後期までその名残が池として残り、最後は地震に伴う地盤隆起によって消滅したと考えられている。

自然堤防は後背湿地との比高差が僅かだが、起伏の乏しい沖積低地の中にあっては限られた高乾地であり、町域の北部を中心に弥生時代後期以降多くの遺跡がこの部分に集中している。西向遺跡が所在する微高地は太田川が形成した自然堤防に相当し、町内の遺跡としては唯一の立地となる(これに関しては歴史的背景に譲る)。原野谷川旧堤防は原野谷川旧本流の左岸に築かれた戦国時代の堤防で、命山が所在する大野は旧本流最末端に形成された自然堤防、隣の中新田は砂州に相当する。これらの遺跡は地理的条件の影響をまともに受けており、歴史的背景で紹介することにする。

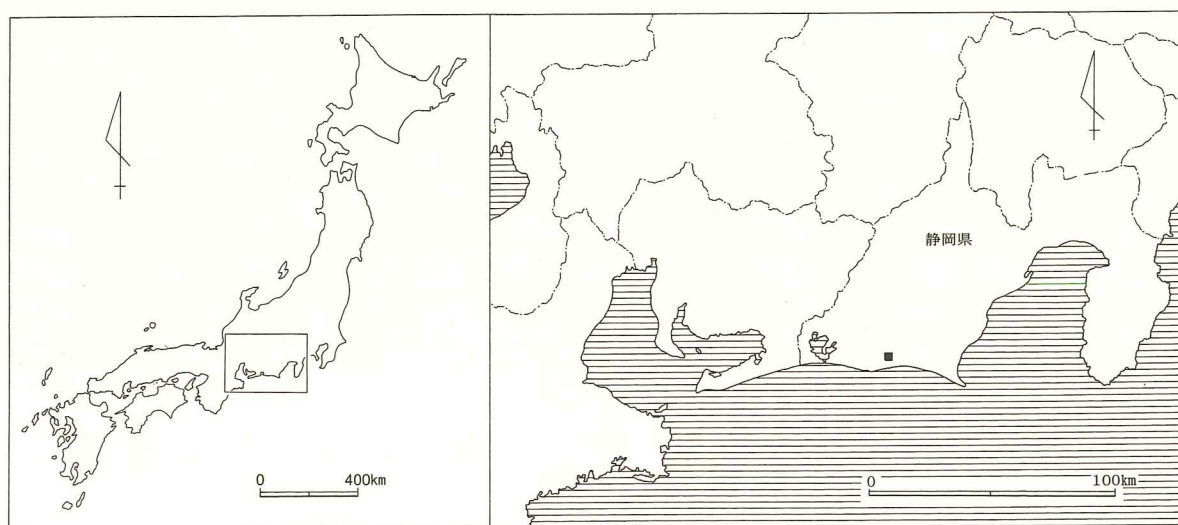


図1 浅羽町の位置

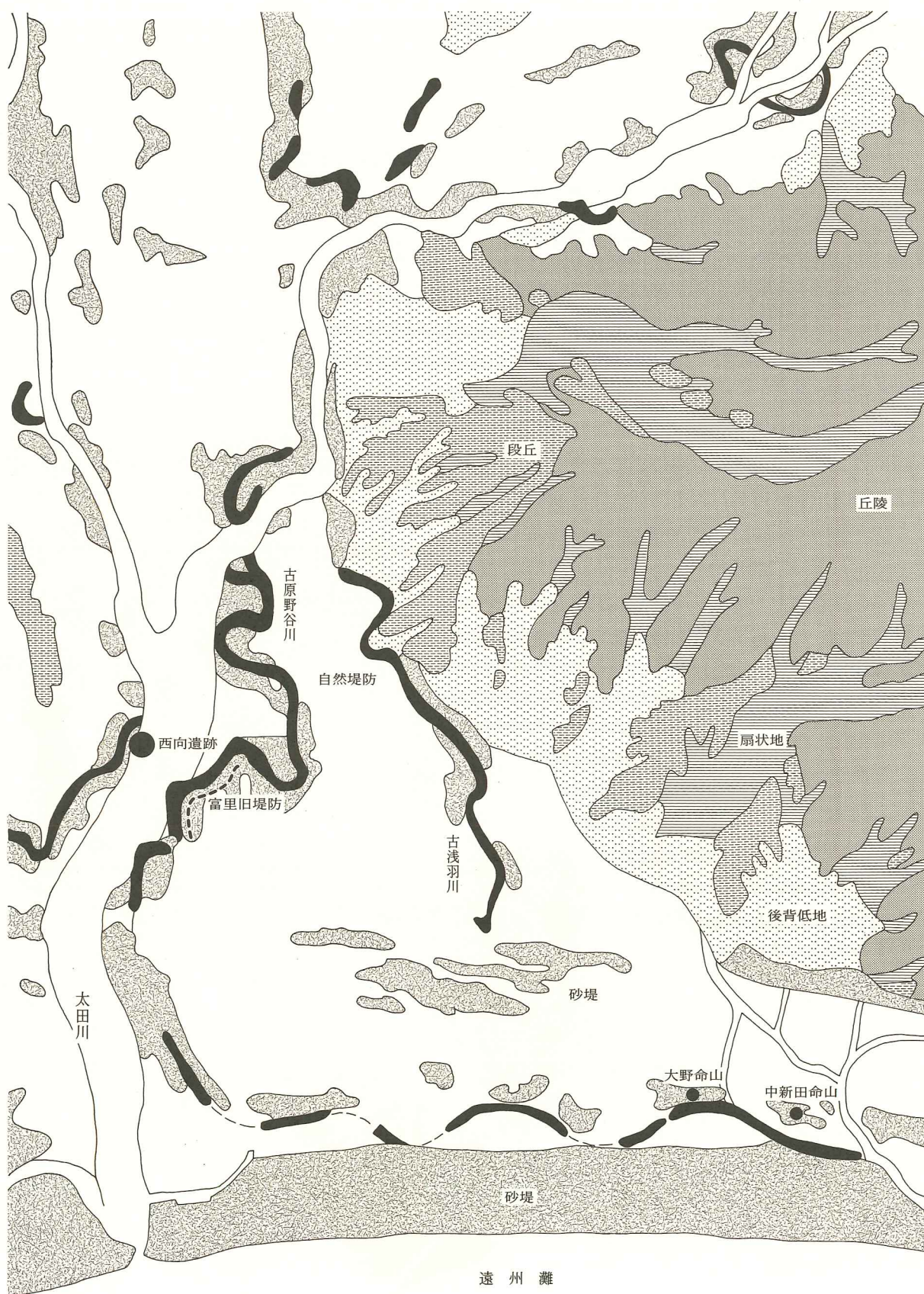


図2 浅羽低地を中心とした地形概念 (S=1/50,000)

歴史的環境(図3) 当報告書で扱う遺跡は、西浅羽地区(旧西浅羽村)と海岸に面した幸浦地区(旧幸浦村)の計4ヶ所で、これは旧原野谷川と旧太田川に面した遺跡である。現在、両河川は浅羽町の西端、中村地籍の二瀬という地点で合流し、そのまま直線状に遠州灘に注ぎ込む形となっているが、これは近世初頭に、幕府の遠州海岸低地開発事業の一環として両河川の合流工事が行なわれたことによって出現した。つまり人工的に造り出された流れである。

これ以前の両河川は別々のもので、旧原野谷川は最大で東に1kmの地点を蛇行しながら、現在幸浦地区の前川(原野谷川流路改变後の名称)と名付けられた河川の場所を流れ、最後は潟湖に注ぎ込んでいた。この流路の上限は2002年に行なった諸井新屋地区の試掘確認調査によって、自然堤防上に所在する山茶碗片を包含する遺構が河川氾濫による砂層により侵蝕を受けていることから、13世紀以降にできた流路であると考えている。旧太田川の流れは、現在の太田川に架かる和口橋の西側あたりで西に大きく振れ、今之浦川へと通じていた。

これら両河川に挟まれた地区には北から長溝、中村、大島の各村落が存在した。長溝は文献の上から確認できる最古の資料が貞治元(1362)年「西園寺実俊宛行状」『熊野速玉神社文書』¹⁾で、これは熊野新宮本殿復興のために安房・遠江両国の国衙領を造営料所として寄進した時に関連するものだが、南北朝期の国衙領がどこに所在したのかわかる貴重な資料でもあり、この中に長溝郷が挙げられている。1997年から翌年にかけて行なった長溝中島遺跡の発掘調査によって12世紀後半を中心とするごく限られた期間の集落跡を発掘し、中国陶磁器・樟葉型の瓦器・墨書土器という特徴的な遺物が出土した。これによって国衙領長溝郷が原野谷川・太田川両河川を媒介とする物資の流通拠点としての性格を持つ村落であることが推定され、流路の度重なる変更に伴い集落も位置を変えることが判明した²⁾。

当報告を行なう中村は、『親元日記』寛正6(1465)年8月2日の条に登場する。そこに記された内容は「浅羽地域の中村・湊は河会・堀越(袋井市)、瀬名(静岡市)と共に今川了俊の系譜を引く遠江今川氏の範将の所領であったが、この時点で室町幕府の御料所とされた」³⁾というものである。これによって中村が室町時代には遠江今川氏の所領であったこと、それがこの時に没収され幕府の御料所になったことがわかる。

大島村は原野谷川・太田川両河川の合流工事に先立ち、現太田川の左岸へ移転した集落である。その旧地が右岸の元島遺跡で、1994～97年度にかけて河川改修工事に伴う発掘調査が行なわれた。調査の結果、12世紀後半～16世紀後半に及ぶ多量の遺物が発見され、特に15世紀代にピークを迎える。この時点での遺構群も明らかにされ、旧原野谷川の水運と旧太田川の水運を中継し、遠江国府へ物資を供給する拠点として存在したことが明らかになった⁴⁾。

これらの集落は近世初頭に行なわれた両河川の合流工事と、その排土を利用した築堤工事によって大きく様相が変わることになる。自然地形に合わせて散村形態⁵⁾をとっていたと考えられる長溝の集落は旧原野谷川右岸に形成された自然堤防上に集住、中村は現在、太田川右岸の「流」地籍に数軒分所在する集落を残して現在の字中村地籍に移転、大島も元島の地から現在の太田川左岸の地へ移転し、両河川に挟まれた河川敷内と中州に所在した村落は消滅することになる。その時期は『遠淡海地誌』⁶⁾大島村の項によると慶長元(1596)年に移転したと記されており(これは幕府成立以前なので再考が必要)、幕府の代官頭として遠江支配に関わっていた伊奈忠次による両河川合流工事が慶長9(1604)年に行なわれているので、その直前までには移転が終了していたことになる。

この移転以降、長溝・中村・大島の各村は浅羽輪中⁷⁾の中に組み込まれ、「浅羽三十三カ村」という地縁的連帯を持つことになる。現在浅羽町域に含まれる長溝・中村はこの時点までは太田川右岸を中心に展開する御厨領とのつながりをもつ村落であった。村落の移転が生じて寺社との繋がりには変化せず、



図3 浅羽低地を中心とした中世～近世前期の主要遺跡 (S = 1/50,000)

[浅羽低地を中心とする主要遺跡] (番号は図3に対応)

- 1 長溝中島遺跡(12世紀～13世紀初頭の集落遺跡) 2 西向遺跡(本報告遺跡／弥生時代後期～戦国)
 3 元島遺跡(13世紀～戦国の集落、遠江国府へ物資を供給する拠点) 4 富里旧堤防(本報告遺跡／16世紀)
 5 中畦堤(消滅、中世に遡る堤防、浅羽荘を水害から守るために南北に分けたか) 6 大野命山(本報告遺跡／1680年以降築造)
 7 中新田命山(本報告遺跡／1680年以降築造) 8 馬伏塚城(南遠地域の要の城、今川方から徳川方へと続く高天神城攻防戦の徳川方の前線基地及び物資供給拠点)
 9 岡崎城(戦国) 10 横須賀城(戦国～近世)

現在に至るまで寺院は鎌田全久院の系統、神社は鎌田神明宮の系統を保ち続けている。大島村は町村合併の時点で旧豊浜村が福田町と合併したために浅羽から抜ける結果となったが、それまでは「浅羽三十三力村」の一員であった。

原野谷川旧堤防は蛇行して流れる旧流路の左岸に沿って築かれた堤防で、現在は長溝地籍に所在する和興産業敷地の西側、富里地籍に断片的に約1.6km分が残っているにすぎないが、貞享3(1686)年の「浅羽上輪四力村・下輪一四力村水除堤相論裁許絵図」(図4)には「古堤」として原野谷川の新しい堤まで繋がるように描かれており、旧原野谷川に沿って全長5km以上が存在したようである。

この堤は、旧原野谷川左岸地域の開発と直接関連するものと考えられる。それは旧浅羽荘西境の開発である。浅羽荘は遅くとも平安後期には成立した殿下渡領で、藤原氏の子弟を養育する大学、勸学院領であった。勸学院は氏神の春日大社、氏寺の興福寺の寺務も司る家政機関で、そのうち浅羽荘は田一六九町三反六〇歩と諸国に散在する勸学院領中最大規模を持つ荘園であった。この荘園は、室町時代には勸学院領から足利将軍家の系統、尼御所(現在の京都宝鏡寺)の寺領的性格に変化するが荘域はほとんど変化せず戦国期に至っている。

堤の築造を示唆する文献は存在しないが、西地区を含む浅羽低地の新田開発は今川義元・氏真によって進められ、これに関する記録が残っている。永禄3(1560)年と翌年に海老江菊千代に宛てた二点の文書がそれで、その中に「遠州所々新田開発の事」⁸⁾として浅羽・柴・江川(湊)・和口・大淵・中之村(福田町中野)・鳥羽野(浅羽町富里)・興洲(大須賀町)の地名があり、大規模な新田開発と治水事業が行なわれたことがわかる。浅羽荘時代には実現しなかった河川流域の開発はここで一気に進み、この頃堤が造られた可能性が高いのである。(命山が所在する大野・中新田に関しては、報告部分で記述する)

[註]

- 1) 『浅羽町史 資料編一 考古・古代・中世』1997年 浅羽町 資料53 其挙状 熊野速玉神社文書
- 2) 浅羽町教育委員会『中島遺跡・浅羽大囲堤』2000年 浅羽町教育委員会
- 3) 『浅羽町史 資料編一 考古・古代・中世』1997年 浅羽町 資料89 親元日記三 内閣文庫
足利義政に仕え、政所代として幕政に関わった蜷川親元が記録した日記で、寛正6年8月2日の条には幕府政所執事伊勢貞親の弟、貞藤が狩野おおよび狩野右衛門尉に出した書状が記録されている。
その中に中村と湊のことが出ている。
- 4) 加藤理文『元島遺跡Ⅰ(遺物・考察編1-中世-)』財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999年
- 5) 旧原野谷川と旧太田川が近接する狭間に所在する長溝郷は、両河川の本流・支流が幾筋も存在し、洪水によってその道筋も変化し安定していなかったと考えている(原野谷川河川改修工事に先立つ、両岸の試掘。確認調査の所見)。従って、集落の立地は河川の位置、自然堤防の形状に大きく影響をうけたものと認識している。
- 6) 周智郡森町村の村役人を勤めた山中豊平によりまとめられた地誌。天保4(1833)年に一応の完成をみる。山中真喜夫編著『遠淡海地誌』(制作協力静岡教育出版社)で刊本化されている。
- 7) 新たにできた河筋に沿って新堤が築かれ、左岸の浅羽低地一帯を全長13kmに及ぶ浅羽大囲堤がめぐる。この中に33力村が含まれた。これは「浅羽33力村」と呼ばれ、現在の浅羽町の原形となった。
- 8) 『浅羽町史 資料編一 考古・古代・中世』1997年 浅羽町 資料143・148 今川氏真判物 海老江文書

[参考文献]

- 加藤芳朗「第一編第二章第一節 平野の成立と変遷」『浅羽町史 通史編』浅羽町 2000年
本多隆成「第三編中世の浅羽」『浅羽町史 通史編』浅羽町 2000年
松本稔章「第四編第三章 浅羽大囲堤と浅羽一万石」『浅羽町史 通史編』浅羽町 2000年
浅羽町教育委員会『十二所居館』2001年

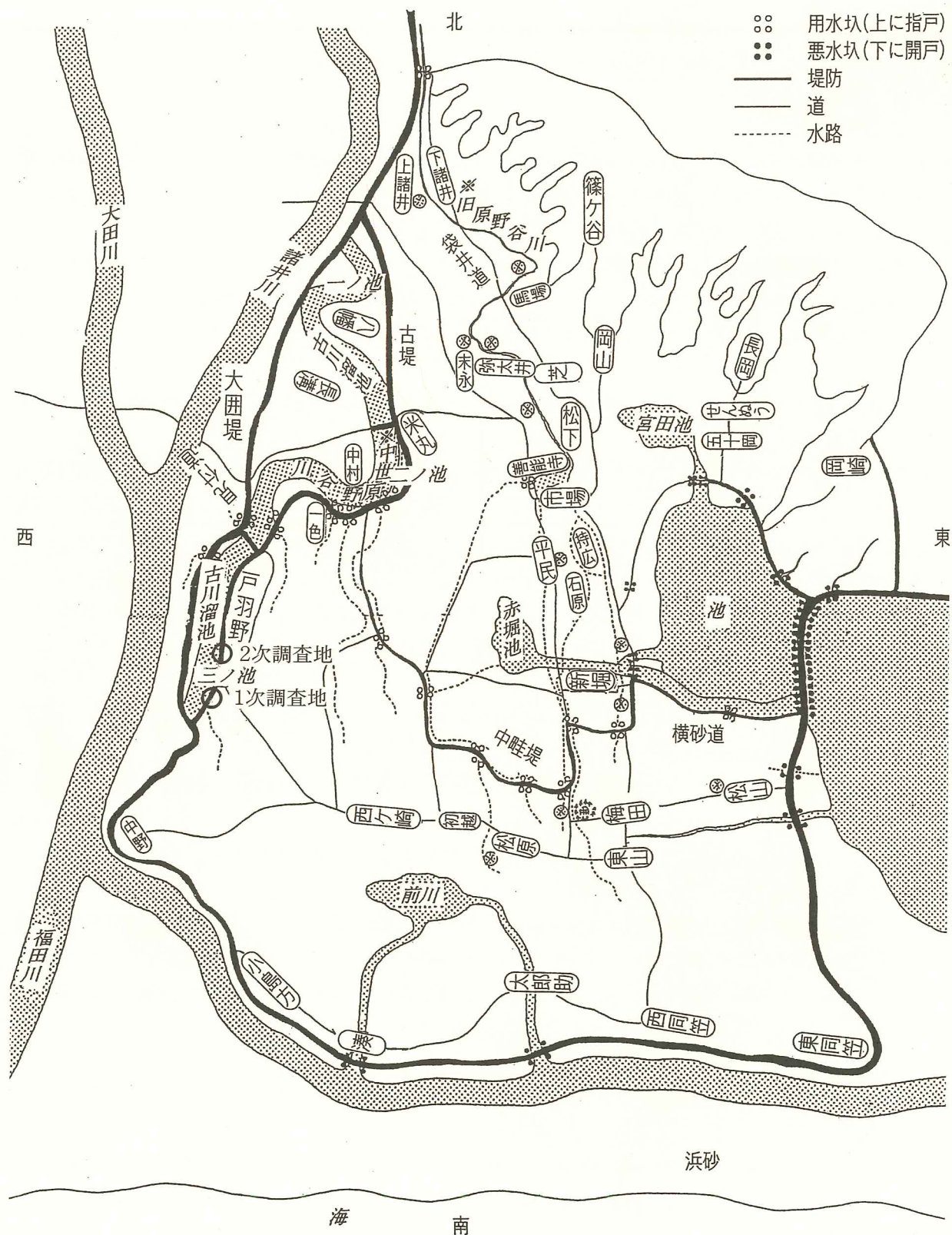


図4 近世前期の浅羽低地と富里旧堤防の調査地点
 (黒線は堤防 中畦堤・古堤(富里旧堤防)・浅羽大囲堤)
 貞享3年裁許絵図をもとに作製『浅羽町史 通史編』より

第2章 調査経過と成果

1 西向遺跡1次調査

調査に至る経緯 1994年度は袋井土木事務所による太田川の河川改修工事が実施されていた。これに並行して浅羽町中地先に所在する二瀬東橋・西橋の付け替え工事も行われていたが、新規に設けられた橋脚設置工事の排土に伴って数点の山茶碗片が出土し、浜松市在住の個人によって採取された。発見者は太田川右岸ということから磐田市域の遺跡と考え、遺物を磐田市文化財課に届けられたが、市の担当者が現地を確認すると出土地点は浅羽町中地先であることが判明したので、8月上旬に担当者が浅羽町教育委員会を来訪され、現物の提供とこれまでのいきさつについての説明を受けた。

現地を確認すると、橋脚工事は完了していたが、すぐ北側に残された一角の断面に遺物包含層が約20mほどの範囲で存在することを発見した。この地点は、河川改修計画に伴って削平される範囲に含まれていたため、県文化課に報告し、指示を仰ぐこととなった。

県文化課はさっそく袋井土木事務所と協議を行い、詳細を把握するための試掘調査の実施を決め、実際の作業を浅羽町教育委員会で行なってほしいとの要請があった。そこで工事を請け負っていた業者より重機の提供を受け、9月16日より22日にかけて包含層が残る一角に対して一本のトレンチを設け土層断面の観察と、包含層に含まれる遺物の確認を行い、遺構が存在することも判明した。

調査結果を県文化課に報告し、今後の取り扱いについての協議に入る。現地での発掘調査体制は、同じ太田川の下流部で調査を実施していた元島遺跡の発掘調査の一部として位置付け、同調査現場から作業員等の提供を受け、事務手続きを県文化課が行なうこと、調査員は地元浅羽町教育委員会から現地に文化財担当者を派遣するという事で合意を得、10月27日より発掘調査が始まった。

調査経過 (試掘調査)

1994年9月16日 バックホーを用いて包含層が所在する部分に、一本のトレンチを設定。

午後より大雨となり、調査地一帯は完全に水没する。

21日 トレンチの断面を削り土層観察。写真撮影後に断面図作成。

22日 土層の観察と記録、包含層の範囲の確定と平面見取り図作成。

(発掘調査)

1994年10月27日 バックホーを用いて包含層の上面までいっきに掘り下げる。

包含層から人力による精査に移り、遺構面まで少しずつ掘り下げる。

11月2日 国家座標にもとづく基準杭の設定(株)フジヤマに委託)。

8日 各遺構の精査に移る。これと並行して遺構図・土層断面図・1/20スケール平面図(全体図)の作成を始める。

25日 遺構精査、図面作成終了。

28日 空撮の実施(株)フジヤマに委託)。器材を撤収し全ての作業を終了。

以上、実働日数で試掘調査3日間・本発掘調査19日間の作業を実施した。

調査成果 調査は、河川改修によって法面が削られ消滅する部分全域が対象であるが、実際には河川の度重なる氾濫や流路の移動により旧地形が残されている部分は少ない。幸い調査地点は川に面した部分が露出し、断面観察が可能であったので包含層が残されている南北約20m、東西約18mの範囲を中心に絞り込むことができた(図5-2参照)。

調査の結果、遺構が残されていた範囲は南端で東西方向に約17m、北端で東西方向に約8m、南北

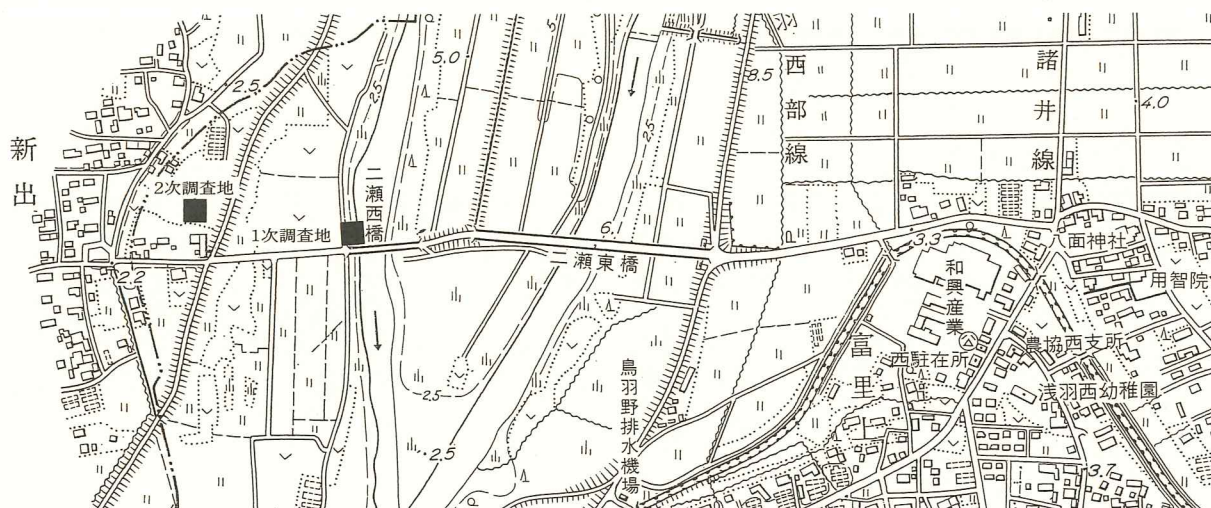


図5-1 西向遺跡1・2次調査地点 ($S=1/10,000$)

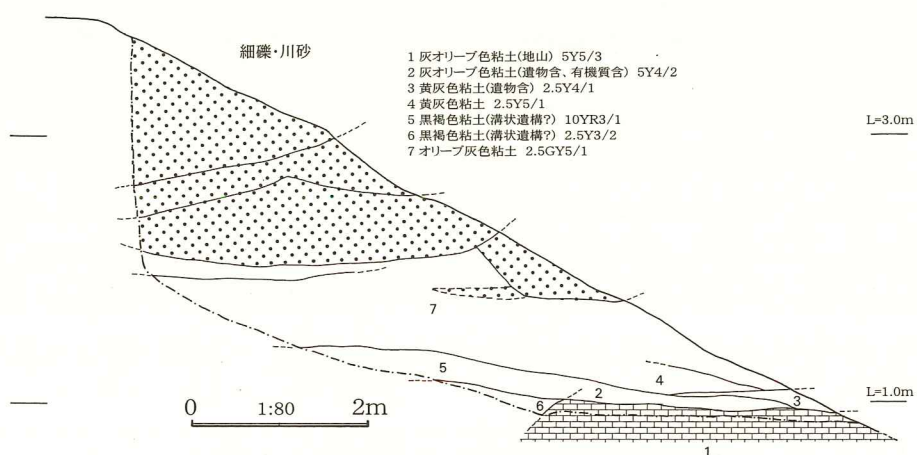
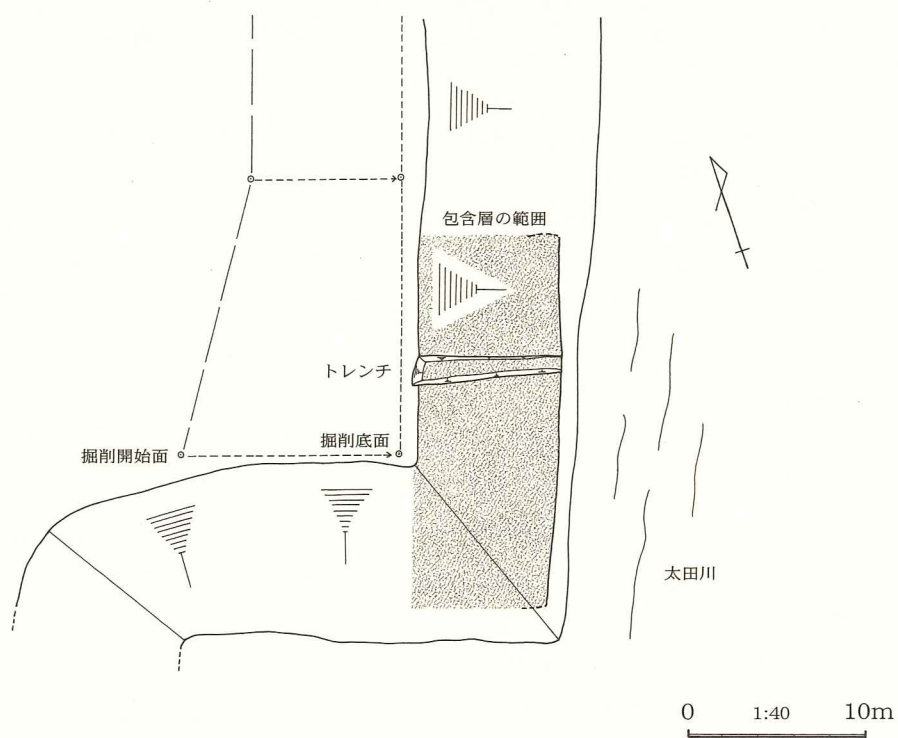


図5-2 西向遺跡試掘調査概要図・断面図

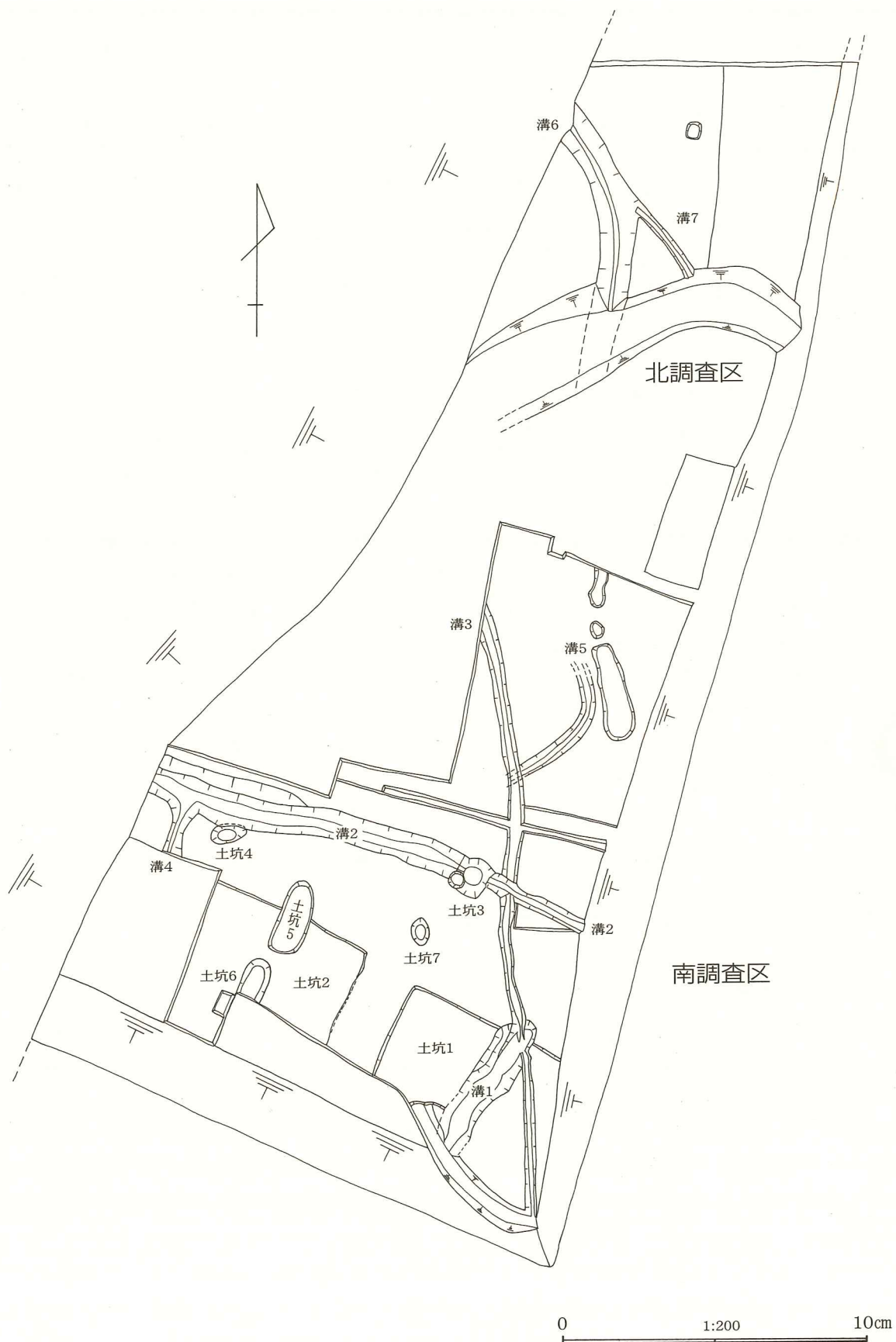


図6 西向遺跡1次調査全図

方向で約35mであった。このうち、中央北寄りの攪乱部を除く約380㎡に遺構が残存していた(図6)。

調査で確認された遺構は溝が7条、土坑が7基分である。では、基本土層および遺構別に概要を報告する。

基本土層(図7上、図版3-1)現地は地表の標高が約5m、これに対し遺構検出面の標高が約1mで4mほどの堆積がある。

地山は灰白色粘質土で、確認した遺構は全てこの面で認識している。地山の直上には有機質を多く含んだ灰色粘質土の堆積が20cmほどあり、その上にやはり有機質を多く含む黄灰色粘質土、有機質が見られないオリーブ灰色粘質土が堆積する。

この間、地山からの高さは1.1mに及ぶが、ここまでの土層に遺物が含まれ、これより上の土層からは遺物が出土していない。詳細に見ると、上面のオリーブ灰色粘質土中には山茶碗片が多く含まれるのに対し、下層の黄灰色粘質土中には弥生土器片、土師器片が多く含まれている。断面で確認できた遺構は黄灰色粘質土の下面から掘り込まれている。

標高2.2mから3mくらいまでの間には遺物を含まない粘質土が堆積し、その上面は厚さ20cmほどの黄灰色粘質土が挟まるのを除いて砂質土が地表まで約2m分堆積している。調査地点における土層の堆積は、概ねこのような状況となっている。

溝1(図6、図7E-F・G-H断面、図版4-1)南調査区の東南隅に位置する。幅約1.4m、長さ約5m分を確認した。南に向かって緩く傾斜し、最大の深さ約50cmである。遺構内は3層に分かれ、上層から灰オリーブ色粘土、灰色粘質土、地山ブロックを含む灰色粘質土の順に堆積する。遺物のほとんどは上層から出土するが、溝底からは図10-20に示した山茶碗が1点出土している。

溝2(図6、図7A-B・k-L断面、図版3-1)南調査区の中央に位置する。東西方向に延びる溝で、長さ約15m分を確認した。西側での幅1.5m、深さ80cm、東側での幅50cm、深さ15cmで西側に緩く傾斜している。遺構内は2層に分かれ、上層が有機質を多く含む灰色粘質土、下層が灰色粘土で、上層から山茶碗片を主体に数点分の遺物が出土している。

溝3(図6、図7G-H・I-J断面、図版4-2)南調査区の東側に位置する。南北方向に延びる溝で、長さ約20m分を確認した。幅30~40cm、深さ30cmで断面形が箱型を呈している。南側に緩く傾斜している。出土遺物はない。

溝4(図6)南調査区の西端に位置する。溝2から南へ向かって直角方向に派生する溝で、長さ約1.5m分を確認した。南端での幅70cm、深さ10cmの浅い溝である。全体図を検討すると、溝1・2・4の3条の溝は組み合わせるとコの字状の配置となり、区画境をなしていた可能性がある。

溝5(図6)南調査区の北端に位置する。孤を描く溝で、長さ約5m分を確認した。溝両端の地山土はグライ化が進行して、遺構の区別がつかず部分的に確認したにすぎない。幅40cm、深さ20cmほどの溝である。形状から住居跡の壁溝の可能性がある。出土遺物はない。

溝6(図6、図7C-D断面、図版3-2・3)北調査区に位置する。南北方向に緩く孤を描く溝で、長さ約7m分を確認した。調査区西壁断面での幅1.95m、深さ45cmの溝で、南方向へ緩く傾斜している。遺構内は2層に分かれ、上層は有機質を多く含む黒色粘質土、下層は灰オリーブ色粘質土である。出土遺物はない。

溝7(図6、図版3-3)北調査区に位置する。溝6から派生した溝で長さ約2.5m分を確認した。幅30cm、深さ12cmの小さな溝である。溝6・7の南側8mほどは攪乱のため遺構が残っていない。

以上で溝の概観を終えるが、南北方向の溝は全て南へ傾斜し、東西方向の溝は全て西側へ傾斜していることが確認できた。

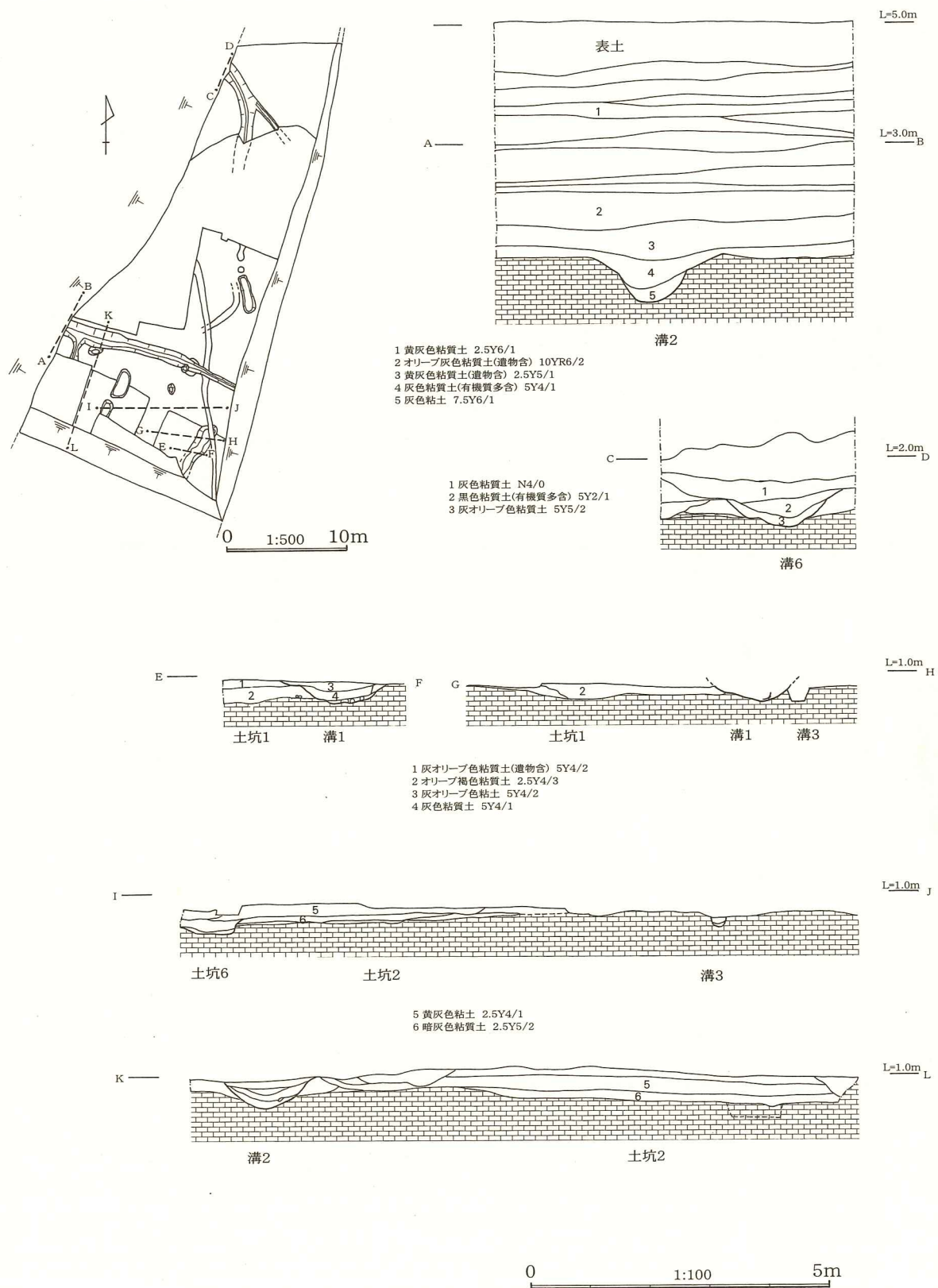
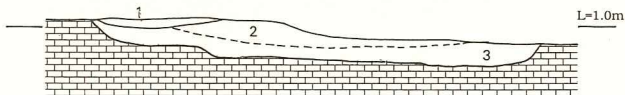
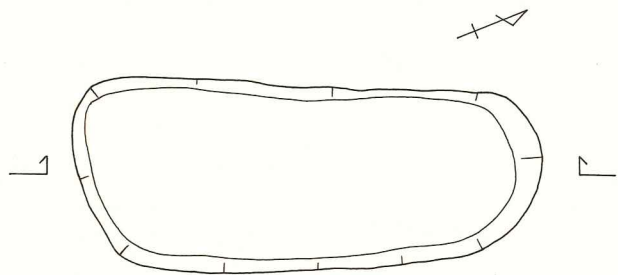
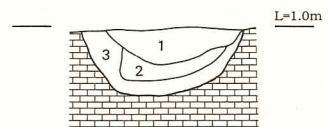
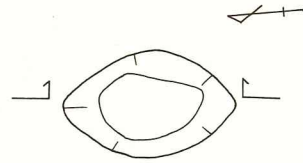


図7 土層断面集成図



- 1 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 2 褐灰色粘質土と灰白色粘質土の混入
- 3 灰白色粘質土 7.5Y7/1

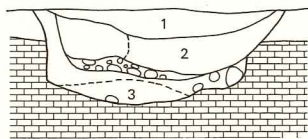
土坑5



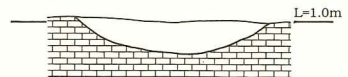
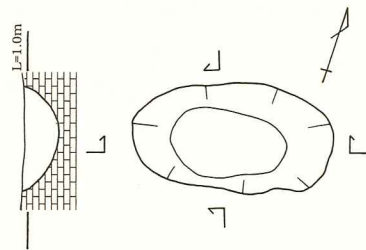
- 1 黄灰色粘質土 2.5Y4/1
- 2 黄灰色粘質土と地山土混入
- 3 明黄褐色粘質土 2.5Y6/6

土坑7

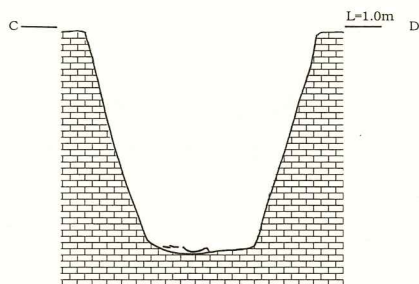
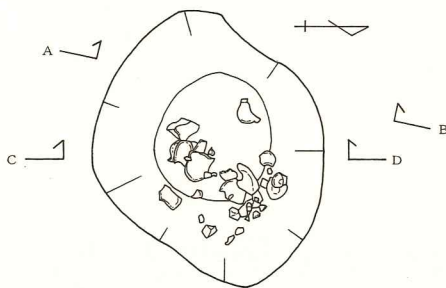
A ————— L=1.0m B



- 1 黒色粘質土 N2/0
- 2 灰オリーブ色粘質土 5Y4/2
- 3 灰オリーブ色粘質土(炭、遺物含)



土坑4



土坑3

0 1:40 2m

図8 土坑集成図

土坑1(図6, 図7 E-F・G-H断面, 図版4-6)南調査区の東南隅に位置する。東西5.5m、南北3.5mの四角い範囲にわたって遺物を含む灰オリーブ色粘質土が、下層にはオリーブ褐色粘質土が分布し何らかの遺構が存在すると考えられるが、明確にできなかったので土坑として扱う。上層から山茶碗片が10数点、かわらけ片が1点(いずれも細片)出土した。

土坑2(図6, 図7 I-J・K-L断面) 南調査区の南端に位置する。東西5.5m、南北5mの四角い範囲にわたって遺物を含む暗緑灰色粘土が、下層には黄灰色粘土が分布するので、土坑1同様何らかの遺構になると考えた。形状から低湿地の自然堤防上に良く見られる平地住居の床面にあたるのではないだろうか。上層から須恵器片、山茶碗片、弥生土器片(いずれも細片)が出土した。

土坑3(図6, 図8, 図版3-4~7) 南調査区の中央東寄りに位置する。径1.1~1.5m、深さ1.2mの楕円形を呈する土坑で、これがほぼ埋まりきる段階で再度35cmほど掘削されている。上部の土坑内には炭が充満し、その底に弥生土器片(図9-3~6)が多く含まれていた。土坑本体の底からも半分に割れた弥生土器の甕が2点(図9 1・2)出土した。

土坑4(図6, 図8) 南調査区の中央西寄りに位置する。幅55cm、長さ1m、深さ15cm。

土坑5(図6, 図8, 図版4-4) 南調査区の中央西寄りに位置する。幅1m、長さ2m、深さ20cm。

土坑6(図6, 図7 I-J断面) 南調査区の南端に位置する。幅90cm、長さ1.5m以上、深さ15cm。

土坑7(図6, 図8, 図版4-3・5) 南調査区の中央に位置する。幅60cm、長さ90cm、深さ30cm。

出土遺物(図9・10, 図版5・6) 一次調査による出土遺物の総数はパンコンテナケースに換算すると、ほぼ2箱程度の量である。種類別にみた割合は約40%が弥生土器で、殆んどが摩滅を受けた細片で良好な状態の破片は土坑3に伴うものに限られる。約5%が須恵器片で衛門坂古窯産の特徴を持つとされる赤灰色の須恵器片(図9-8・13)が3点含まれる。残り50%が山茶碗片(70点程)、あとは灰釉陶器片、渥美産陶器片、かわらけが数点ずつ、瓦片が1となっている。

出土遺物の60%ほどが遺物包含層からの出土で、遺構に伴う(溝1・2・4, 土坑1・2・6)ものは少ない。恐らく河川沿いの立地のために遺物の多くが洪水に伴う攪乱を受けたからではないだろうか。

1~6までは土坑3から出土した菊川様式の弥生土器である。1~3は台付甕。4は鉢、5は壺底部、6は高坏脚部。1・2は土坑3の底部から出土し器壁の状態は良い。3~6は土坑3の上部から出土した。これらは全体に磨耗を受け、破片も小さい。3は口縁の刻みが退化し、肩の屈曲も緩く1・2より新しい様相を呈している。

7~14は須恵器。点数は少ないが各時期のものが見られる。7・8・10は土坑2上層、12・14が土坑2周辺、11が溝2上層、9・13が包含層から出土している。7~9は坏蓋、9はMT21並行。10・11は坏身。これらはいずれも細片であるが6世紀後半~7世紀前葉にかけてのもの。12は高坏脚部、13・14は甕で内面の同心円文をナデ消している。

15は灰釉陶器の皿、18・19は灰釉陶器碗、10~11世紀のもの。

16・17は山茶碗小碗。20~24は山茶碗、いずれも渥美・湖西産で20は溝1の底部から出土している。12世紀後半~13世紀初頭にかけてのもの。

24は高台内面に丸に横棒一を加えた墨書がみられる。他に19の内面一部に、20は高台内面全域に、21は内部全域にそれぞれ墨痕がみられる。硯として用いた跡であろう。

25は平瓦片、摩滅しているが薄く縄目叩きが見られる。26は湖西産甕片。27・28は渥美産陶器大甕片13世紀か。

このように、1次調査地点からは弥生時代後期から13世紀初頭に至る各時代の遺物が散見するが、遺物量が最も多いのが12世紀代である。

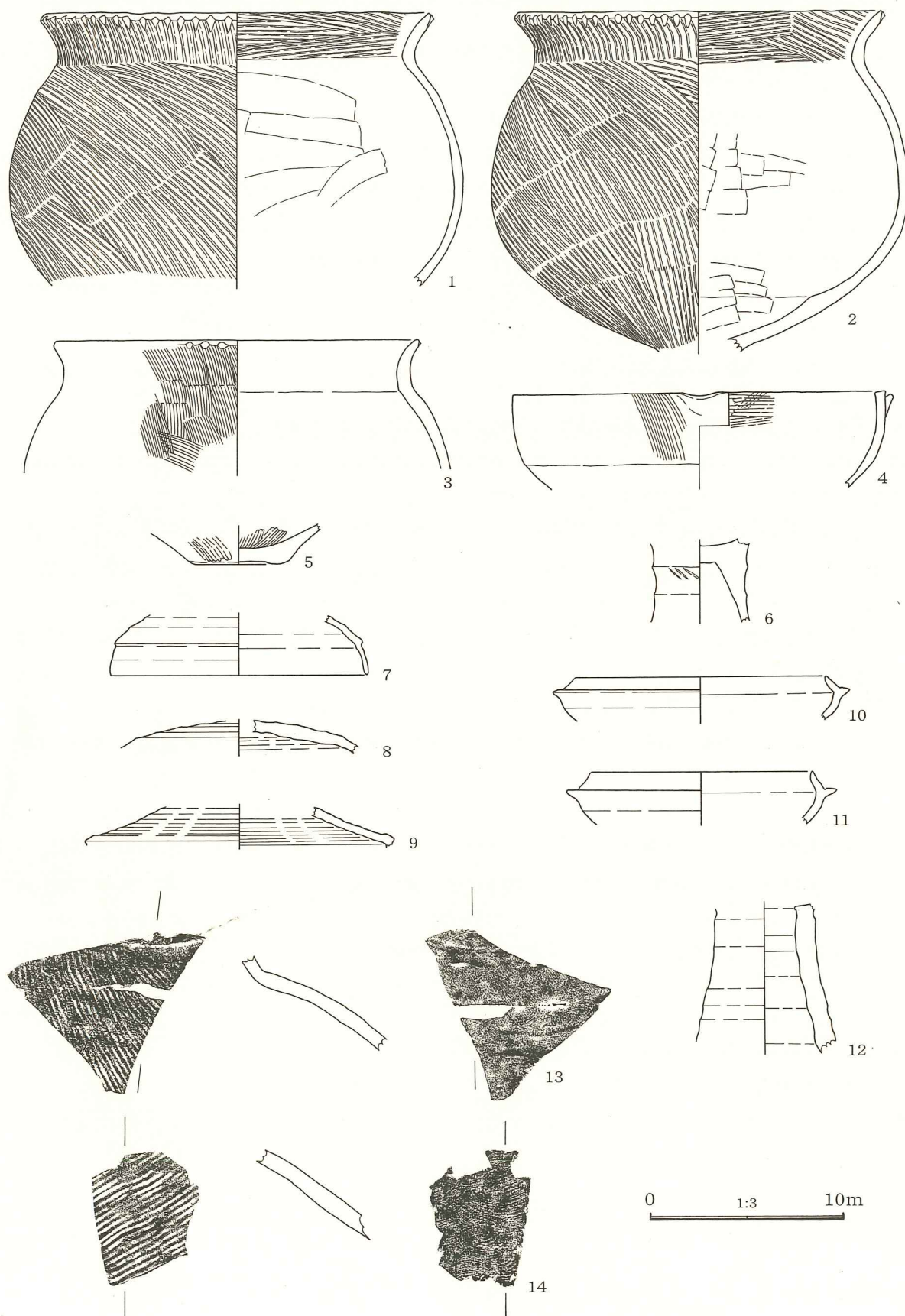
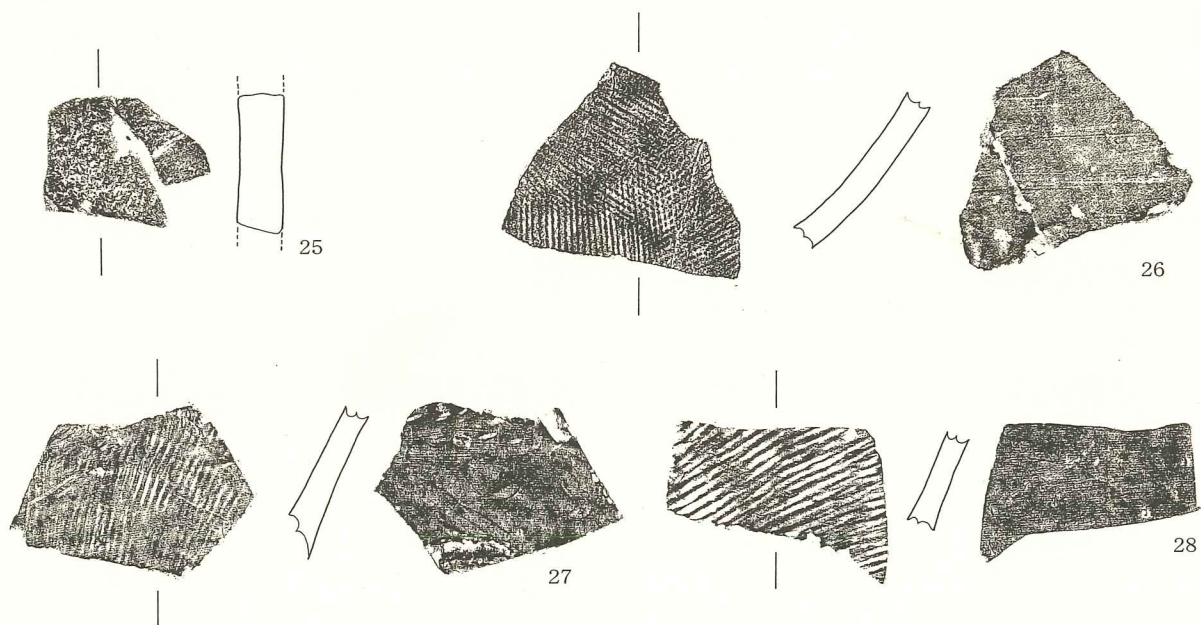
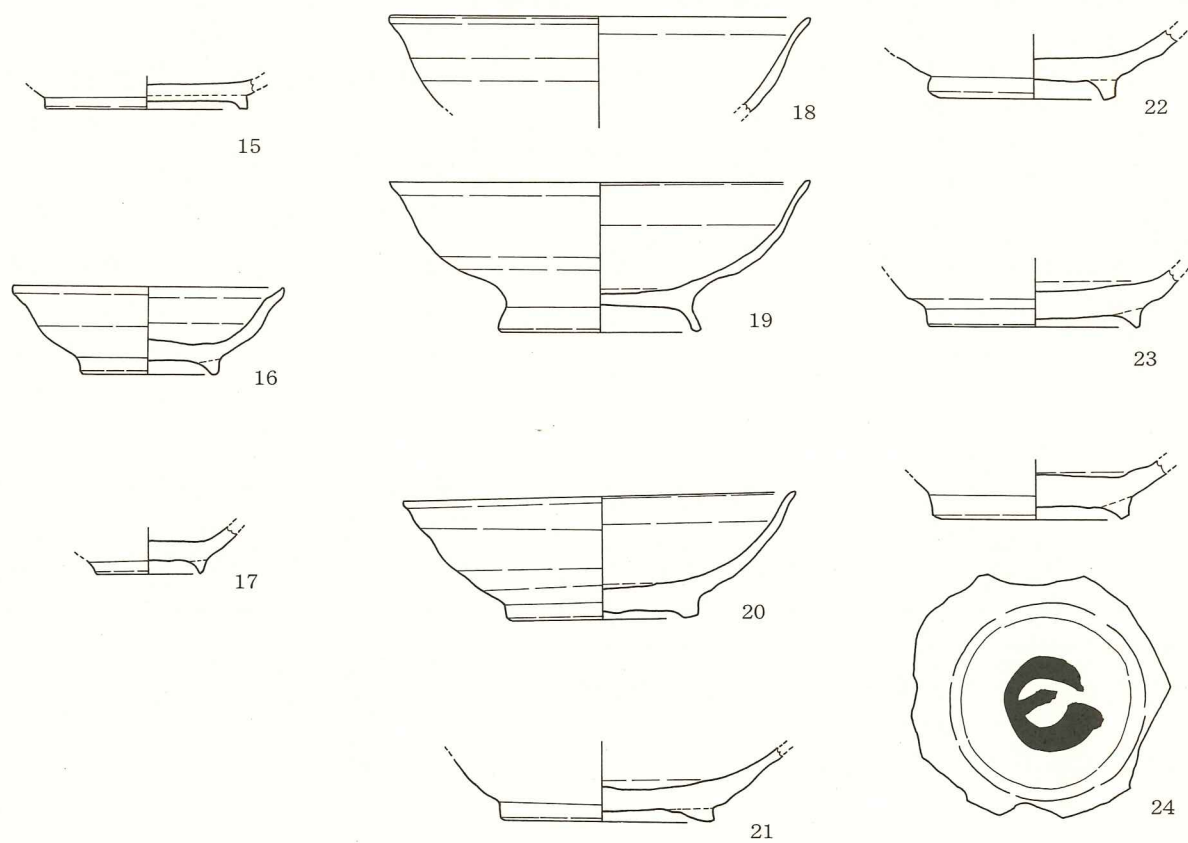


図9 西向遺跡1次調査出土遺物(1)



0 1:3 10cm

図10 西向遺跡1次調査出土遺物(2)

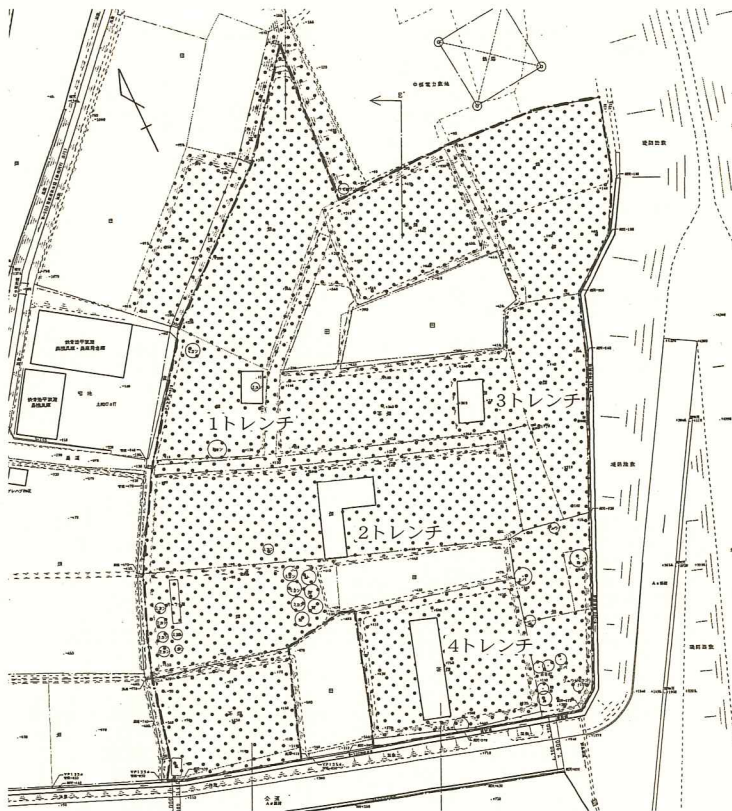


図11 西向遺跡 2次調査トレンチ位置図 (S=1/1,000)

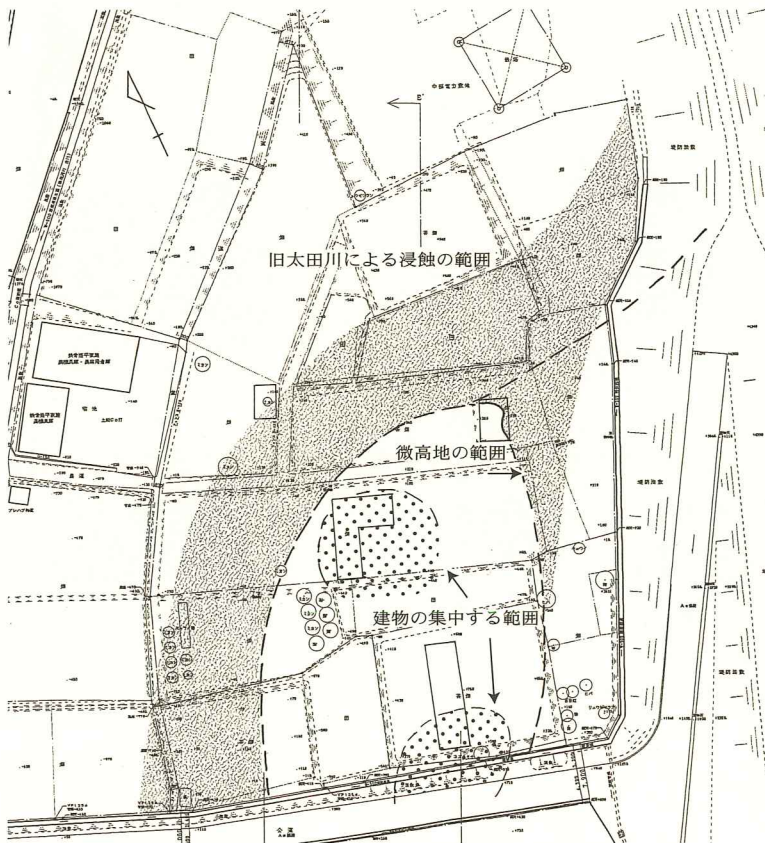


図12 西向遺跡 2次調査地の遺構状況 (S=1/1,000)

2 西向遺跡 2次調査

調査に至る経緯 浅羽町中宇堤内 1518-3 他 3 筆において、自動車工場建設を目的とした開発計画がまとまり、浅羽町へ土地利用の申請があった。社会教育課では、この場所が西向遺跡の範囲に含まれることを先の 1 次調査によって把握していたので、1994 年 6 月 18 日付けで速やかに協議を進める旨の指示を行った。その後、設計者の(有)アート一級建築設計事務所と細部調整を行い、まず地中の状況を把握する確認調査を実施すること。その結果に基づき工法や設計の変更を検討し、遺構を保存する方向で事業を予定通り進めることとなった。

これを受け、8 月 30 日に申請者から試掘調査依頼書の提出があった。9 月 1 日にさっそく設計者と現地において試掘箇所の確認と排土置き場、重機の進入経路等について細部打ち合わせを行い、調査の段取りを進め、作業の開始日を 19 日と決めた。ところが、当日になっても現地の畑一面には作物が植えられ、調査ができないので、申請者と耕作者との間で調整がつくまで調査の開始を待つこととなった。半年後の 1995 年 3 月になってようやく現地の畑が解放され 9 日より作業を開始した。

調査経過 1995 年 3 月 9 日 器材搬入、バックホーによって 1・2 トレンチの掘削を行う。1 トレンチ土層断面の写真撮影。

11 日 1 トレンチの土層断面図作成、2 トレンチの遺構調査をすすめる。バックホーによって 1 トレンチの埋め戻し、及び 3 トレンチの掘削を行う。

13～14 日 2 トレンチの遺構調査。

15 日 バックホーによって 4 トレンチの掘削。2 トレンチ測量、写真撮影。2 トレンチの埋め戻しを進める。

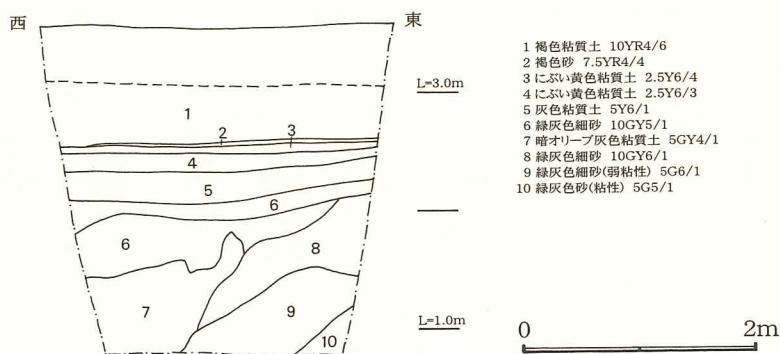


図13 1トレンチ土層断面図

16日 4トレンチ掘削の続き。

18日 4トレンチ土層断面図作成、写真撮影。

20日 3トレンチの測量、写真撮影。3・4トレンチを埋め戻し、
 器材を撤収して調査終了。

以上、実働8日の作業を実施した。

調査成果 調査は畑部分に限定し、地下の状況を把握するのに有効な箇所として4地点を選びトレンチを設けた。掘削はバックホーを用いて行い、少しずつ平らに掘り下げ、遺構が確認された時点で掘り下げるのをやめ、人力による精査に切り替えるという方法で行った。以下、トレンチ別に概観する。

1トレンチ(図13, 図版7-1)調査面積15㎡、この地点は旧太田川の氾濫原に含まれるものと考えられ、遺構は所在せず遺物も出土していない。地表下2.5mまで掘り下げ作業を終了した。

2トレンチ(図15, 図版7-5・8-1~4)調査面積48㎡、標高2.7m(表土より-80cm)まで掘り下げた段階で多数の柱穴が存在することを確認した。下層遺構の有無、及び柱穴の断面を確認するため、西壁に限定してサブトレンチを設定し、この部分は1m幅で壁を削りながら人力で掘り下げた。

この地点からは断面に掛かったものを含めて38個の柱穴を確認した。狭い面積であるが組み合わせるものを検討すると、3通りの組合せが考えられる。柱穴のうち、柱材が残るものが5個存在する。これらはいずれも耐久性の強い松材を使用し、しかも皮をつけたまま用いている。中には表面を焼いて腐食防止を図ったものも見られる。

同じ傾向は原野谷川に隣接する諸井十二所遺跡の15世紀頃の掘立柱建物においても確認している。低湿地の微高地上に設けられた掘立柱建物に共通する技術といえるかもしれない。

現在も測量杭には松材が広く使われ、仮設プレハブの基礎杭には樹皮をつけたままの松材が用いられており、むきだしのままでも5年程度の耐久性は充分確保されている。

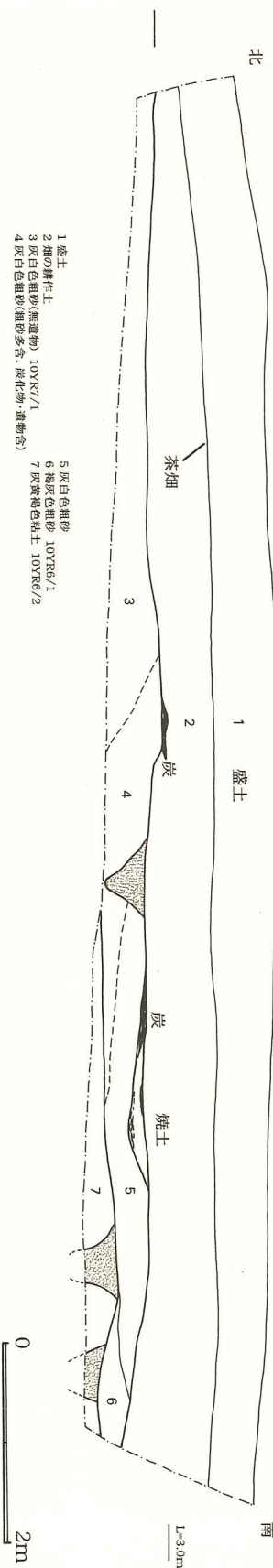


図14 4トレンチ土層断面図

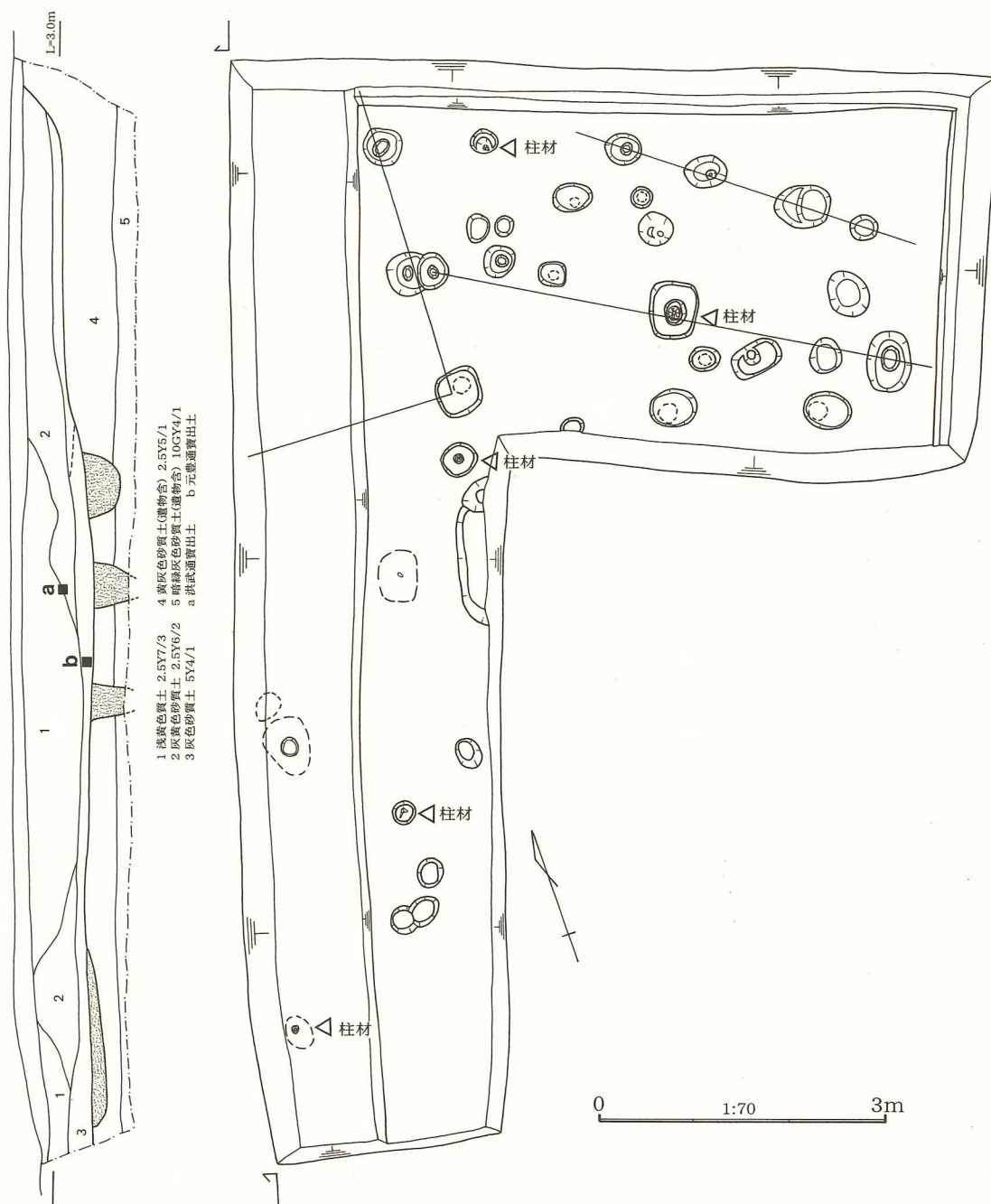


図15 2トレンチ平面・土層断面図

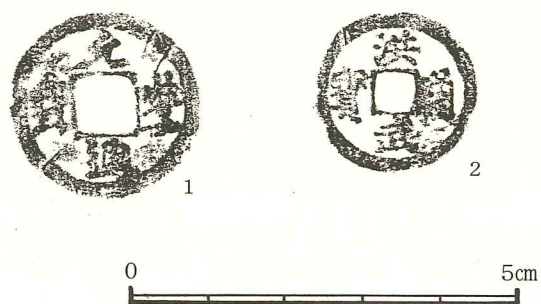


図16 出土渡来銭

西壁断面から2点の渡来銭が出土した。第2層の灰黄色砂質土からは洪武通寶が、これに接する第3層の灰色砂質土からは元豊通寶が出土した。両者が出土した土層は後世の耕作により遺物包含層の4層黄灰色砂質土を攪乱したものと考えられ、本来は断面にかかった掘建柱建物に関連した銭と考えられる。このトレンチの包含層から最も多くの遺物が出土している。

3 トレンチ(図版7-2)調査面積18㎡、この地点は旧

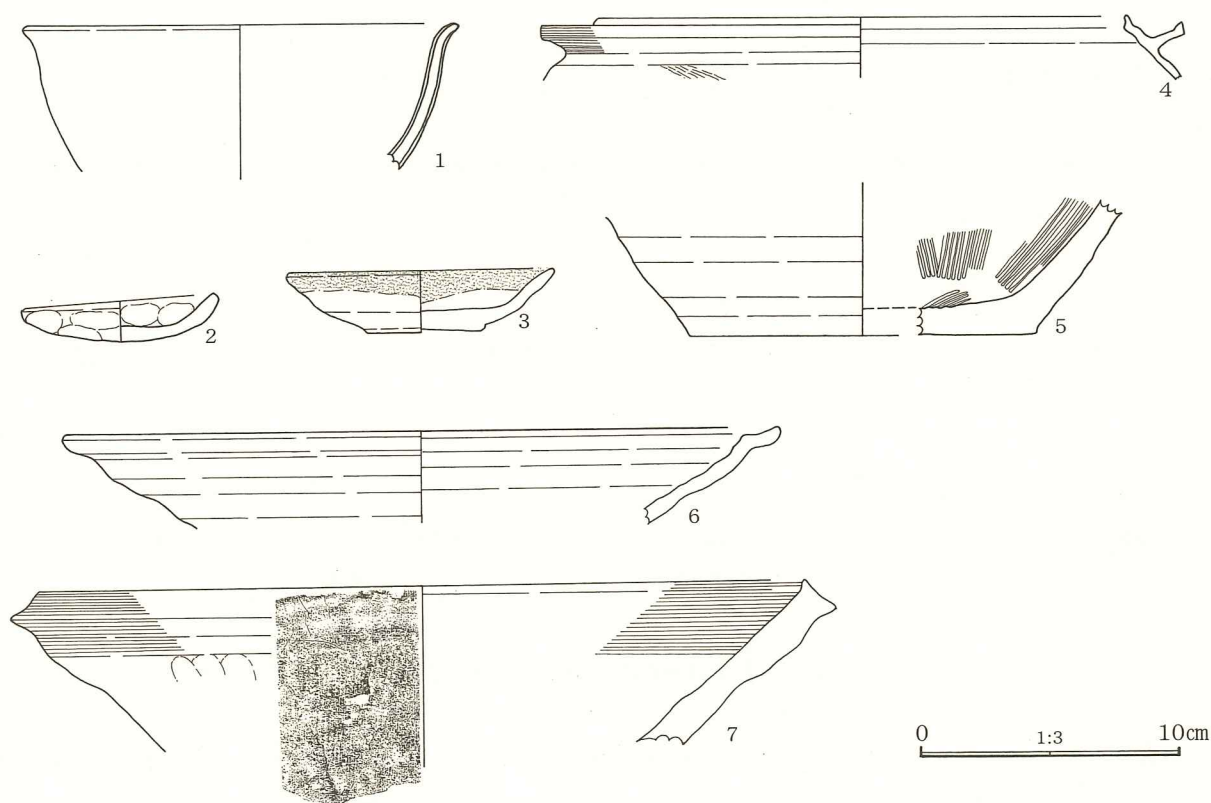


図17 西向遺跡2次調査出土遺物

太田川による侵蝕を受けた限界で、微高地の北端であることが判明した。遺構は確認できなかったが、落ち込みの始まる地点から鍔付鍋(図17-4)、常滑産片口鉢(図17-7)が出土した。

4 トレンチ(図14, 図版7-3・4)調査面積56㎡、調査対象地の南端、道路に面した茶畑に設定したトレンチである。茶畑の上に盛土を行い畑としたもので、茶畑の耕作土(黄燈色粘質土)を除くとトレンチの南半分で遺構が確認できた。そのレベルは2トレンチと同じ標高2.8m前後である。

検出面には炭と焼土が存在し、遺構掘り込み面は上下2面存在する。遺構の中心はトレンチの東側に存在するようで、東壁断面に掛かる以外には遺構は確認できなかった。このため記録は東壁の土層断面図のみ作成した。遺物は出土していない。

出土遺物(図16・17, 図版6) 2次調査による遺物は約40の土器片と2点の渡来銭が出土した。土器はいずれも細片であり、図示できるものは7点である。3トレンチから3片が出土する他は全て2トレンチで、包含層から出土したものが最も多い。かわらけ、鍋という日用雑器が中心である。

図16の渡来銭は1が元豊通寶(北宋)で初鑄が1078年、2が洪武通寶(明銭)で初鑄が1368年である。

図17の1・2・3・5の4点は2トレンチの包含層、6は2トレンチの遺構面、4・7は3トレンチ落ち込みの縁からの出土である。

1は龍泉窯系青磁の端反碗D2類で15世紀前半と考えられる。2は非ロクロ系のかかわらけ。3は瀬戸・美濃産の鉄釉小皿、4は鍔付鍋、鍔より口縁部が上に位置し端部が外側に折り返されている。5は瀬戸・美濃産播鉢、6は播鉢でⅡ類のもの。7は常滑産の片口鉢でⅡ類のもの。口縁端部が内外に拡張される。15世紀後半。これらは、いずれも15世紀を中心とするもので、この集落の年代を示している。

3 富里旧堤防1次調査

調査に至る経緯 1993年1月に浅羽町富里1860-4外4筆において、民間会社による流通倉庫を建設する計画が持ち上がり、浅羽町に対して土地利用の申請があった。

現地は曹洞宗松秀寺の旧境内であったが、そこは湿地が広がる場所に堤防を築き、その内側を開発した名残を今も残す地点で、もとは一面に水田と土を盛り上げて造った畑が広がる場所であった。この堤は近世初頭に築かれた「浅羽大囲堤」よりもさらに内側の「古川」と呼ばれる旧原野谷川に沿って設けられた堤防であり、中世に遡るものと推定していた。

申請地の殆どの部分が過去の削平により堤が失われた場所であったが、一部が土盛りのために地中に埋もれてしまうことになった。文化財担当者は設計者に対して、この堤の歴史的意味を説明し、堤の平面図を作成すると共に、削られて剥き出しになっている断面の土層観察と、一部トレンチを設定して堤の年代、築堤技術を探るデータを得たいと申し出、調査に協力してもらうこととなった。

調査経過 1993年2月8～9日 100分の1のスケールで、20cmコンターの平面図を作成。

10・12日 西側断面を削り、土層断面図作成、写真撮影。

13・15日 トレンチを設定し掘削。土層断面図作成、写真撮影。

17日 トレンチの埋め戻し、器材撤収。

以上、実働7日間の作業を実施した。

調査成果 堤防という遺構の性格からまず測量調査を実施し、形状の把握を行った(図19)。最も特徴的なのが平面形で、西端から15mの地点で直角に折れ曲がりクランク状になっている。しかも、ここから東側は旧河川側(北側)の斜面が緩やかとなり、西側の形状とは全く異なる。

東側では堤の幅が12～13m、高さ3m前後で北側の傾斜が緩やかなのに対し、南側は削られ急斜面となっている。西側は幅9m、高さ2.6m前後で南北両側の傾斜はほぼ等しい。

この違いは西側の裾が削られたことから生じたものなのか疑問が生じた。問題を解決する糸口を探すために、クランク状に張り出す北側の斜面にトレンチを設定し、断面観察をおこなった。

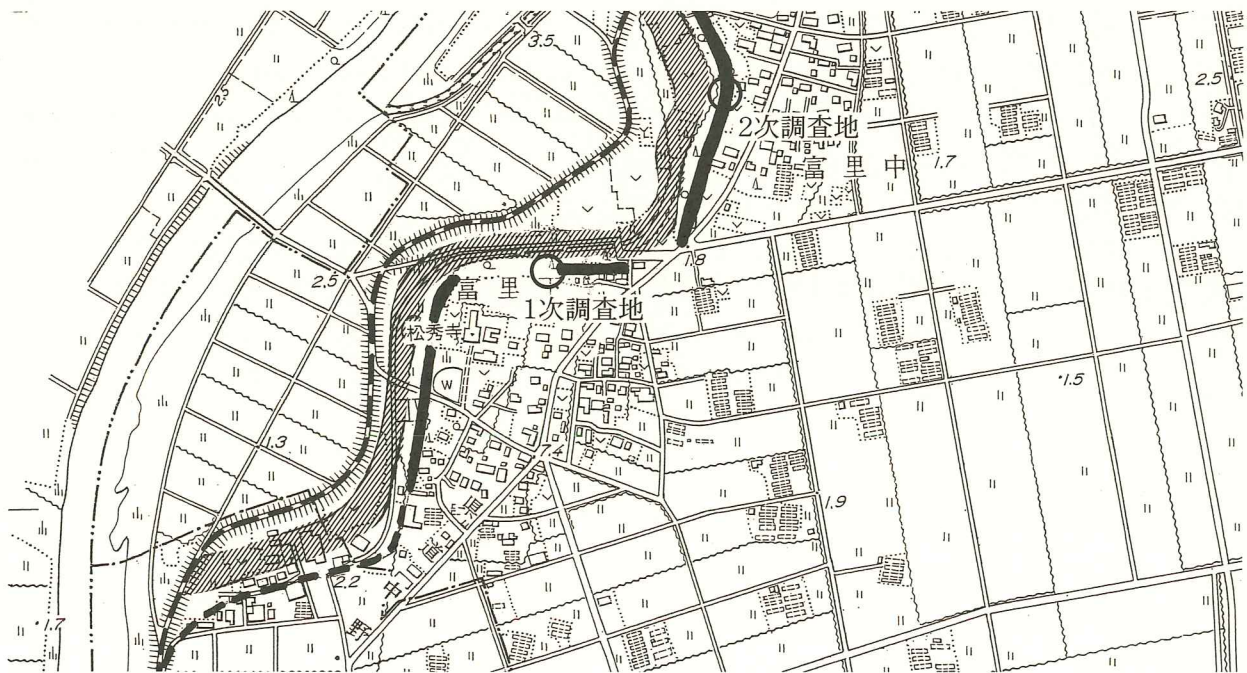
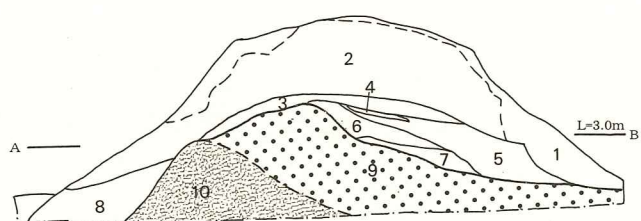
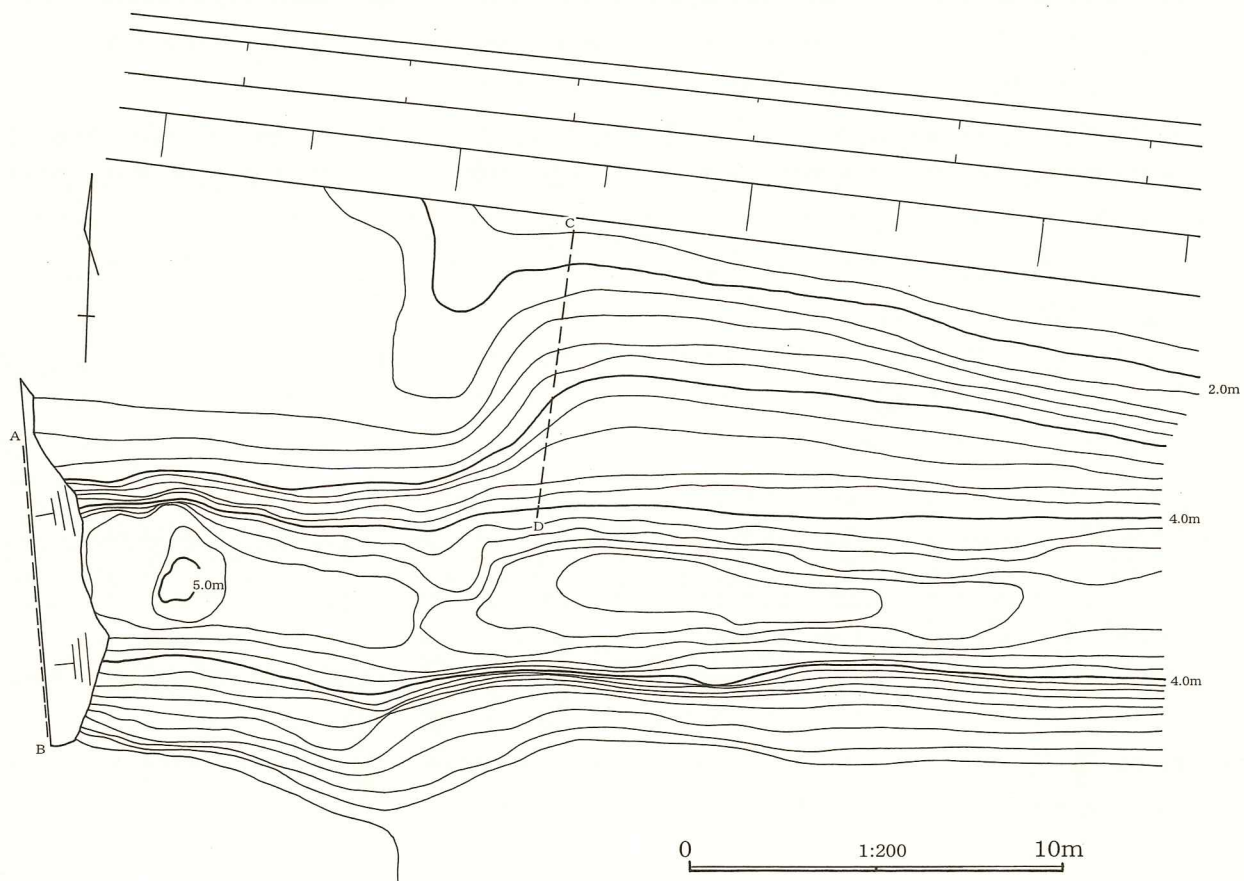
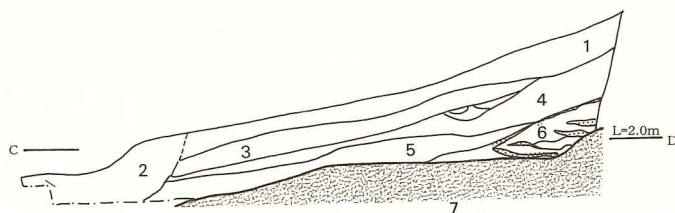


図18 富里旧堤防1・2次調査地点(S=1/10,000)



※標準土色帳不使用

- 1 茶褐色砂質土(攪乱)
- 2 茶褐色砂質土(砂質強)
- 3 茶褐色砂質土(粘性強)
- 4 暗褐色砂質土
- 5 淡灰色砂質土
- 6 灰色砂質粘土(遺物含)
- 7 暗灰色砂質粘土
- 8 茶褐色砂質粘土
- 9 地山(粗礫層)
- 10 地山(細砂)



- 1 表土
- 2 樹木による攪乱
- 3 淡茶褐色砂質土
- 4 茶褐色砂質土
- 5 暗茶褐色砂質土(地山ブロックを多含)
- 6 茶褐色粘質土(細砂層と互層に積み上げる)
- 7 地山(細砂)

0 1:100 2m

図19 富里旧堤防1次調査平面・土層断面図

次に土層断面の検討を行う。西側の断面A-Bを見ると、基底部では地山が山状に盛り上がり、これを芯にして右側の窪みに5～7の各層を積んでいる。この地山の高まりは旧原野谷川が形成した自然堤防で、それを最大限に利用し、恐らく部分的に削りながら山状に整形したからではないだろうか。

地山土は硬く締まった細砂(10層)の上に、粗い砂礫(9層)が被さっている。地山直上の南側の窪みに暗灰色砂質粘性土(7層)、灰色砂質粘性土(6層)、淡灰色砂質粘性土(5層)の順に積んで碗を伏せたような円形の高まりを造り、最後に上部に粘性の強い茶褐色砂質粘性土を積んで基礎部分を形成している。次にこれを基にして粘性の強い土を裾に置き(8層及び1層)、最後に全体に被せるように茶褐色砂質粘性土を積んで仕上げている。

このように、堤の築提には①自然堤防の微高地を利用した地山土の整形、②地山を利用した基礎部分の造成、③基礎部分を芯にした土盛り(仕上げ)、という3段階の工程を経て築かれていることが判明した。

北側裾の断面であるC-D断面では、地山土の硬く締まった細砂の上に緩やかな傾斜を付けながら、下から順に土を積み上げている状況が観察できた。この断面で注意しなければならないのが右端(南側)の状況で、地山面が急に盛り上がり、その部分には茶褐色粘性土(7層)と砂層を細かく互層に積み上げている。これは断面A-Bの②工程にあたる作業である。地山が盛り上がる点は断面A-Bと同じく堤の芯として自然堤防の高まりを利用したからであろう。

断面観察によって、この堤防が自然堤防の微高地をうまく利用して築かれていることが明らかとなった。堤の平面形がクランクを描くのは、この旧地形の影響があったからではないだろうか。

出土遺物 断面A-Bの壁面の削りに伴って、6層から磨耗を受けた土師器片が2点出土したが、これ以外には確認できなかった。1次調査においては築造年代を推定するきっかけを得ることはできなかった。

4 富里旧堤防2次調査

調査に至る経緯 1次調査を実施した同じ1993年の10月になって1次調査地点から北に約300mの場所で2,404㎡にわたる宅地造成計画が具体化した。この計画では、1次調査の対象となった旧堤防を約55m分、面積に換算して561㎡にわたって削り取り平らに造成するというものであった。

1次調査の結果、この堤防が中世に遡る可能性は益々高まり、浅羽低地の開発史を語る上で、極めて重要な遺構であるという認識を持つに至ったので、1次調査同様に地形図の作成とトレンチを設定しての断面観察が必要であるという判断を行い、事業者と協議を行って理解を得ることとなった。

調整の結果、事業者負担による埋蔵文化財の調査を行うことに対して承諾を得、11月24日付けで教育委員会に対して調査依頼の書類が提出された。これを受けて12月21日に事業者・設計者と社会教育課の三者で調査内容と工程に関する細部打ち合わせを行い、年明けの1994年1月17日から現地調査を始めることとなった。

調査経過 1994年1月17日 器材搬入、この日までに樹木の伐採が終了していたので、全景写真を撮影するための清掃を開始。平面図作成開始。

18日 全景写真撮影・平面図作成

19日 1トレンチを設定し掘削開始。平面図完了。

22日 1トレンチの断面図終了。

24日 2トレンチを設定し掘削開始。

28日 2トレンチの断面図終了。

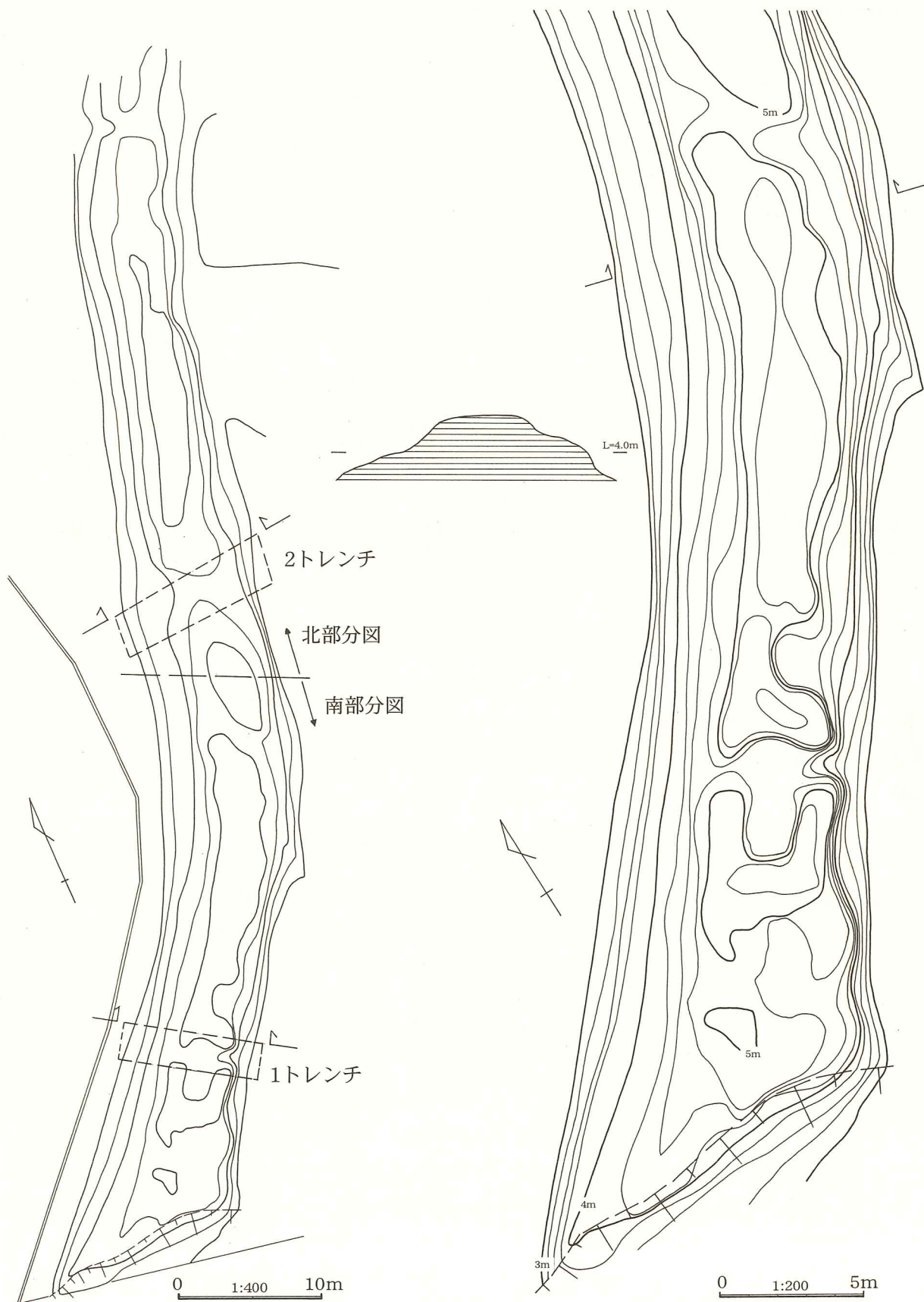


図20 富里旧堤防 2次調査全体図・南部分図

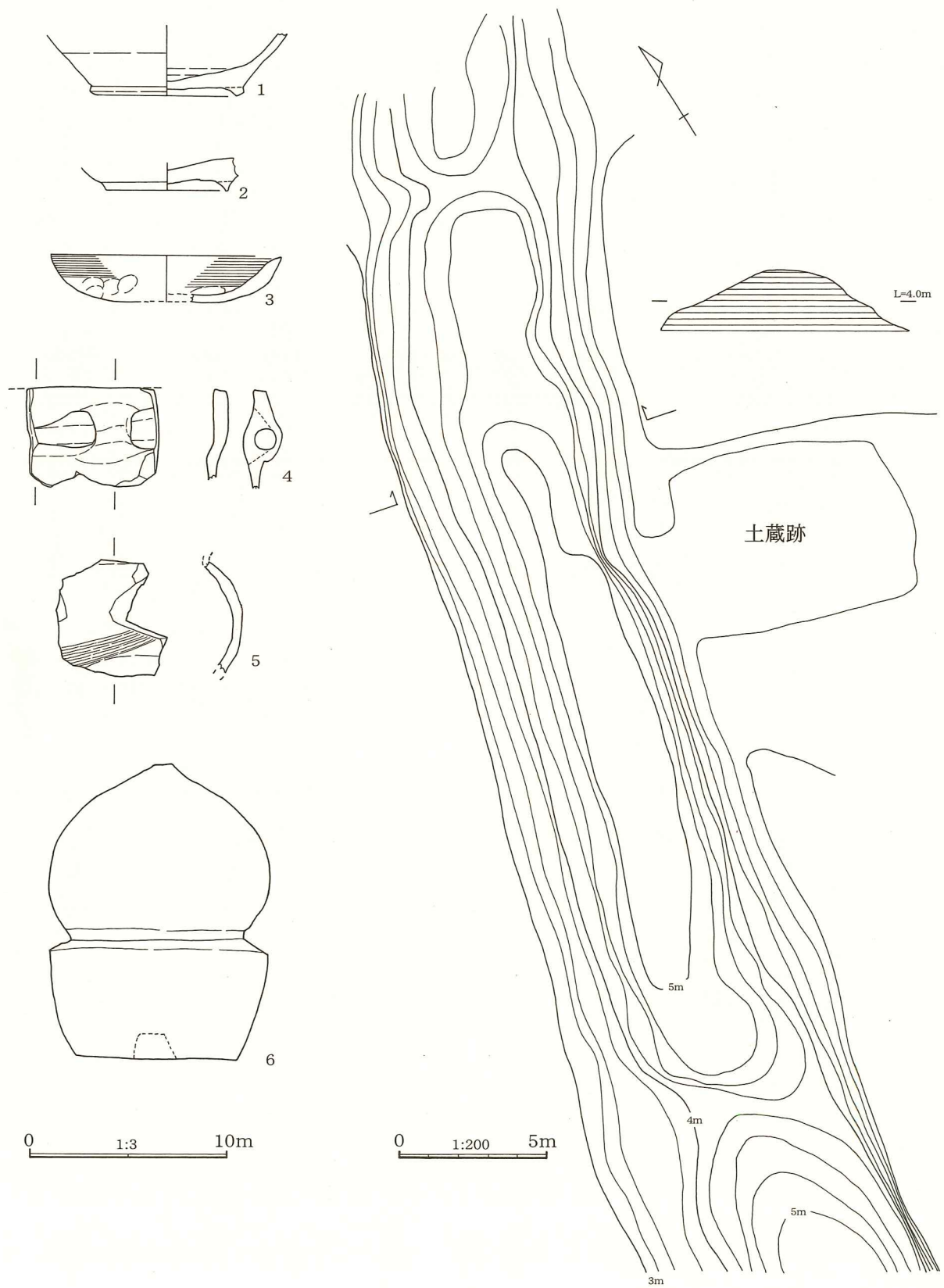


図21 富里旧堤防 2次調査北部分図・出土遺物

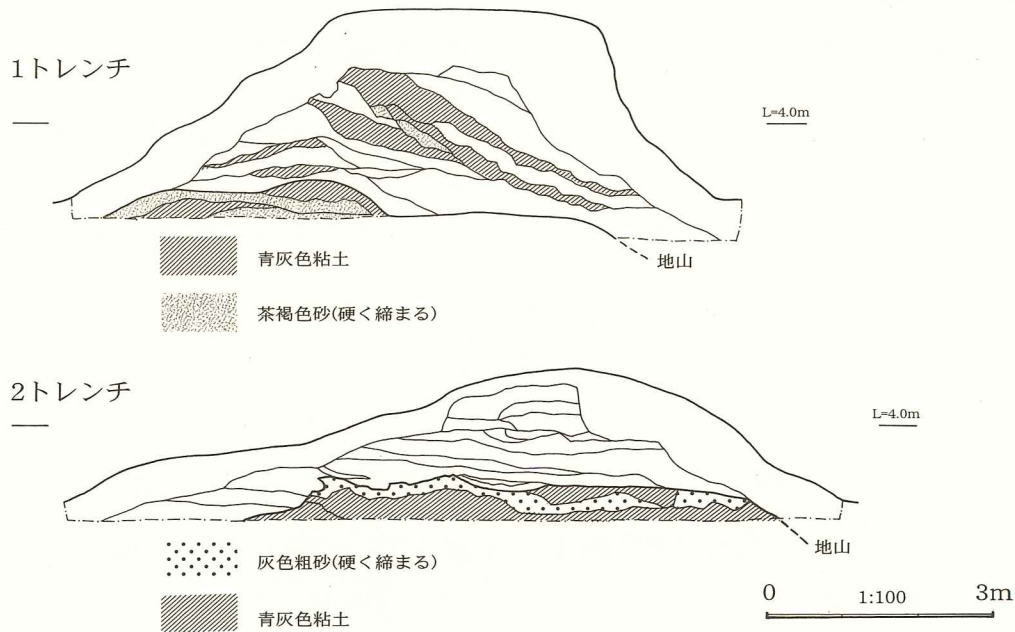


図22 富里旧堤防 2次調査土層断面図

29日 調査を完了し、器材撤収。

以上、実働で11日間の作業を実施した。

調査成果(図20・21, 図版10・11) 測量調査は堤全体の形状を少しでも把握したいという配慮から開発区域北側の測量可能な部分まで広げ、南端より85mの範囲に対して図化を行った。堤は南端から40mの地点で北方向に折れ、平面形が「く」の字状を呈している。この部分での堤の幅は8～10m、高さが2mとなっている。

1トレンチの土層断面は硬く締まった砂と青灰色粘土が互層に入る地山の高まりを基盤にして小さな台形の基礎を造り、その右側(川と反対の方向)に斜めになるように黄褐色粘質土と青灰色粘質土を交互に積んでいる。ここで観察できる土層断面は、先に紹介した1次調査における断面の土盛り(図19A-B断面)と共通する技法である。

2トレンチの土層断面は1トレンチの断面とは全く異なる。ここでは、ほぼ平らな地山の上に下層から水平方向に順次黄褐色粘質土を積み上げて築いており、下層は粘性が強く上層は砂質が弱い。

両断面に見る違いは、旧川道を復元してみると南側が川の攻撃面に面しており、北側は並行しているというような違いがあるようだ。水圧を強く受ける部分と、そうでない部分とで築堤技術が異なるということではないだろうか。

出土遺物(図21, 図版8) 調査によって出土した遺物は1トレンチが9点、2トレンチが21点である。このうち表土及び攪乱土の遺物を除外し図化可能な6点を示した。

完全な盛土内からの出土点数は1トレンチが5点、2トレンチが12点で内容は山茶碗・播鉢・かわらけ・土製鍋・常滑産陶器片・五輪塔空風輪で、近世に下るものは1点も含まれない。

1は渥美・湖西産の山茶碗で12世紀後半の所産、2は尾張系の山茶碗で13世紀初めの所産、3はかわらけで16世紀の所産と考えられる。4・5は内耳鍋で16世紀の所産、6は砂岩質の五輪石塔の空風輪で、13世紀代の所産であろう。

このうち3・5は2トレンチの基底部から出土しており、築堤の直接の年代を示すものと考えられる。

5 大野命山調査

調査に至る経緯 浅羽町の大野地区に所在する命山は、東隣の中新田地区に所在する命山と共に、1980年11月に浅羽町指定文化財に指定した史跡である。この遺跡については、これまで延宝の高潮の被害を受けた地域住民の緊急避難場所と伝承されてきたが、その詳細についての調査は行われたことがなかった。

浅羽町教育委員会ではこの両史跡を学術的に調査し、基礎資料の蓄積を行うきっかけを探っていた

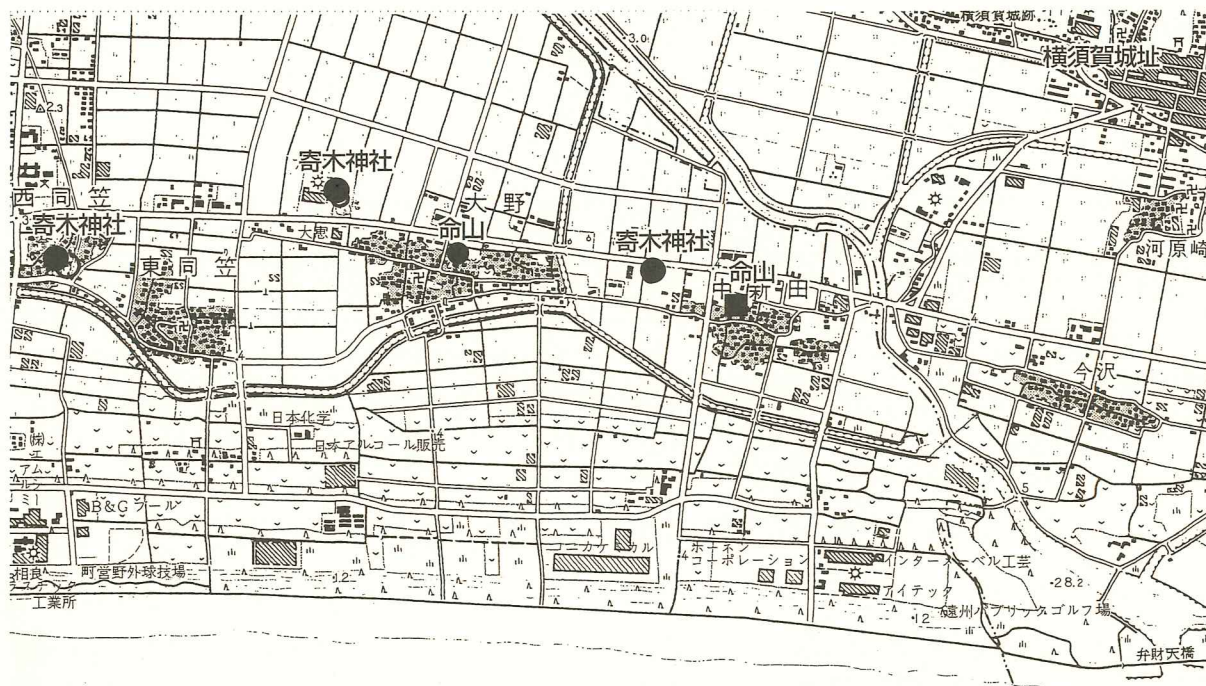


図23 大野・中新田とその周辺 (S = 1/25000)

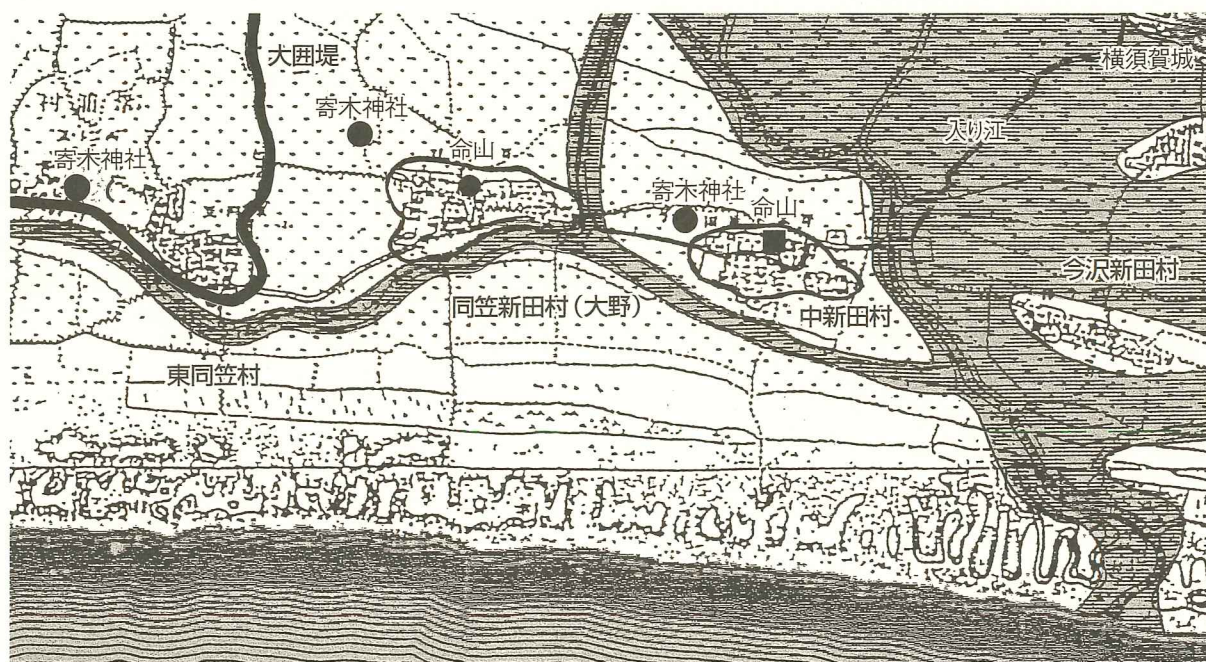


図24 江戸時代はじめ頃の同笠新田村・中新田村周辺復元図(明治23年の地図をもとに作成 S = 1/20000)



図25 大野地区と命山の位置(S=1/2500)

1. 寄木神社 2. 大野命山 3. 曹洞宗 海蔵山大福寺(慶長4年(1599)創建という)

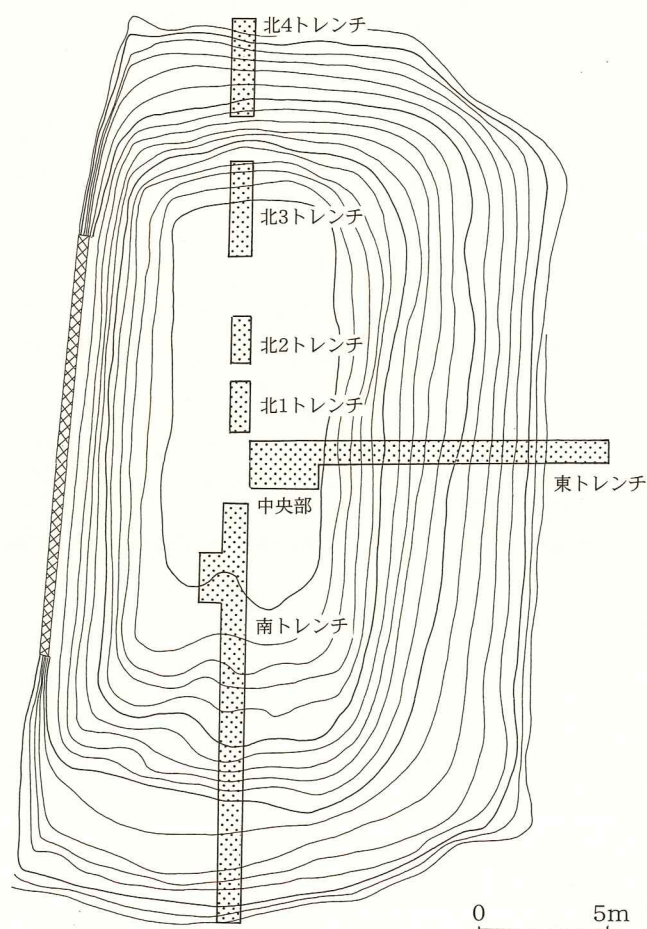


図26 大野命山トレンチ位置図

が、2002年度に緊急地域雇用創出特別対策事業「歴史遺産調査活用事業」として採択されたのを受け、2箇所の命山の測量調査とトレンチを設定した発掘調査を実施することができた。

調査では次の点に留意した。

- ①トレンチは最小限にとどめ、途中に掛かる樹木は伐採しないこと。
- ②両命山は同時に築かれたと考えられるので、形状、規模、土質、土盛りの技術を互いに比較しながら調査を進めること。
- ③詳細な図面がないので、50分の1スケールで20cmコンターの等高線を入れた図面を作製すること。
- ④土層断面では築造の単位がわかる場合にはできるだけ細かく分層し、図面も10分の1を基本に作製すること。
- ⑤事業の趣旨から、できるだけ多くの人に開放し、周知化をはかること。以上を目標として10月から12月にかけて調査を行った。

命山築造の歴史的背景

米所へのスタート浅羽を表す場合の例えとして「浅羽一万石」という言葉が良く使われる。これは

広々とした田園が広がる現在の景観を説明したもので、米の収穫量として一万石も獲れる豊かな土地ということだ。しかし、こうした豊かな土地は先人たちの気の遠くなるような苦勞と、努力の結果ようやくもたらされたものであり、一朝一夕でなされたわけではなかった。それを現在みるような形に造り替えてきたわけだ。

浅羽の土地の多くは海岸に面した低地からなっている。そこには広大な入り江、池、沼、蛇行して流れる川が多くを占めていた。ここに暮らす人々は度重なる洪水や大潮に悩まされ、自然災害を乗り越え、それを克服しながら時を刻んできた。浅羽の歴史を一言で説明すると、「水と闘い、水との共生を模索し続けた」歴史と言えるのではないだろうか。

浅羽での新田開発は遠江の中でも早く、戦国大名今川氏が治めていた16世紀後半に始まる。その後江戸時代前半へと続き、広大な水田と新たな村が登場している。その一つが今回の主役となる大野と中新田だ。

同笠を起点とした村づくり大野は江戸時代には同笠新田村と言った。横須賀藩の文学教授長を務めた八木義徳が幕末にまとめた『郷里雜記』の同笠新田村の部分には「元ハ東同笠ト同ジ里ナリ。慶安四年(1651)二分ケテ一村トセリ○寄木大明神。此モ中新田ト同神ニテ西同笠ノ別社ナリ。」と記されている。

大野は西隣に位置する同笠新田の人々の手によって、新たに開発された村で、1651年に独立して一村を設けたということだ。そして、同笠から自分達の産土神である寄木神社を分祠し、祀ったこともわかる。

中新田は江戸時代も同じ中新田村という名前で、『郷里雜記』には「此村ハ東西二川アリテ中島二成レル故ニ中新田ト云ナルベシ。○寄木大明神。産土神ナリ。此ノ村ドモノ成リ初ル時ニ海原ヨリ寄木坐ル神ナリト云ヘリ。本社ハ西同笠村ニアリ。」と記されている。これによって村が川に挟まれて中島となっているので中新田という名前が付いたこと。村の鎮守の寄木神社も西同笠から分祀したことがわかる。

村のお宮に注目してみると、大野も中新田も同笠の寄木大明神(現在の寄木神社)を分祠している。村の鎮守を共有すること、それはそこに暮らす人々のルーツが同じということなのだろう。江戸時代に入るとすぐに、同笠を起点とする村造りが進められたわけだ。

延宝の大潮延宝8年(1680)閏8月に江戸時代最大といわれる台風が中国地方から東海、関東、東北の広い範囲を襲い東海地方では富士市吉原、大井川、横須賀、浅羽、浜名湖口で高潮が発生した。

横須賀城下の被害は大きく、城の櫓が1、民家6000軒が流出、溺死者300人と報告されている(『徳川実記』)。では浅羽ではどうだったのだろう。

閏8月6日午前5時頃より風が吹き出し、10時過ぎになると高潮が押し寄せた。その波の一つは大きく、横須賀城惣曲輪前の中土居まで波が打寄せた。城の西側の村々、中でも西同笠・東同笠・同笠新田(大野)・中新田・今沢新田には潮が強くなり『百姓伝記』には老若男女300人が死亡したと記されている。

『長溝村開発由来記』には「天地を揺るがすような大風に誰もが肝を潰していたところに急に津波が押し寄せ、海岸通の「大田堤」は波で打ち切れ、浅羽中まで波が入り込んだ。潮の高さは米丸村(浅岡)で5尺余(約1.5m)、東同笠・同笠新田・中新田にかけての浜通りでは家々が押し流され、天井まで潮が満ちてきたので屋根を破って棟に上がったが、波に打ち砕かれて死ぬ人も多かった。その場は助かっても棟にしがみついたまま流され、江之端まで浮きつ沈みつ流れてきて堤に当たって家が砕け死亡するものもいた。」とある。当時の大野・中新田は三方を水に囲まれた村で、水害を受けやすい土地であった。この災害の後、残された人々は土を盛り上げて避難所の築山(命山)を築いた。

『広報あさば 2002年11月号』「あさばじっくり拝見⑤」より転載。

調査経過 (大野命山と中新田命山は一連の調査で実施したので併記した)

2002年10月2日 中新田命山の草刈並びに表土の清掃を行う。

3日 大野命山草刈並びに表土の清掃を行う。

7日 大野命山の測量調査開始、50分の1縮尺で20cm間隔の等高線を記入。同時にトレンチの設定も行う。東トレンチより掘削開始。

10日 大野命山測量終了、全景写真撮影。

16日 中新田命山の測量調査開始。

17日 中新田命山南2トレンチ設定、全景写真撮影。

18日 中新田命山測量終了。

19日 中新田命山南2トレンチ掘削終了、写真撮影。

20日 地域づくり大学受講生46名の見学あり。

22日 大野命山の調査に集中、南トレンチの設定、北1・3・4トレンチ設定。

24日 浅羽南小学校6年生総合学習の授業で発掘体験、16名が参加。

28日 大野命山南トレンチの盛土内より内耳鍋、かわらけが出土。

11月7日 大野命山北2トレンチの設定。

10日 南ふれあい学級見学 13名の見学あり。

18日 大野命山東トレンチ中央部断面全景写真撮影。

20日 大野命山の調査がほぼ終了、中新田命山調査再開北2トレンチ設定。

21～22日 大野命山見学会の準備作業、見学路設定など。

24日 大野命山見学会約150名の見学あり。

26日 中新田命山の調査に集中。東トレンチ設定。

12月3日 大野命山埋め戻し作業に入る。北・東トレンチのみ埋める。

6日 中新田命山見学会の準備作業、見学路設定。

8日 中新田命山見学会約90名の見学あり。両命山が比較できるよう大野命山南トレンチも開放する。

10日 中新田命山東トレンチ中央部、北2トレンチ中央部補足の掘り下げ。調査終了部分より埋め戻しに入る。

18日 器材を撤収し全作業を終了する。

以上、実働日数で47日間の作業を実施した。

調査成果 形状(図27、図版12)大野命山の現状は南北方向に35m、東西方向に19m、裾からの比高差3.4mの規模を持ち、平面形が長方形をした築山である。

詳細に見ると、西側が車道拡幅によって削られ、標高5.8mから裾の部分が消滅し断面をコンクリートブロックで保護している。東北の隅は墓地によって削られ、標高3.2mより下は変形している。これに対して東南の隅は張り出している。南斜面は標高4mから3.6mにかけての範囲で平坦になり、その裾は緩く弧を描き水田へと続く。

このように大野命山は造られた当時の姿が大きく崩れているが、東斜面は等高線がきれいに並び、原形を留めている。また、北斜面も攪乱を受けた東北隅、西側を除けば等高線が均等に並び原形を留めていると考えられる。この2方向の斜面を抛り所として原形を復元すると、その形態は左右対象形の整然とした台形の築山になるものと考えられる。その詳細については3章の総括でふれることにする。

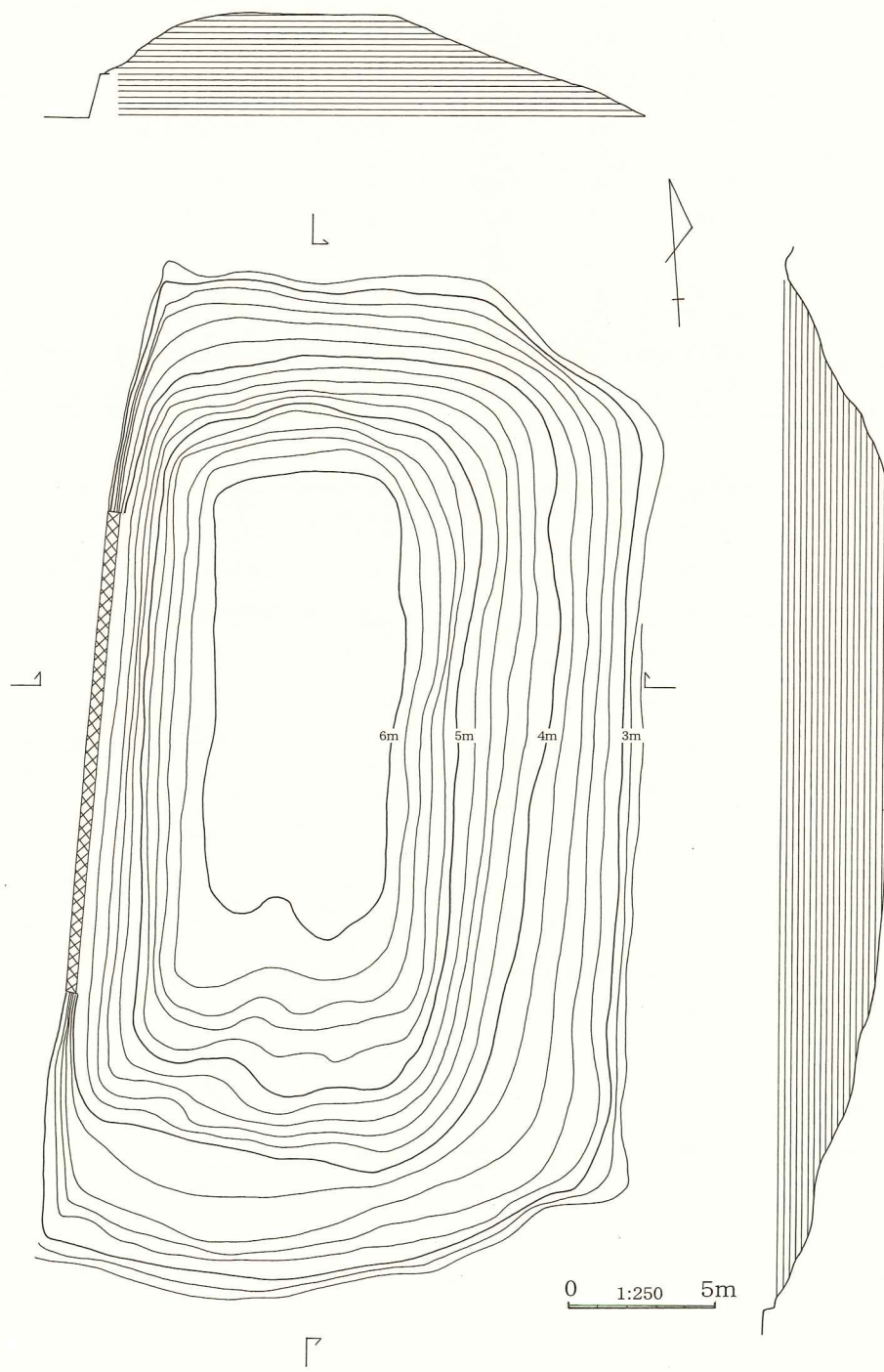


図27 大野命山実測図

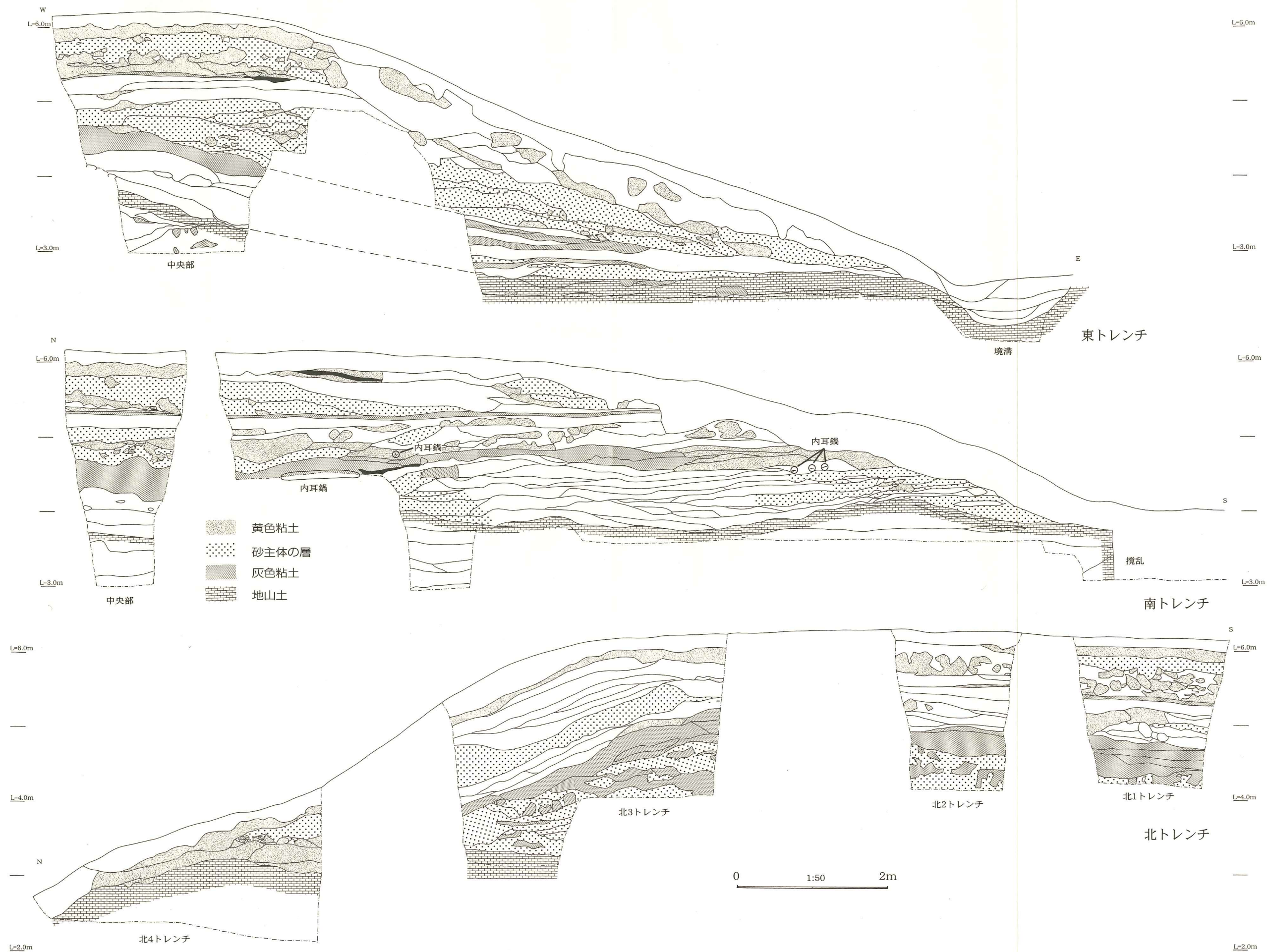


図28 大野命山土層断面図

トレンチ調査の概要(図26・28)命山の築造技術を検討するために、築山に対してトレンチを設定し土層断面の観察を行った。トレンチは測量調査によって選んだ築山の東西・南北各主軸に沿って設定したが、途中で樹木や祠という障害物がある場合は手を付けなかった。

大野命山は西側が削られているので、東西方向は中心線より東側に対して設定した。これに対し、南北方向は南裾から北裾にかけて通した。北トレンチは途中で障害物があるので4箇所に分割して調査を行い、図上で一つの断面図に編集した。

東トレンチ(図28東トレンチ, 図版14-1)東西13.6mに及ぶトレンチである。西端より4～6mの間は桜の木が生えているので残し、これ以外の部分では地山土まで掘り下げた。地山は西に向かってわずかに高くなっている。褐灰色粘質土を基本とし一部に暗黄灰色砂が見られる。この粘質土は前川によって形成された自然堤防と考えられる。

地山の直上には灰色粘土(厚み10cm以内)と黄燈色粘質土を薄く交互に斜面に合わせて斜めに積み、その厚みは中心部(西側)に行くに従って厚くなっている。この土層の上には細かい粘土のブロックが多く混じる砂質土を、やはり中心部に行くに従って厚くなるよう斜めに積んでいる。ちなみにトレンチ西側での厚みは70cmほどである。

最後に大形の粘土ブロック(にぶい黄色粘土)が混じる暗灰黄色粘質土を積んでいる。状態の良い中央部の表土下には10～20cmの厚さで、にぶい黄色粘土の層が一面に確認できるが、東斜面の表土にもこの粘土が一面に貼られていたものと推定している。

中央部(図28東トレンチ中央部, 図版13-4)大野命山中心部の土層の状況がわかる。西端から1mの地点では地山が最も高くなり(標高3.8m)、この部分の地山土は黒色砂である。標高5mまでは東側と同じように斜めに土盛りを行うが、これより上は水平に積み上げ、明確な違いが見られる。

境溝(図28東トレンチ境溝, 図版14-3)命山の東隣の土地は現在畑となっているが、かつては住宅(近世に遡る)が存在し、その宅地との境溝が東裾で確認できた。幅1.6m、深さ36cmの溝であるが、底近くの地山は黒色砂で、ボーリングステッキで確認したところ、下層はこの砂が続いている。命山が築かれた土台をなす粘土の地山の堆積は30～40cmほどの厚みでしかない。

南トレンチ(図28南トレンチ, 図版13-1～3)東トレンチの中央部と重なるので一部途切れるが南北16mに及ぶトレンチである。この部分の地山は起伏が激しく南寄りの高まりは自然堤防と見られ硬い黄褐色粘土である(表面に植物の根痕跡が多数見られる)。北寄りには浅黄色粘質土で40～70cmの厚みの下は中央部と同じ黒色砂となっている。

地山直上には砂質の強い淡黄色土、オリーブ黄色土を水平方向に薄く標高4.5m前後まで積み上げその上に黄色粘土・灰色粘土を20～30cmの厚さで積む。この土層の上部(北側)、下部(南側)からそれぞれ内耳鍋がまとまって出土した(遺物の項で詳述する)。この上に黄色粘土を主体とする土を積む。標高5.2mには厚さ5cmほどの灰色粘土の層が断面全体に見られる。これは人工のものとは考えられず、作業を中断した間に堆積したのではないか。

最後に灰オリーブ色の砂を中心部に置き、外側には粘質土を置いて盛り上げ、最後は黄色粘土を表面に被せて仕上げている。

北トレンチ(図28北1～4, 図版15トレンチ)南北16mの範囲を4分割し10.5m分の調査を行った。北3・4トレンチでは地山を確認した。この部分の土盛りの南トレンチと類似するが、下層に大形の粘土ブロックを含んだ砂層が全体に見られるのが特徴である。

東西方向の土盛りは斜めに積み上げていたのに対し、南北方向では水平方向に積み上げるという違いが見られた。大野命山の土盛りには大きく3工程が見られるが、これについては3章総括で触れる。

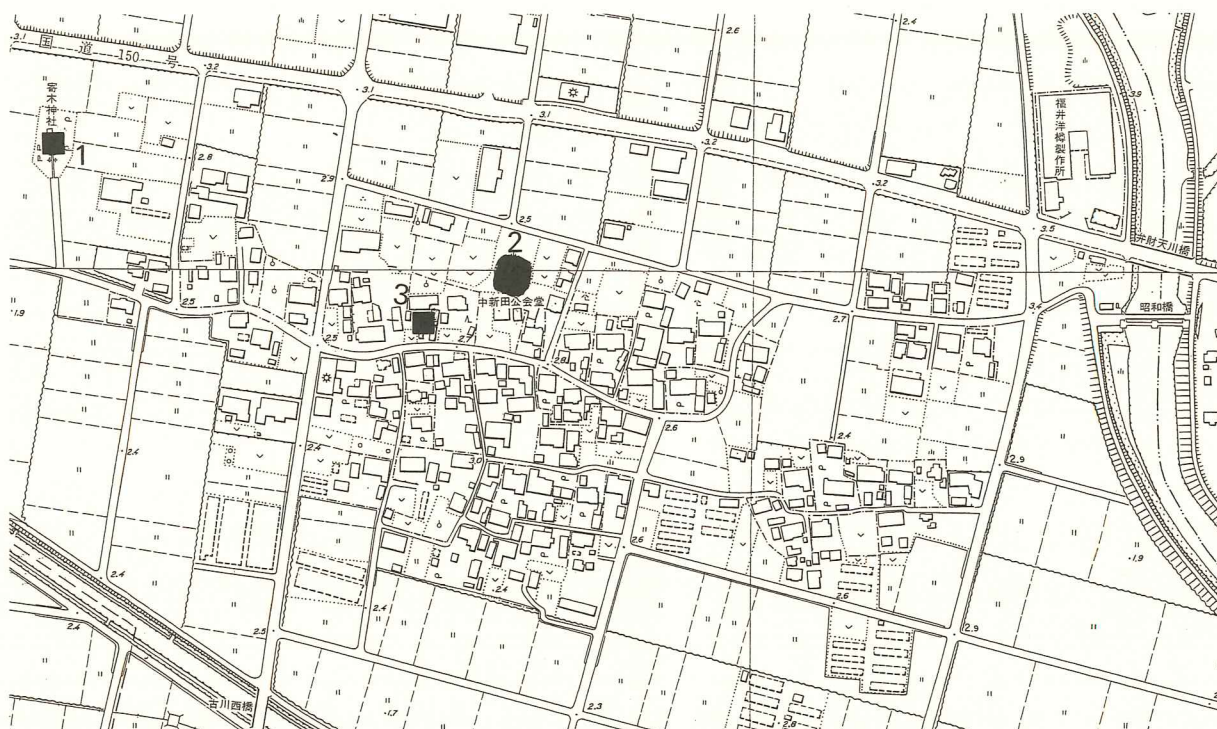


図29 中新田地区と命山の位置(S=1/2500)

1. 寄木神社 2. 中新田命山 3. 海岸山新造寺跡

6 中新田命山調査

調査成果 形状(図31, 図版16)

中新田命山の現状は南北方向に32m、東西方向に27m、裾からの比高差4.9mの規模を持ち平面形が方形に近い築山である。

詳細に見ると、西裾は標高4mから5mにかけての範囲で平らとなり、断面図で見て西側斜面は東側斜面に比べ傾斜が急である。

北裾もやはり標高4mから5mにかけての範囲で平らとなり、北側斜面は南側斜面に比べ傾斜が急である。この北・西という方向は遠州特有の「空っ風」が直接築山に当たる面であり、雨風による侵蝕と考えられる。

これに対し東面、南面は原形を保っていると考えられ、当初は整った方形を呈していたのであろう

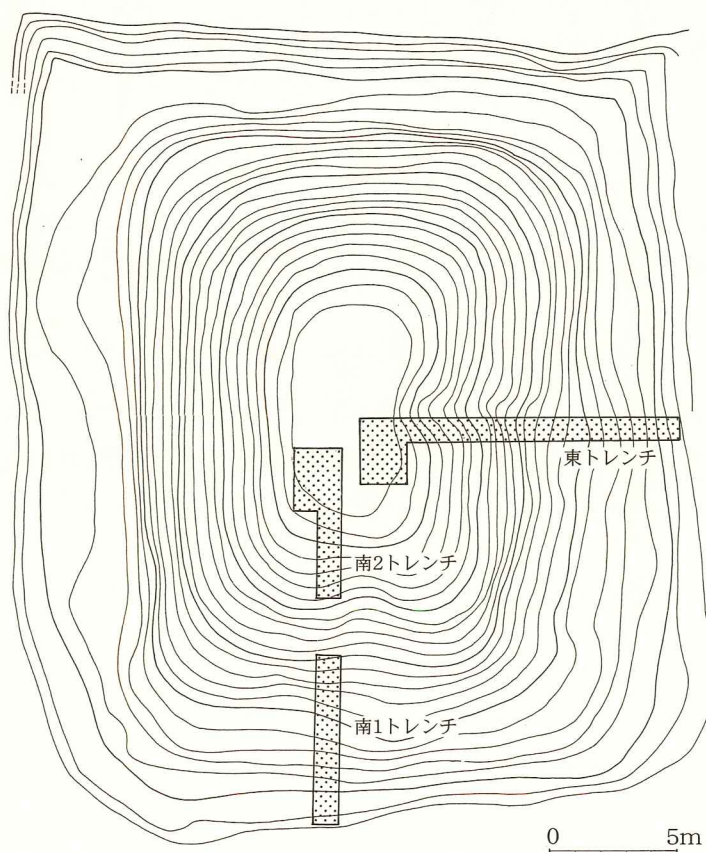


図30 中新田命山トレンチ位置図

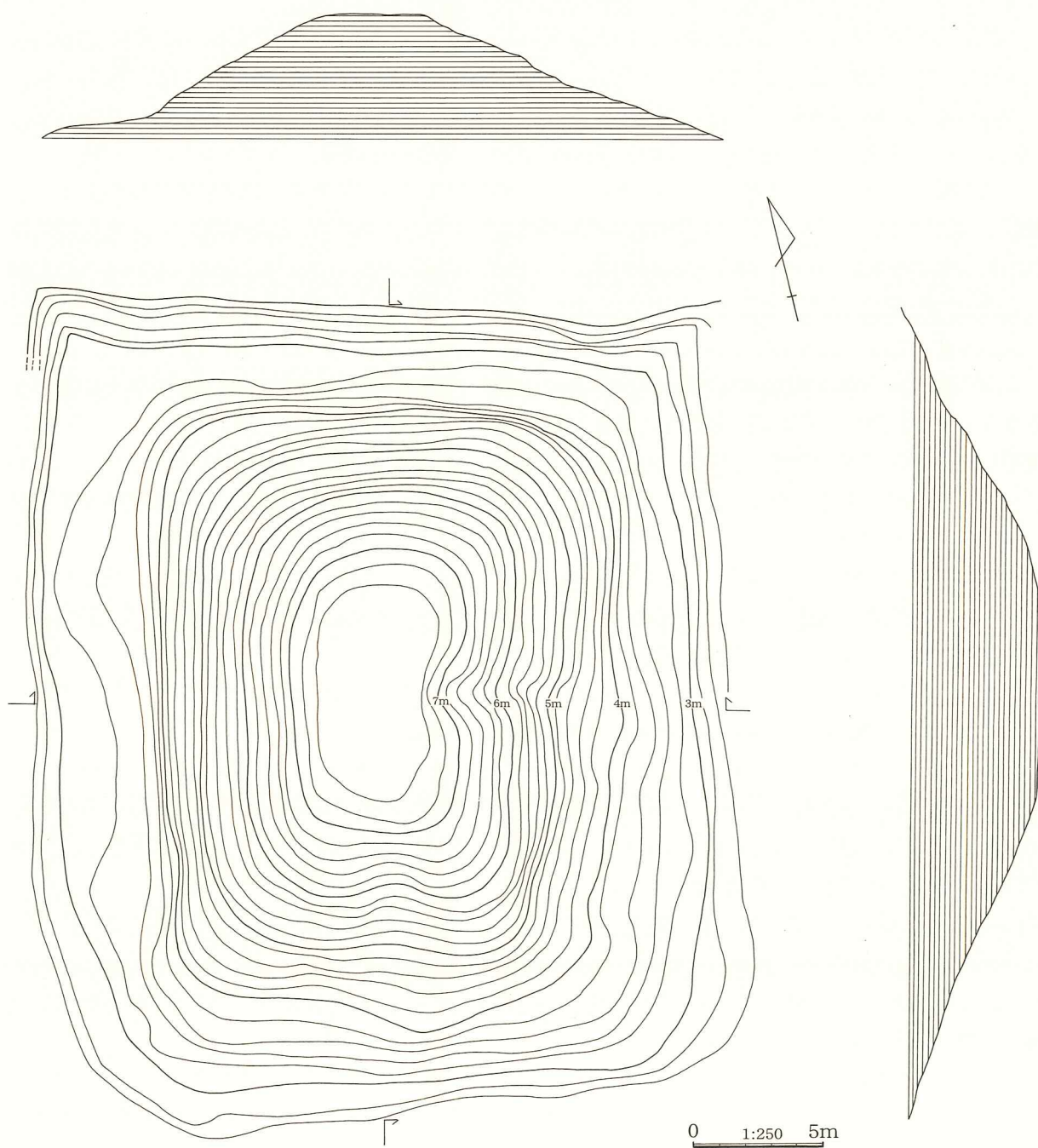


図31 中新田命山実測図

トレンチ調査の概要(図30)命山の築造技術を検討するために、築山に対してトレンチを設定し土層断面の観察を行った。トレンチは測量調査によって選んだ築山の東西・南北各主軸に沿って設定したが、調査期間、予算の関係から全体を通すことができず、原形を保っている東斜面、南斜面に絞った。南トレンチは途中で桜の木が生えており2分割して設定した。

東トレンチ(図32東断面、図版17-2、図版18-1、図版19)東西方向に設けた25.5mのトレンチである。南2トレンチ北壁の土層も通して図示したので全長31m分の断面となった。

地山土は灰黄色粘質土で東裾から6m分を確認した。西に行くに従って高くなり、西端では80cmも上がっている。地山土の上にはオリブ黄色砂を置き、その上には黄灰色粘質土を斜めに積んでいる。その上には灰黄色の砂質土、さらにその上には、にぶい黄色粘質土及び黄灰色粘質土を積むというように、砂質土の次は粘質土、再び砂質土と性質の異なる土が交互になるように積み重ねられている。

この断面で注目しなければならないのがトレンチの西側である。標高6mまで斜めに積み重ねられていた砂質土がここでピークを迎え、今度は西下がりで傾斜している。同じ積み方は標高7mの粘質土でも見られ、両者はちょうど築山頂上の平場が終わり、東側に傾斜し始める変換点にあたっている。中心部の近くでは標高5mまでは土層が水平になるように砂質土と粘質土を交互に積むが、5mより上では山を重ねるようにして積み上げているのである。

このような積み方は西側変換点の部分(南2トレンチ北壁)には見られず全体に西下がりの土層となっており、この方向の土盛りが東側に中心をずらして行われていることを示している。

南トレンチ(図32南1・2断面、図版16-2、図版17-1・3、図版18-2)南北方向に設けたトレンチで、途中で桜の木が生えているので2箇所分割した。1トレンチは長さ14m、4mの間隔を置いて2トレンチは長さ11mで東西断面西壁の土層も通して図示したので全長32m分の断面となった。

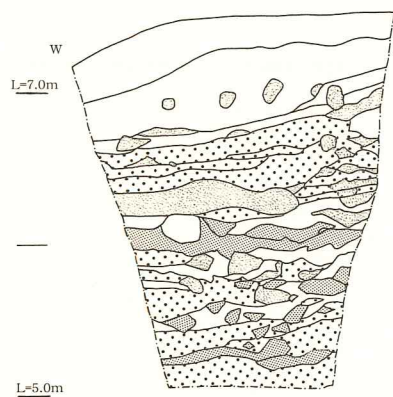
1トレンチでは地山土を確認した。灰黄色粘質土で北へ行くに従って高くなり、トレンチの北と南では1mほどの違いがある。命山の南に隣接して近年まで屋敷が所在し、その敷地との境溝が地山土を掘り込んで設けられていた。これは大野命山と同じである。

地山土の上には灰黄色粘質土・にぶい黄色粘質土を地山の傾斜に合わせるようにして1mほど積み上げ、標高3.8mあたりから水平方向に砂質土を積み始めている。

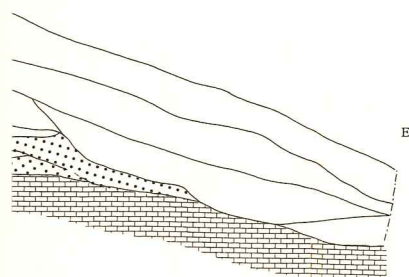
2トレンチは全域を標高5m(頂上から-2.6m)まで掘り下げ、最後に北隅をさらに1m分掘り下げ標高4mまでの土層を確認した。この部分の土層は全体が北下がり傾斜している。トレンチ最下部では砂混じりの灰色粘土が水平に積まれる。この水平に積む土層の上面、標高4.4mのラインは北隣の断面、1トレンチの断面でも確認しており、築山の土台をなす土層の上面と考えられる。その上には大形の粘土ブロックが多量に混入する灰色粘土を積み、その上には黒砂・灰色砂を被せ、さらに粘質土、その上には砂質土を積み、東断面で確認したように山状に積み上げている。そのピークは標高6.6mである。このピークの内側(北側)斜面には灰色粘質土と黄色粘土を交互に積むが、特にこの部分には黄色粘土ブロックが多量に含まれている。

南北断面でも東西断面で確認したような山状に土を盛り上げる積み方が見られたが、ここでも中心にピークがくるのではなく、大きく南にずれている。これは、水平に盛り上げた土台の上に逆L字状に山を築き、その内側に土を被せていったことを示している。

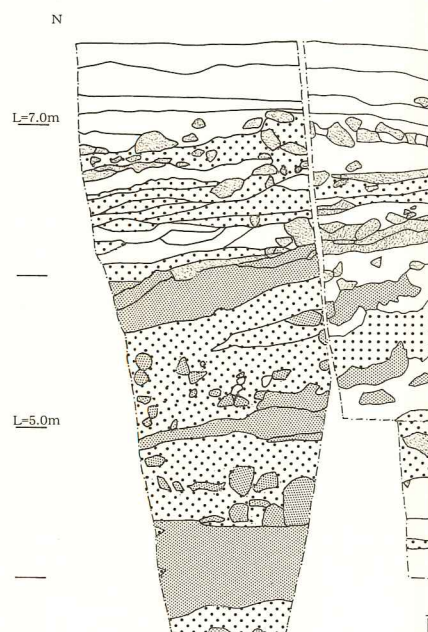
境溝(図32南1断面溝、図版17-3)南トレンチの裾で確認した境溝は南肩が調査区域外に広がるが、幅90cm、深さ60cmほどの溝で内部には焼土と炭が充満し、中に陶器、壁片が混じっていた。恐らく火災に遭った家屋のものを投げ込んだのであろう。溝は築造当初から設けられたものではないだろうか。



L=3.0m



東トレンチ



L=3.0m

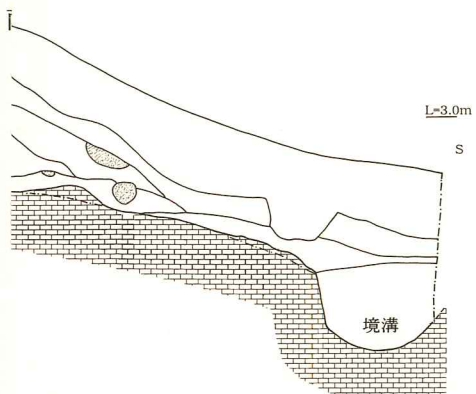


図32 中新田命山土層断面図

出土遺物(図33・34、図版20)大野命山は東側に民家が存在した関係から東側斜面の表土より近世以降現代に至る遺物が出土するが、これらは除外した。直接関わる遺物に限定すると古銭・内耳鍋・かわらけ・水甕・火鉢・播鉢が盛土内より出土している。その総点数は細片も含め40点ほどである。このうち8点を図示(1～8)した。

これに対し、中新田命山は各トレンチから、かわらけ・鍋の細片が5点出土したにすぎない。まとまった遺物は南側の境溝内から焼土・炭とともに一括投棄された2点の陶器(9・10)が出土したのみである。

古銭(図33)は4点ある。1は東断面の下層部から出土した。半分が欠損するが元豊通寶(北宋、初鑄1078年)であろう。2～4は寛永通寶で2は表土から、3は表採、4は東トレンチ中央部排土からそれぞれ出土した。寛永通寶はいずれも表土付近からの出土で、命山築造とは直接関わらない。

1は甕、土師質で横ナデを用いて調整している。南トレンチの黄色粘土中(標高4.6m)から出土した。

2は火鉢と考えられる。常滑産ではないか。突帯に等間隔に指押えを施す。東トレンチ中央部浅黄色粘質土(標高5.3m)から出土した。

3～5は内耳鍋。3と4は同一個体の可能性がある。これらはいずれも南トレンチ北寄りの灰色粘土中(標高4.4m)からまとまった状態で出土した。実際に使用した鍋であるが、労働者の食事を築山の上で調理したとは考えられないだろう。この土層は大野命山築造の第一工程の上面と考えており、築造中の祭祀に伴い煮炊きを行った鍋を破棄したものと考えている。

3は口径部の30%の破片。4は口径部の20%の破片。5は口径部の20%の破片。いずれも表面には一面に煤が付着している。

6は播鉢、志戸呂産か。口径部の15%の破片で全面に鉄釉を施す。南トレンチの灰色粘土層(標高4.5m)からの出土である。

7は播鉢、瀬戸・美濃産。底部の50%の破片で全面に鉄釉を施す。かなり使い込んだらしく内面の器表が一部剥がれ落ちている。北1トレンチの灰色粘土層(標高4.4m)からの出土である。

8はかわらけ、ロクロ使用の製品で硬く焼き締まっている。口縁に灯芯の痕跡が明瞭に残っている。南トレンチの灰色粘土層(標高4.4m)から出土した。

9は鉄釉片口であろう。底部の40%の破片、中新田命山の南裾境溝内から出土した。

10は瀬戸産の腰鍔茶碗。第2段階第5小期(17世紀末)のもの。中新田命山の南裾境溝内から出土。

大野命山の出土遺物は大部分が南トレンチを中心に標高4.4～4.6mの土層中から出土している。これは延宝8年(1680)以後僅かの期間に築造された土層である。

中新田命山境溝出土の磁器は命山築造後間もなく火災に遭った家屋で使用されたものであろう。いずれも興味深い遺物である。

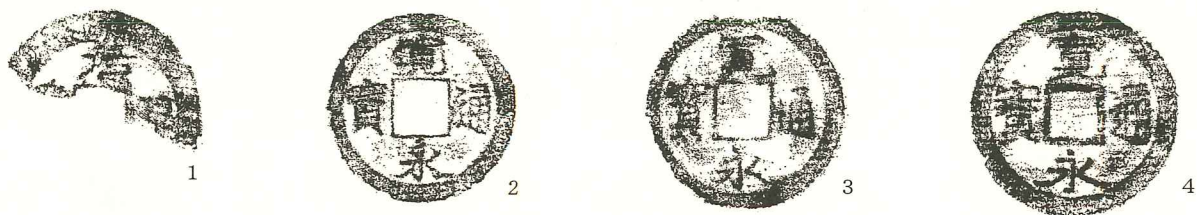


図33 大野命山出土古銭

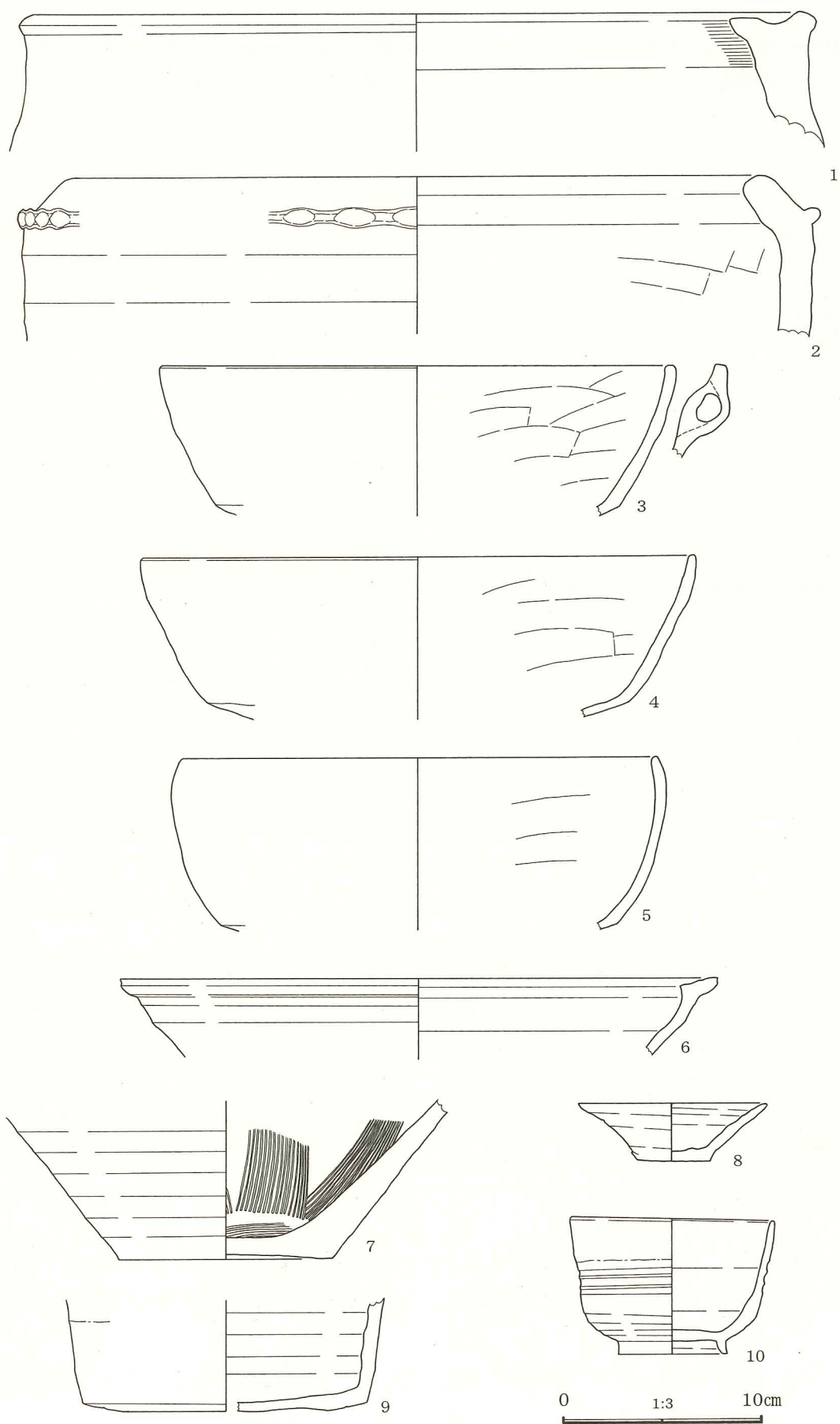


図34 大野命山・中新田命山出土遺物

第3章 総括

1 西向遺跡1・2次調査

西向遺跡の1次調査によって地表下4m、標高1mのレベルに存在する自然堤防上で弥生時代後期から13世紀初頭に至る遺跡が確認されたことは、現在まで殆んど遺跡の存在が知られていない太田川流域の遺跡の在り方を示唆する重要な発見であった。

1次調査地点のピークは12世紀代で、これは東北方向に800mの地点に所在する太田川と原野谷川に挟まれた集落である長溝中島遺跡と同じ傾向である。

これに対し2次調査地点は標高3m前後のレベルに存在する自然堤防上の集落で、15世紀代を中心とする遺跡であった。この間約2世紀の空白があり、急激な土砂の堆積によって集落面が2mも上がっている。2次調査で確認できた遺構群は、中村が最初の史料に登場する寛正6(1465)年(第1章歴史的環境参照)の年代にあてはまり、今川氏の所領から室町幕府の御料所となった頃のものである。

現在の中村は太田川・原野谷川合流工事が行われた近世初頭に現原野谷川の東に移転したものだが、その前段階の集落が確認できたことは伝承や近世地誌類を検証するものとして重要な発見であった。

2 富里旧堤防1・2次調査

この堤防の調査を行った頃は、県内では余り中世遺跡の発掘が盛んでなく、まして堤防は調査例が殆んどなく、全てが手探りの状態であった。2度の調査で攪乱を受けていない堤の盛土からは近世に下る遺物が出土しないということが検証され、2次調査の結果、13世紀、16世紀代の遺物を確認した。五輪石塔、山茶碗の出土は、富里集落にこの時代の集落跡が存在することを示唆するものである。

築造の年代を示す遺物は16世紀代のもので、今川氏による16世紀後半に進められた「遠州所々新田開発」の一環として築かれた可能性を指摘できるようになってきた。

3 大野命山・中新田命山

二つの命山を比較しながら学術調査として実施できたことは貴重な経験となった。測量調査と土層断面の検討によって築造当初の原形を復元してみた。

大野命山は西側の部分が削平されているが、調査の結果、恐らくその時の排土を南裾に積んだらしく南側が孤を描いて膨らみ、地形がなだらかになっている。これは北側の地形と比較すればよくわかる。この部分の断面を観察し、土の積み具合を検討すると、やはり南裾の部分は削られ、その上に大きく盛土されていた。ここに屋台小屋を建てたという。このように造られた当初の規模と形状を復元すると、南北約31m、東西約24m、高さ約3.5mの長方形となり、現状とはかなり異なる。

中新田命山は当初の姿を留めているが、雨風が直接当る北側と西側の侵蝕が激しく、かなりの土砂が削られて変形していた。しかし、裾部分は原形のままであることがわかった。当初の規模と形状を復元すると、南北約30.5m、東西約27m、高さ約5mの方形となる。

次に復元した両者を比較すると、東西方向では両方に余り差は見られないが、中新田は一回り大きく高さが1.5mも高い。ところが、南北方向では大野が僅かに大きく逆転している。この方向の大野の頂上部平場は中新田に比べるとかなり広くとってあることがわかる。面積で比較すると、中新田が約68㎡、大野が約136㎡とちょうど半分の面積となっている。

積み上げた土量では大野が約1500㎡、中新田が約2200㎡と1.5倍ほどの量である。大野は平場の面積を広く確保する方向を目指し、中新田は高さを求める方向を目指したということだろう。

最後に土層断面を検討して盛土の作業工程を復元し、両者の比較を行ってみた。大野では地山の直

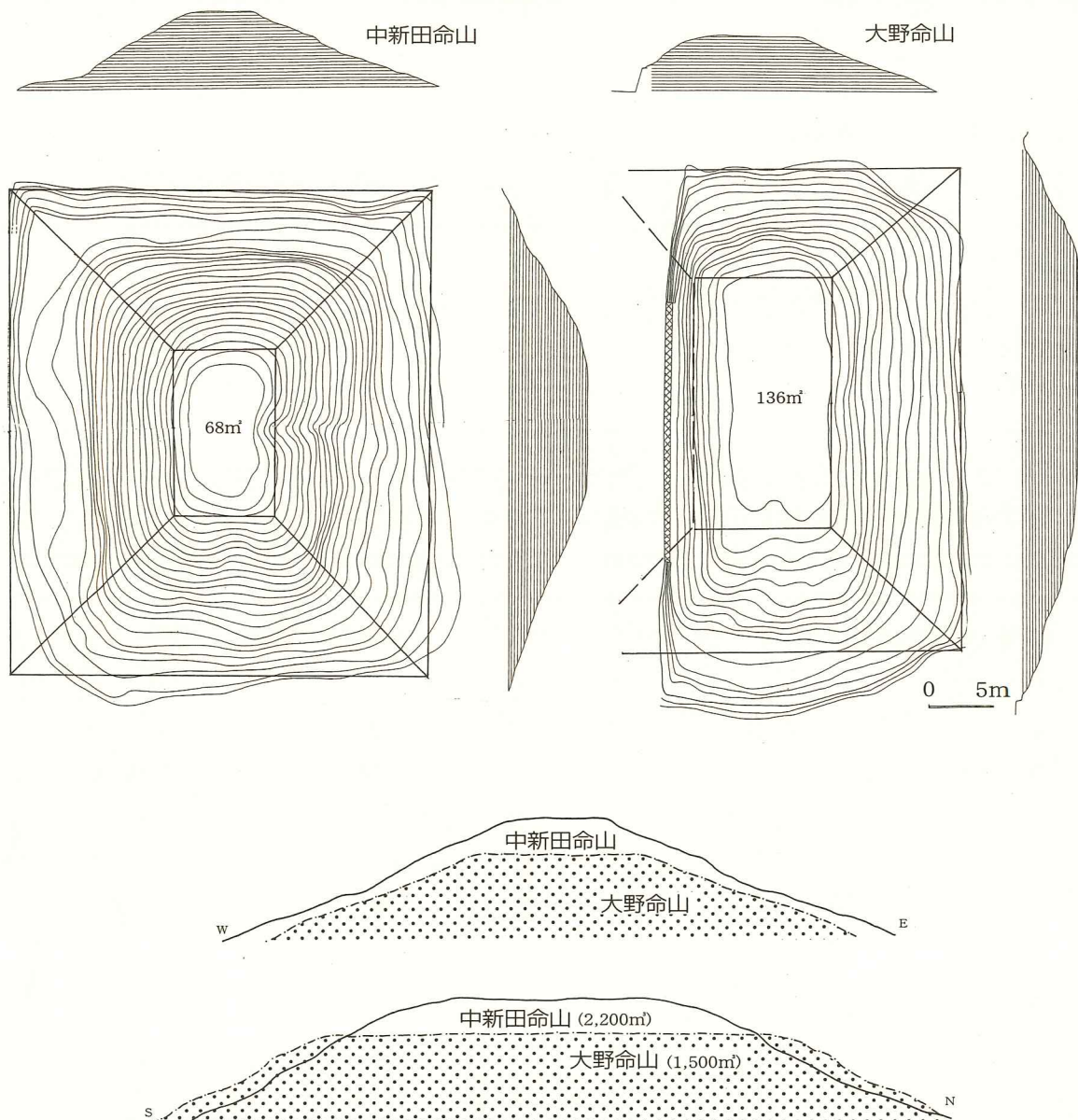


図35 大野命山・中新田命山の復元と断面の比較

上からほぼ1mづつ、三回の工程に分けて斜面を除きその土を水平方向に積み上げている。

これに対し、中新田では地山の直上1mほどは水平方向に積んで土台を造るが、その上には中心部に向けて傾斜を持たせるように積み上げ、断面が三角形状になっているのが特徴である。この工程を繰り返し、土をより高く積んでいる。両者の積み方の違いは断面を比較すれば明確にわかる。

東西方向においては大野では下層から順次斜め方向に土を積み上げ、三回の工程に分けて高さを増しているが、中新田では1mまで水平方向に積んだ後、山を重ねるように土を積み上げ五回の工程に分けて完成している。

隣同士の村でほぼ同時に築山を築き始めたのに、なぜ盛土の方法に差が生じているのか、それは両者が確保できる土の性質の違いによるのであろう。大野は自然堤防上に位置する村で比較的粘土を確保しやすかったのに対し、砂地を中心とする中新田では砂を中心に土を用いなければならなかった。そのハンディを盛土技術によってカバーし、より高い築山を出現させることに成功したのではないか。

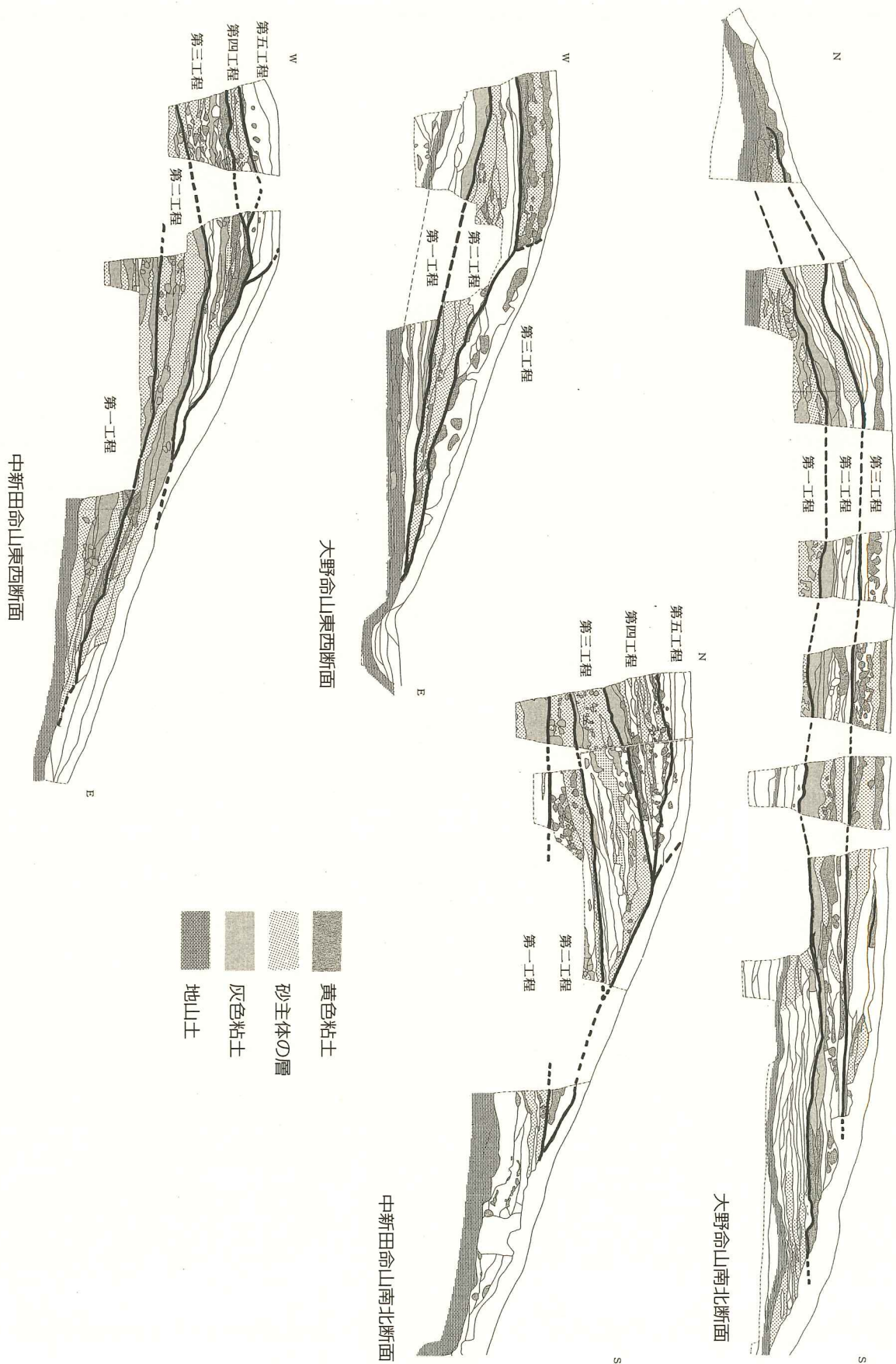


図36 大野命山・中新田命山盛土工程の比較(S=1/260)



1. 西向遺跡周辺(南上空より)



2. 西向遺跡1次調査地全景(上空より)



1. 調査前の調査地



2. 試掘トレンチ断面



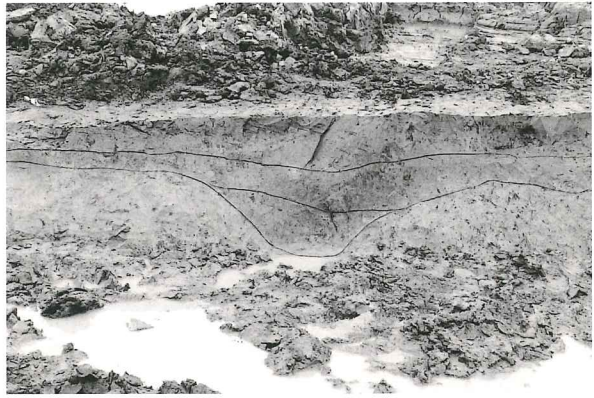
3. 西向遺跡1次調査地全景(南より)



4. 西向遺跡1次調査地南側(西より)



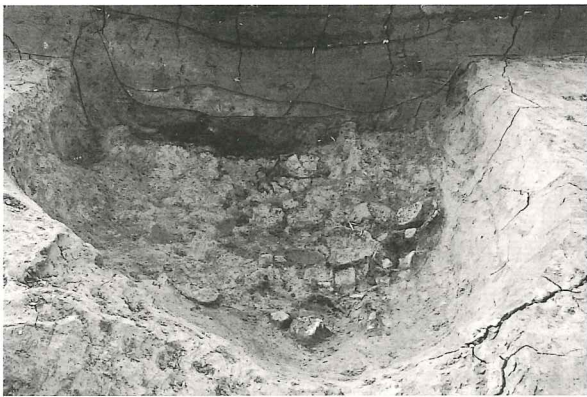
1. 溝2土層断面



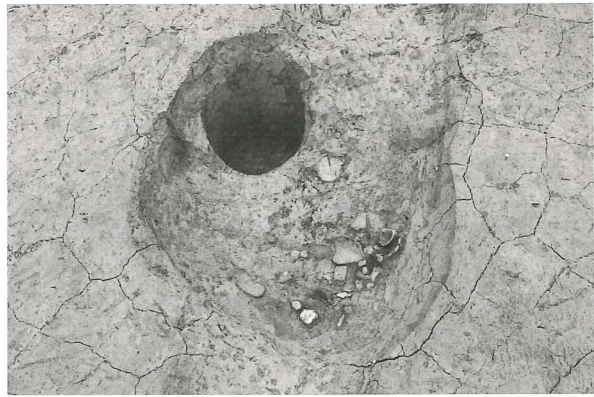
2. 溝6土層断面



3. 溝6・7



4. 土坑3土層断面



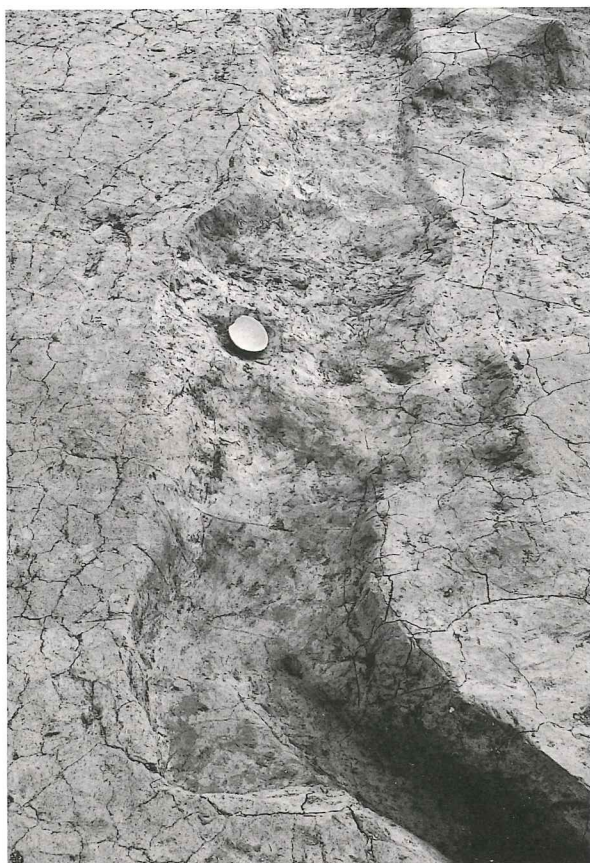
5. 土坑3上面



6. 土坑3完掘状況



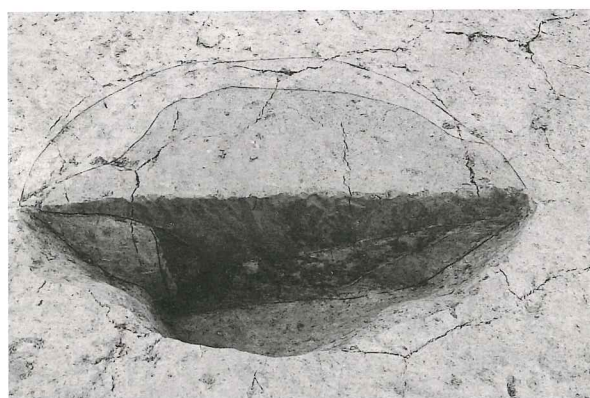
7. 土坑3遺物出土状況



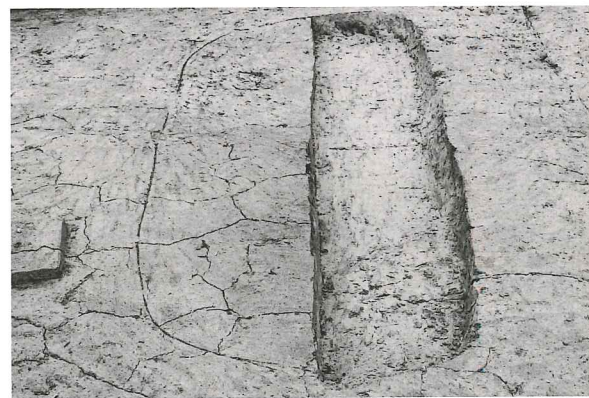
1. 溝1完掘状況



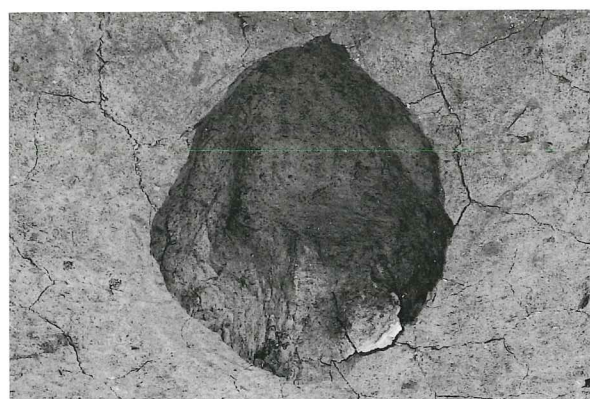
2. 溝3完掘状況



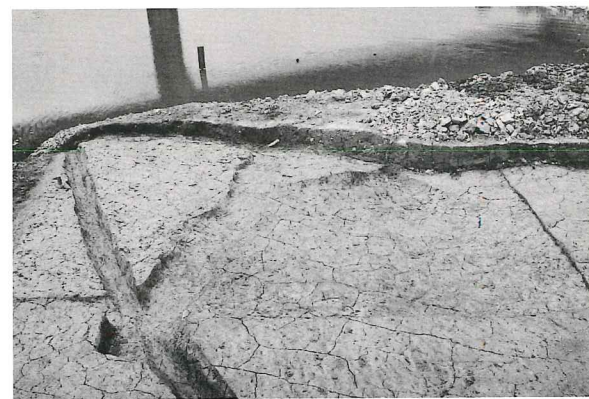
3. 土坑7半截状況



4. 土坑5半截状況

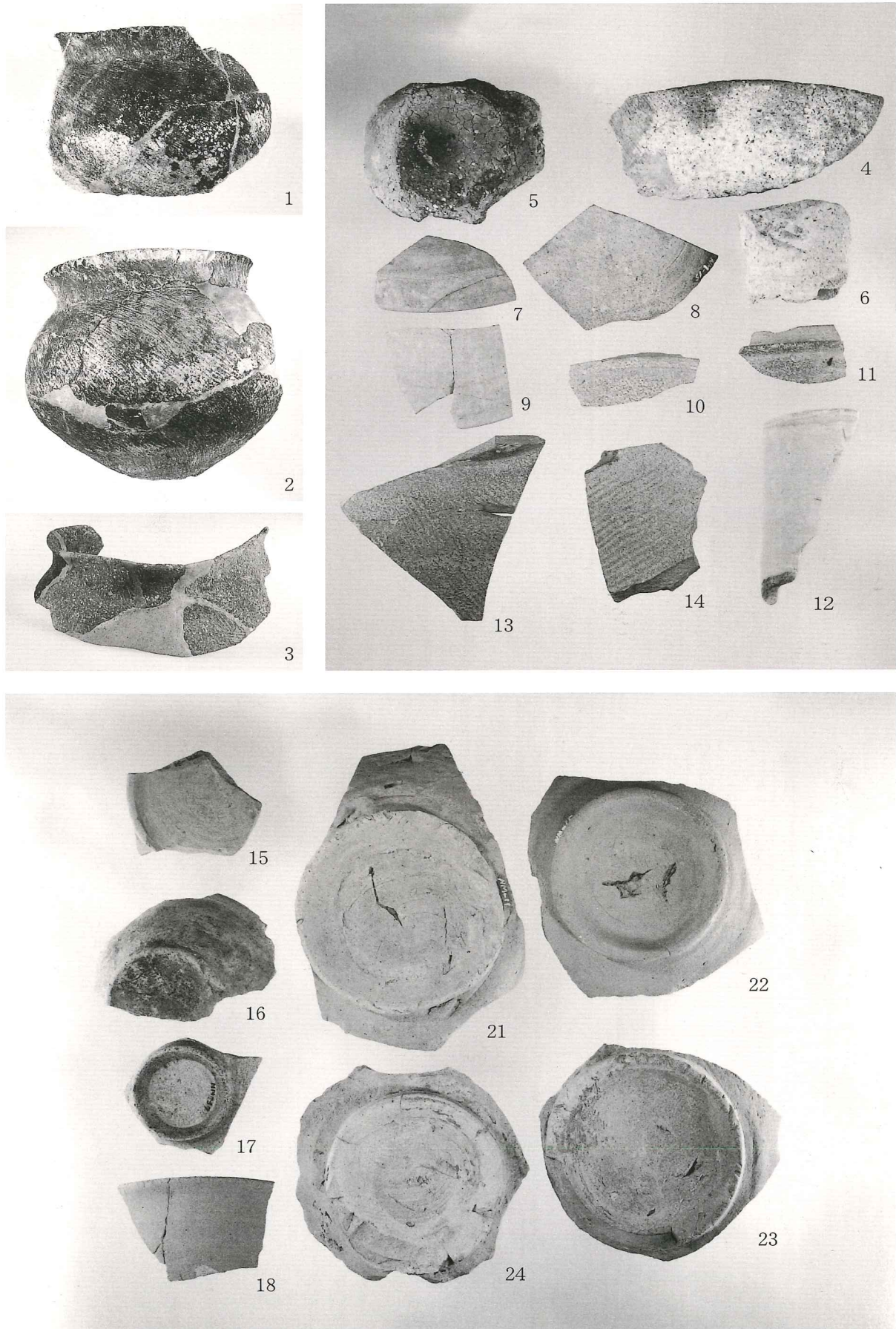


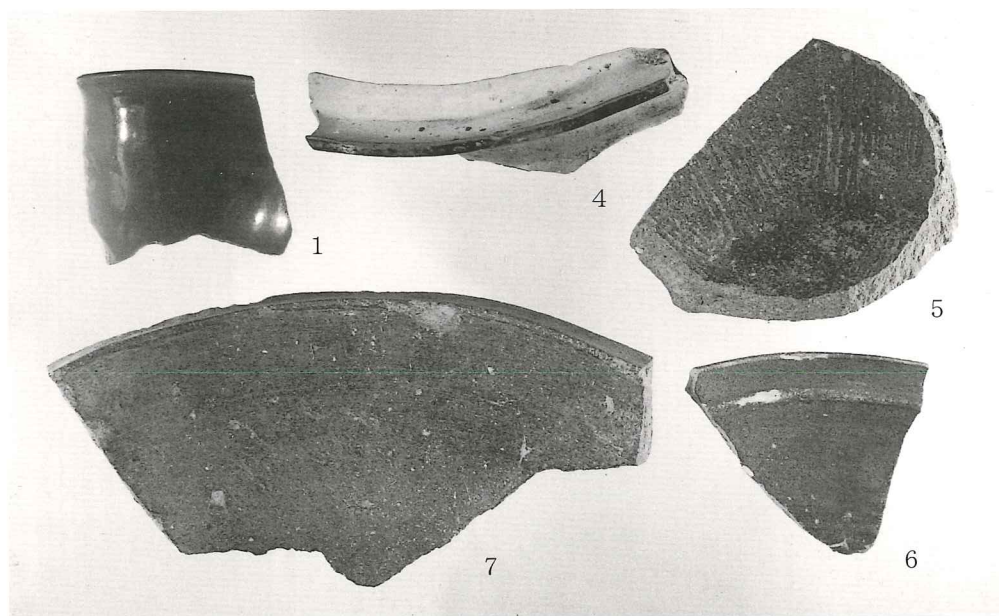
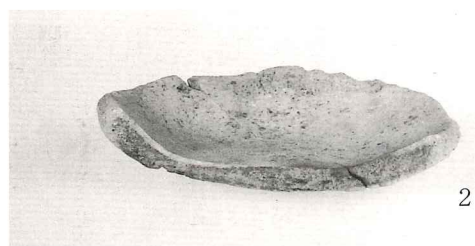
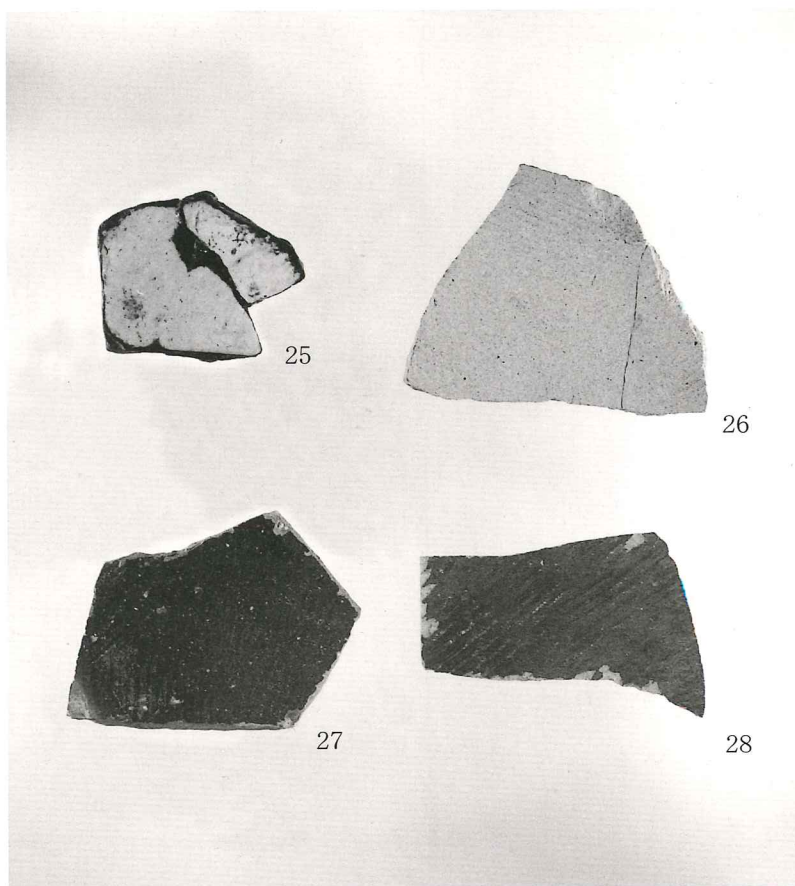
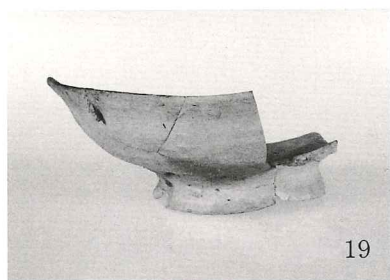
5. 土坑7完掘状況

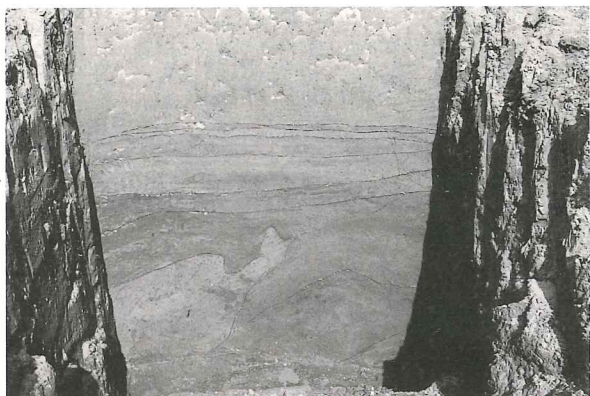


6. 土坑1周辺

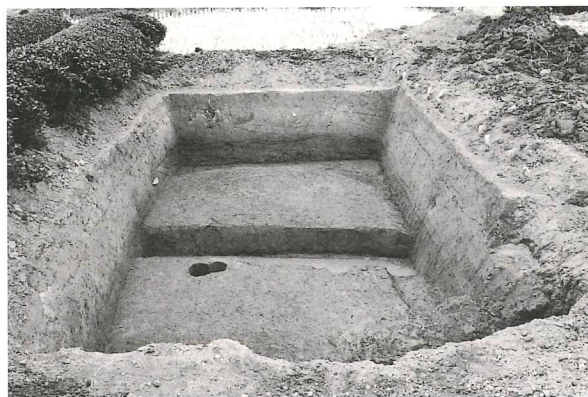
図版5 西向遺跡1次調査出土遺物



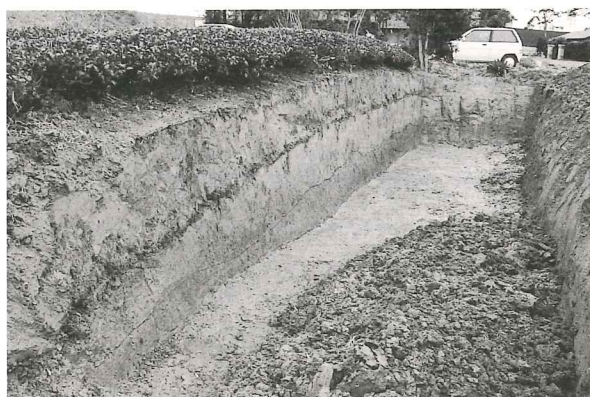




1. 1トレンチ土層断面



2. 3トレンチ全景(南より)



3. 4トレンチ全景(北より)



4. 4トレンチ東壁柱穴



5. 2トレンチ全景(北より)



1. 2トレンチ全景(東より)



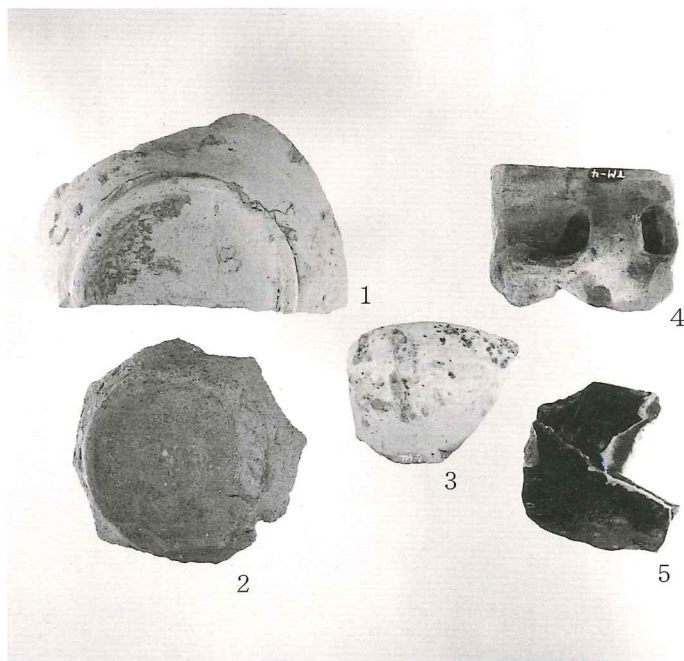
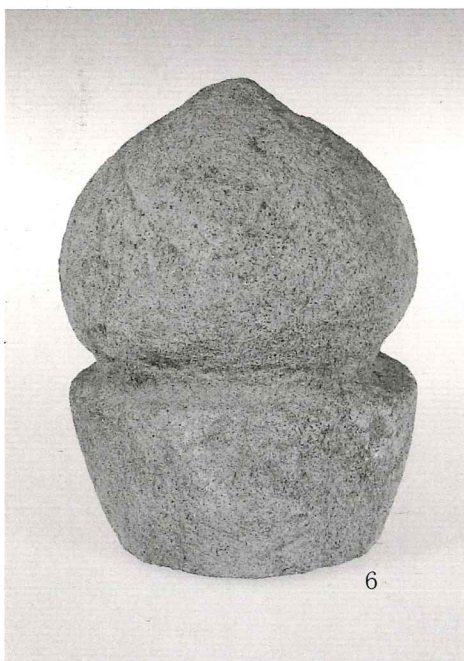
2. 2トレンチ西壁土層断面



3. 2トレンチ柱穴



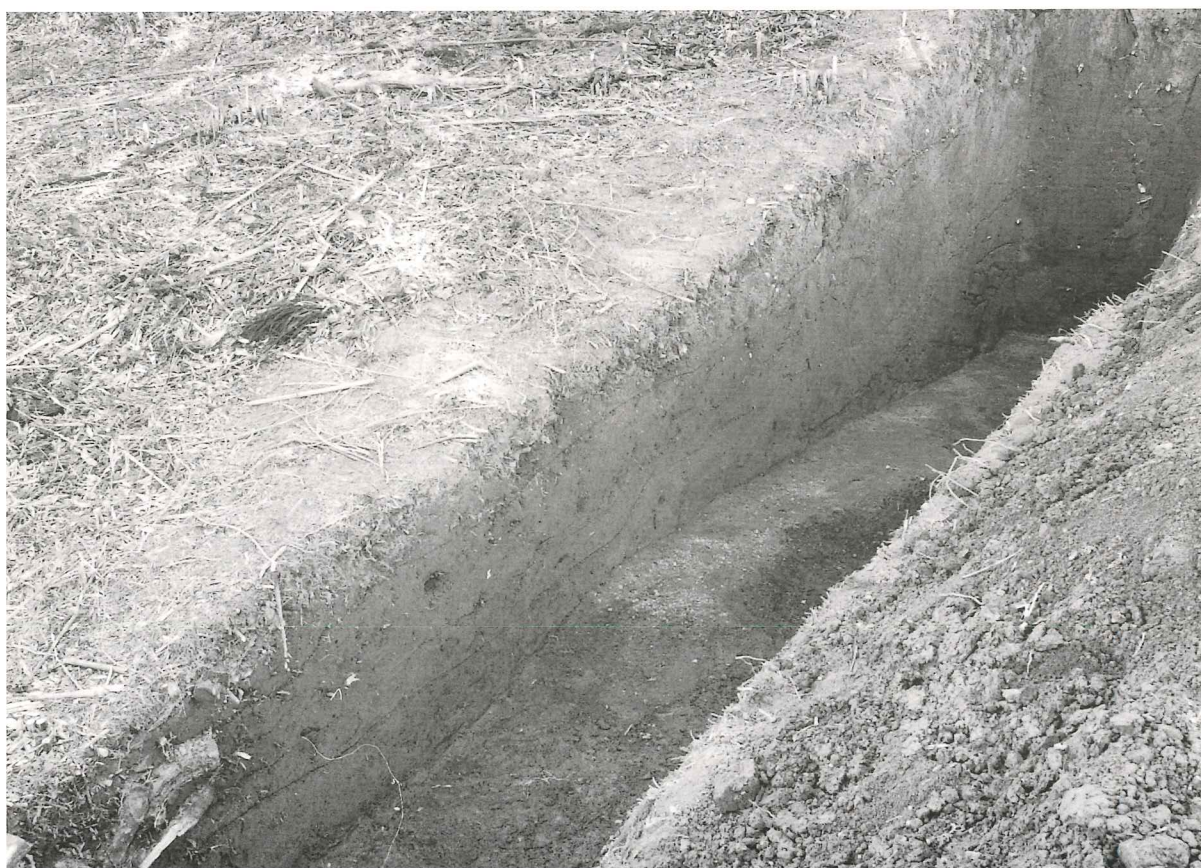
4. 2トレンチ柱穴



5. 富里旧堤防2次調査出土遺物



1. 土層断面



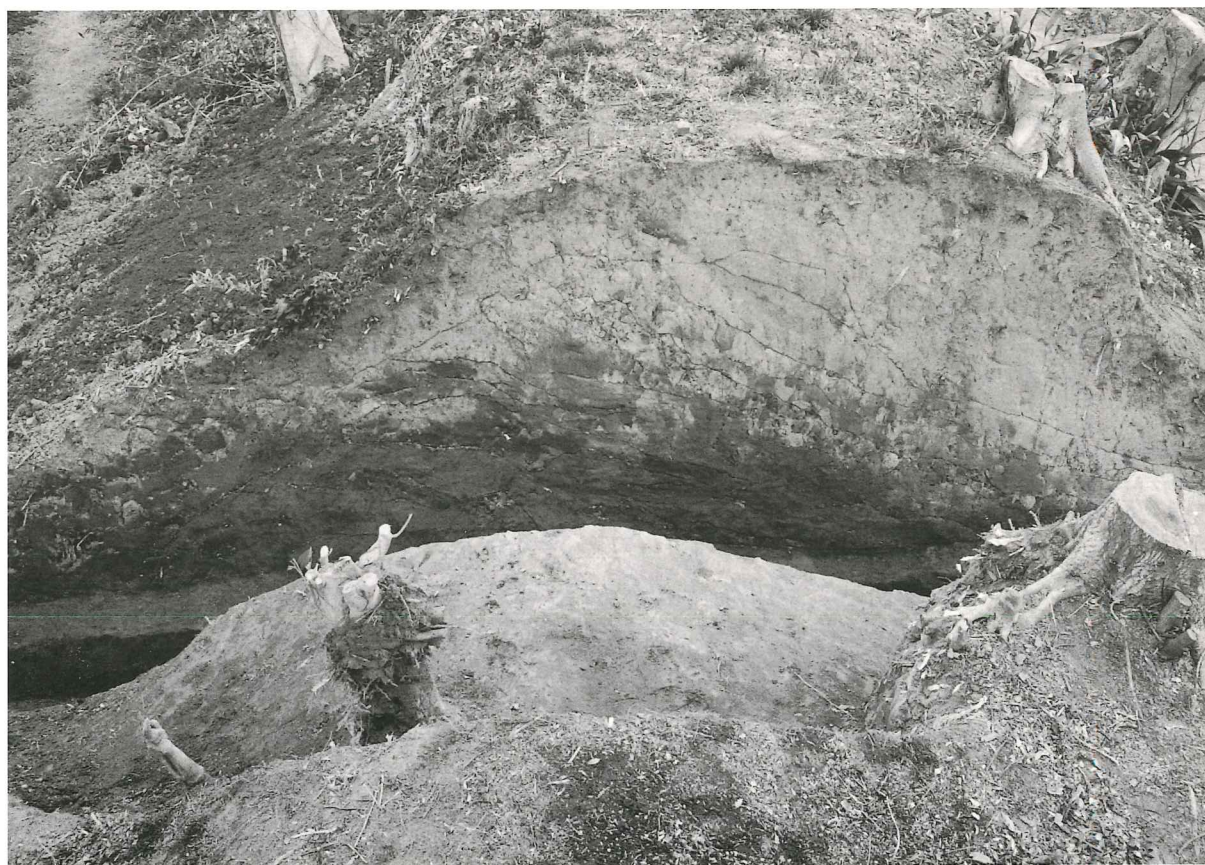
2. トレンチ断面



1. 全景(南より)



2. 南トレンチ全景



3. 南トレンチ土層断面



1. 北トレンチ土層断面



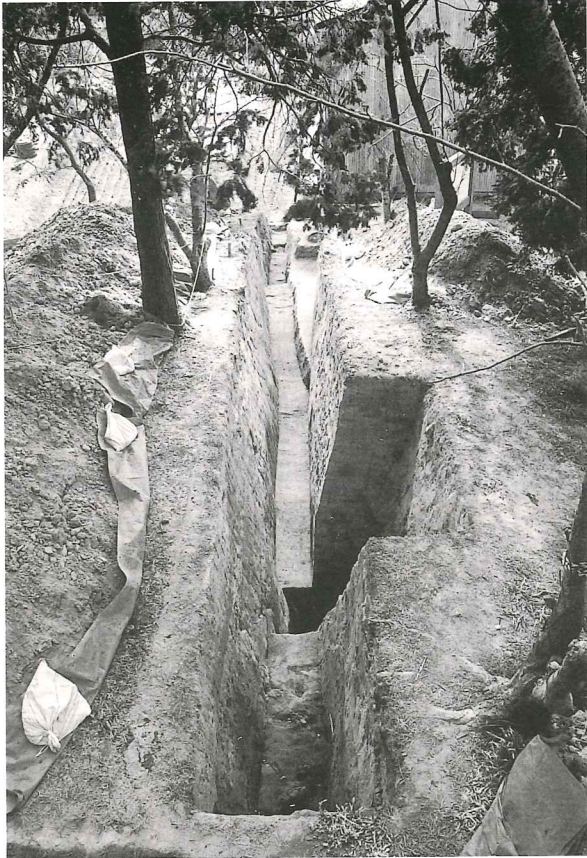
2. 北トレンチ全景



1. 全景(東南より)



2. 東裾(調査前)



1. 南トレンチ全景(北より)



2. 内耳鍋出土状況(北群)



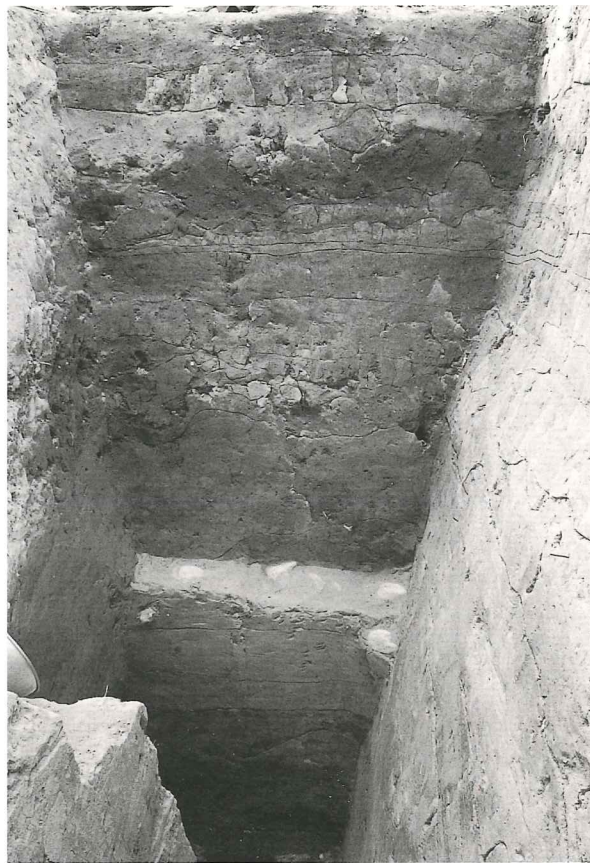
3. 内耳鍋出土状況(南群)



4. 中央トレンチ北面土層断面



1. 東トレンチ全景(東より)



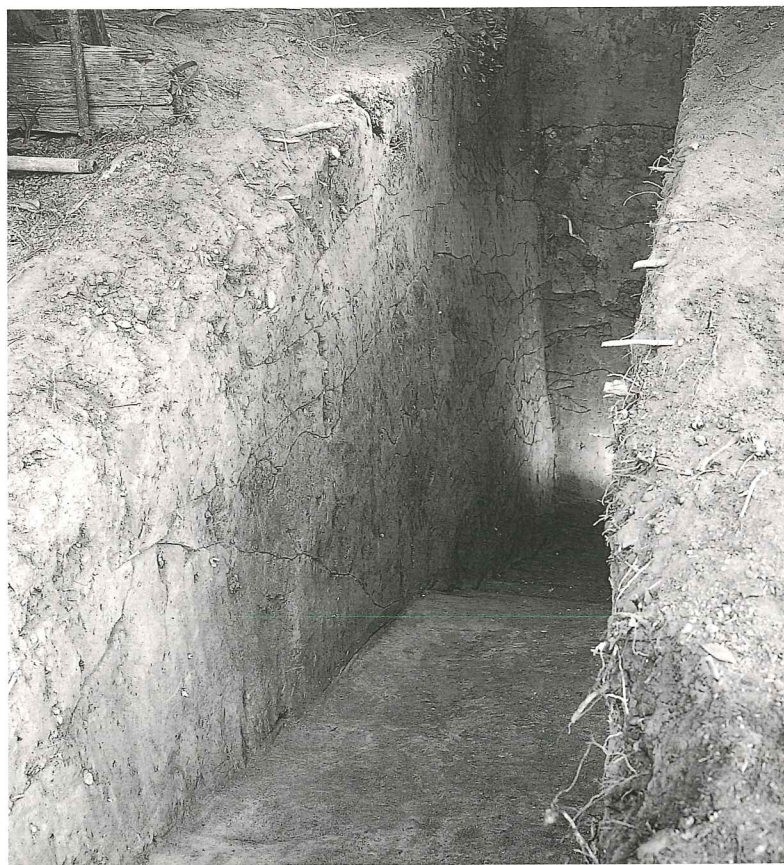
2. 中央トレンチ西面土層断面



3. 東トレンチ境溝土層断面



1. 北3トレンチ土層断面



2. 北4トレンチ土層断面



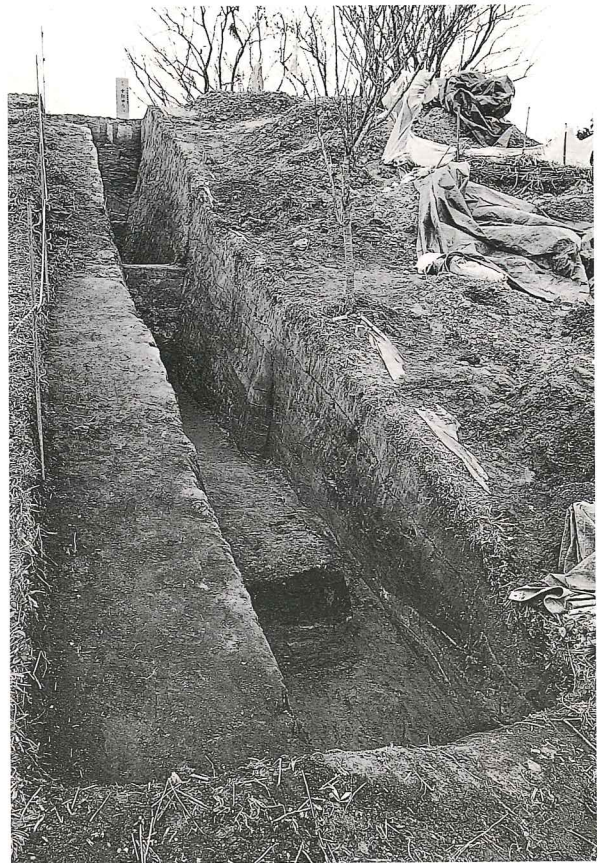
1. 全景(南より)



2. 南1トレンチ土層断面



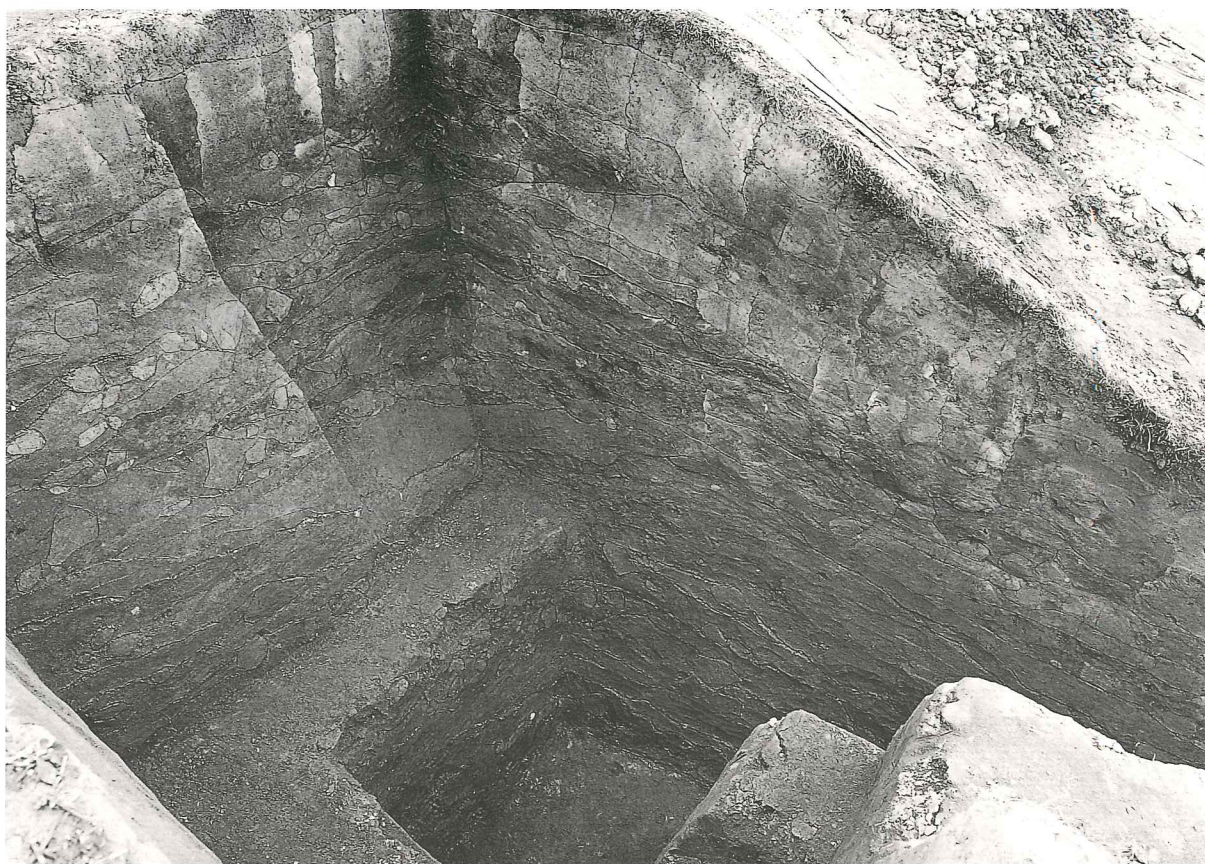
1. 南2トレンチ全景(南より)



2. 東トレンチ(東より)



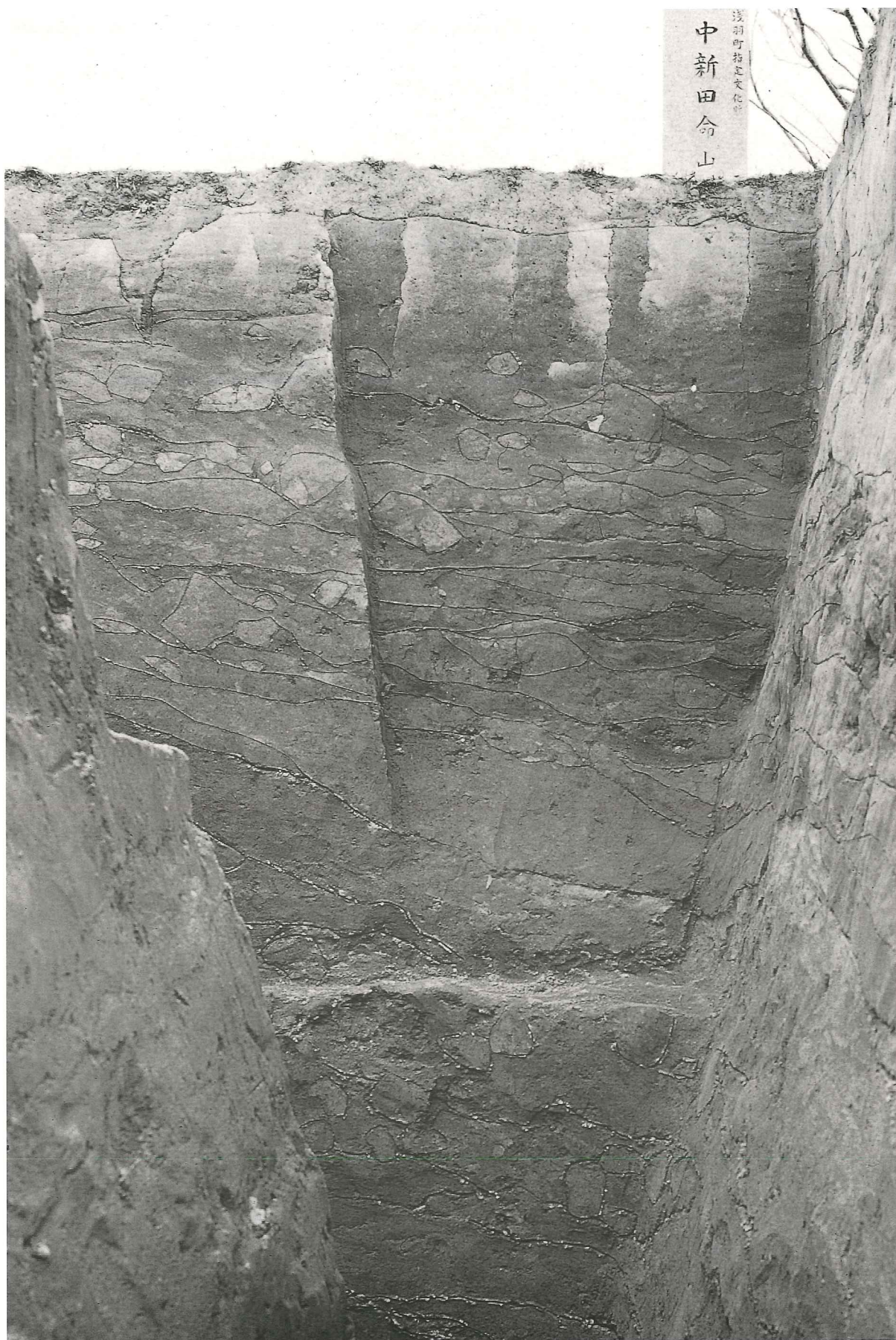
3. 南2トレンチ溝土層断面



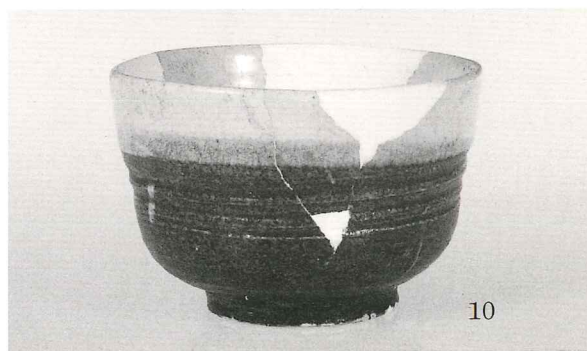
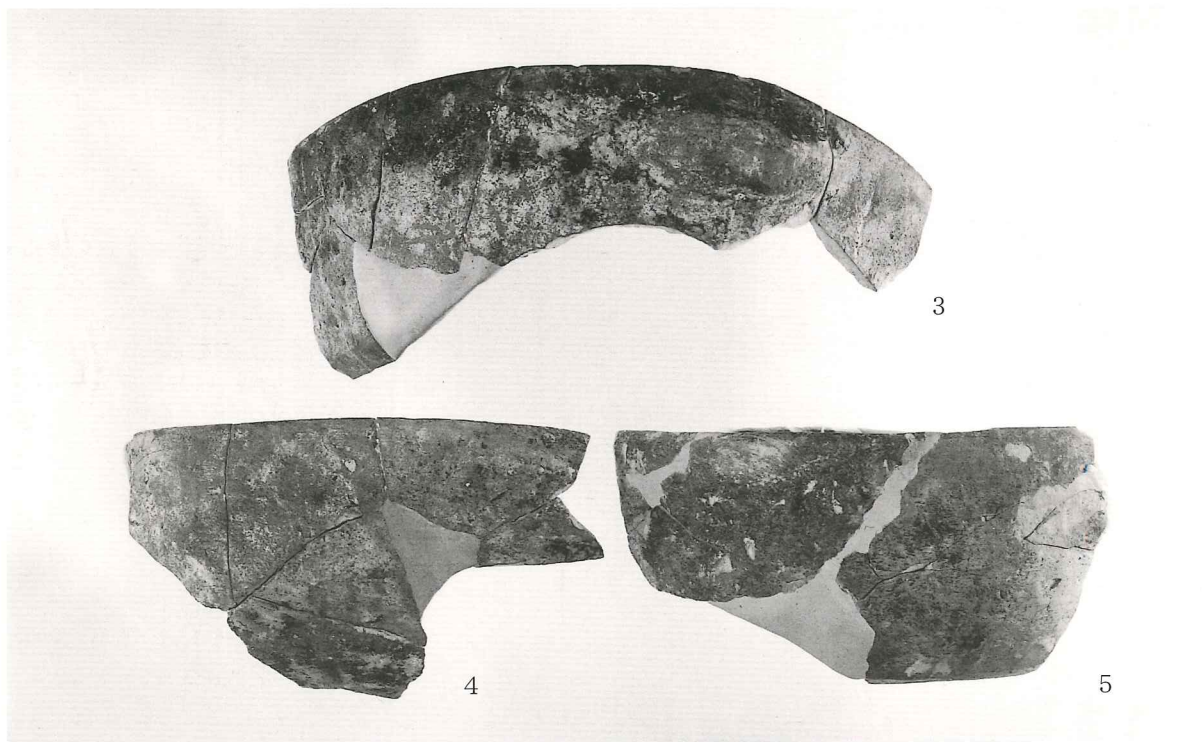
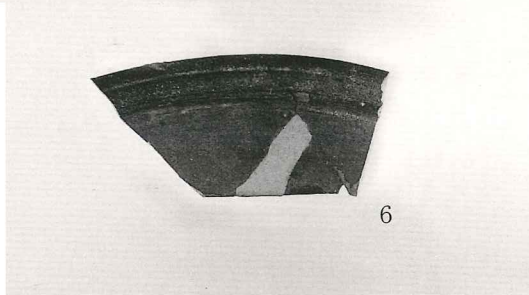
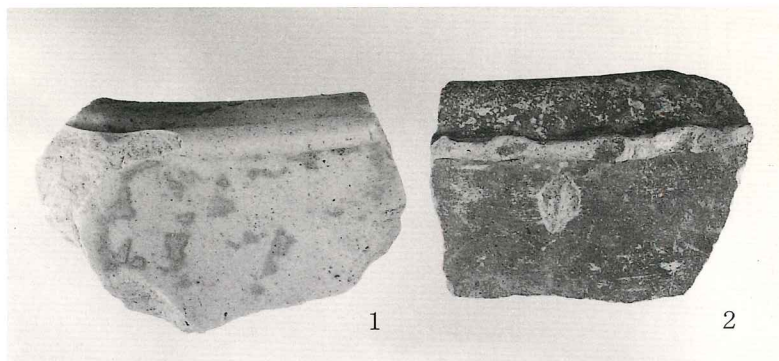
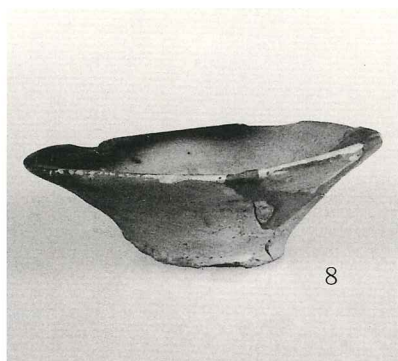
1. 東トレンチ西側土層断面



2. 南1トレンチ最深部土層断面



東トレンチ西壁土層断面



報告書抄録

ふりがな	あさばちょうないいせきはくつちょうさほうこくしよ							
書名	浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ							
編集者	山本義孝							
編集機関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel (0538)-23-2424							
発行機関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel (0538)-23-2424							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	電話番号					
にしむかい いせき 西向遺跡	しず おか けん 静岡県	22481	54	34°42'21"	137°53'56"	1次 19940916~1128	380m ²	1次 河川改修
	いわ た ぐん 磐田郡					2次 19950309~0320	137m ²	2次 工場建設
とみさと きゅうていぼう 富里旧堤防			53	34°41'53"	137°54'6"	1次 19930208~17 2次 19910117~28	480m ² 850m ²	1次 倉庫建設 2次 宅地造成
おお の いのちやま 大野命山	あさ ば ちょう 浅羽町		58	34°40'43"	137°56'59"	20021002~1218	665m ²	学術調査
なか しん でん いのちやま 中新田命山			59	34°40'35"	137°57'38"	20021002~1218	830m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
にしむかい いせき 西向遺跡	集落	弥生後期・中世		土坑・掘立柱建物		弥生土器甕 山茶碗 中国陶磁器	両命山は延宝8年(1680) より数年の間に築造	
とみさと きゅうていぼう 富里旧堤防	堤防	中世(16世紀)		堤防		内耳鍋・五輪 石塔(空風輪)		
おお の いのちやま 大野命山	築山	近世前期 (17世紀第Ⅳ四半期)		避難所の築山		内耳鍋・古銭		
なか しん でん いのちやま 中新田命山	築山	近世前期 (17世紀第Ⅳ四半期)		避難所の築山		近世磁器		

静岡県 磐田郡 浅羽町

浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

2003年3月31日発行

編集・発行 浅羽町教育委員会

印刷 静岡県磐田市二之宮 251

株式会社 山田印刷所

TEL(0538)35-6151
